
同じ空の下で

嘔吐

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

同じ空の下で

【Nコード】

N8424X

【作者名】

嘔吐き

【あらすじ】

救いようが無い人生に飽きて、死んで、何故かワンピースの世界に生まれ変わってしまった主人公が好き勝手するお話。

プロローグ

「おい、あの刀くれ」

「へ、へい！ビッグボス！」

怯えるように応える店員。見ていて面白いと感じていたのは1週間くらいだったかね。
この腐ってる世界、まさか自分が知ってる世界だとは思わなかったわ、最初。

そう、想いに耽っていると慌てて怯えながら刀を俺の前に差し出す店員。それを受け取る。

「お代はもちろん結構です！今後ともご贖いにおねがいします！」

「もう会う事もないかもしれんな、達者に暮らせよ」

「へ？」

「じゃあな」

困惑する店員を尻目に、放置して店を出る俺。
何がなんだかわからないだろう？俺も最初はよくわからなかったんだよ。

まあ少し愚痴聞いてくれよ。

俺は一度死んだんだよ。

友達と思っていた奴には裏切られ、家族にも裏切られ、恋人にすら裏切られて殺してな。

辞世の句は「飽きたな…」。だったからな。自分でも笑っちゃう。

…んで、人生に飽きて死んだと思ったたらなんということでしょう！赤ちゃんになつてたんだよ。

びっくりつてもんじゃなかったね。また生きなきゃいけないのかよめんどくせえってのが最初の感想だったわ。

また面白みの無い、三文芝居の人生生きていかなきゃなんねえのかってな。

だが同時にやり直せるんじゃないか？とか淡い期待もしちゃったわけよ、そりゃもう入学したての小学一年生が友達100人できるかって具合に。

だがあめえ、そりゃわたあめにいちごみるくかけて食うよりもあめえよ。

三歳くらいの頃だったかな、自分の産まれた環境が異常だったことに気付いたのは。

なんともまあスラム街のような場所だったってのが最初の感想。

けど何故か色々な本があるから読むわけだよ。とりあえず自分が死んでから世の中どうなってるのかわかって。

そこでびびったね、酷いカルチャーショックってレベルじゃない。

グランドライン？偉大なる航路？は？なにソレおいしいの？食えるの？ってなったわ。

どうやら第二の人生は漫画の世界らしいって事にはじめてそこで気付いたわけだ。

んでまあ放心したり、すげえわくわくとかもしちまったんだけど、まあそれも甘かった訳だ。

俺の生まれた街、ただのスラム街じゃなかったんだよ。
地図上にない、”存在しない街？だったんだよ。

しかもまあ生まれてすぐとかは両親もなんか普通な感じで気付かなかったんだが、3歳くらいの頃から虐待つつか、まあそういうもんが始まったわけ。

なんかアルビノらしいわ俺先天的な、しかしまあ漫画の世界だからだろうか、真っ白で綺麗な髪に真っ赤な眼だぜ？リアルじゃありえねえわ。

あと、読む本を自重しなかったから気味悪がられて、それから酷くなっただってのもあるな。

哲学書やら、航海術、戦闘用の本まであるじゃねえかって、うきうきしながら読み倒した訳よ。

だっけしかたねーじゃん。こちとら前世？の記憶持つて生まれてんだからよ。退屈すぎて仕方なかったんだわ。

お前考えてもみろ、精神年齢？23の奴が赤ん坊に生まれて3年我慢したんだ、それくらい勘弁しろ。

ただ、自分の産んだガキを悪魔呼ばわりするのはマジ漫画の世界すげーって思う前に、こいつら倫理ってもんないのかって思ったね。
まあ俺が倫理なんてもんを語っちゃ悪いんだがな。生まれた場所もスラム街みたいなもんだし。

んでまあそうこうしてる内に5歳くらいになった頃だったかな。
両親殺されたわけ。この街じゃそんなモノ日常茶飯事。んで俺も殺
されるのになって、その両親殺した奴黙って見続けたら。
「お前面白眼をしているな」。とかほざいて、俺について来いとか、
なんだかんだ色々あってそいつに生きる術？とやらを学んだ。

どこの黒猫だよって思ったわ。髪白いけど。

んで、様々な事があって街のボスになりました（笑）って事。それ
があのだ店の態度に繋がるわけ。
両親殺されてからもう10年か…、もう15歳なのにこの8歳くら
いにしか見えない身体。
昔はなんで成長しねえんだよ…俺の人生詰んだ、死んだ、スイーツ
（笑）っておもったんだが、この身体でも動けば問題ない。

女装せずとも女にしか見えないこの容姿、これは利用できる。んでまあ黒のワンピースなんてものを着てるわけだわ。相手を油断させるには第一印象。これだね。このくさったれた街でも通用するんだ、外の世界でも通じる。

見た目は8歳くらい、中身38歳のオッサン。それが俺。マジワロス。

その10年何があつたか教えろって？まあまた機会があれば語ろうかね。

「船、食料、水…うん、忘れ物はねえや」

これから俺は海に出る。この街に居たらほとんど外の情報なんて手に入れない。

退屈だ。それじゃあいけない。せつかくの第二の人生だ、しかも漫画の世界、好き勝手に面白おかしく生きてやろう。

「さらば腐ったれた街」

この濁った空気と、暗い空にさよならしようか。

グランドラインとやらには何か面白いものがあるだろうか。そう淡い期待をしつつ海に出た。

ニユーゲートとシーゲートって似てるよね（前書き）

あっちのほう全然進まなくて、気分転換したらのってしまった。
ただの見切り発車で、プロットなんてない。

ニューゲートとシーゲートって似てるよね

やあ、俺だ。

いやあ、海に出て速攻で海賊に出くわしちゃったときは自分の運の無さを嘆いたね。

なんだよ、こんな世の中間違ってる！僕が世の中を変えてやる！とか心にも無いことをほざきながら海賊斬りまくりました。

俺は5000万ベリーもする賞金首だぞとかなんかその船の船長ほざいてたけど、周りの海賊は殺気とばしたらなんか意識なくしてつたから斬り放題だったし。

この船長とやらもほとんど動かないまま斬ったなあ。ありえねえ、悪夢だ。とか言いながら死んだっけ。辞世の句としてそれはどうよ。

買ったというか貰った刀、これすんげえいい刀みたい。刃こぼれないし、肉、骨斬っても切れ味が鈍らない。

なんだこのチート刀。何の材質でできてんのかわからないけど。

そう思いながら、身の丈ほどある刀を背中にしまい、この海賊船の金やら食料水、めばしいものを掻っ攫っていく。

「海賊狩って生計立てるのも面白いかもしれないな、まあ海賊じゃなくてもいいけど」

グランドラインでこのレベルか、俺の居た街、糞やべえ街だったんだな。

こいつらなんてあの街の子供ですら楽勝だろ。弱すぎる。

自分の船に強奪した物品を入れて、海賊船を後にする。
んでまあとある島のとある港街に着いたわけ。

いかんせん情報が少なすぎる。情報は大事だ。漫画の世界なんだが、
一体いつの時代なのかがわからねえ。

そんで聞き込みとかまあ、街の人に色々聞いて回ったわけ、
したら驚きの白さ！じゃない、事実がわかったんだよ。
注目のルーキー・ゴール・D・ロジャーどうのこうのとかいう話、
聴いた瞬間俺は頭を抱えたね。

原作より50年くらい前じゃねえのこれ…、いやまあぜんぜん知らないから面白いだろうけどさ、モノには限度があるだろ。

はあ…仕方ない。原作も糞も無いし、自分が覚えてる重要人物だけは勝手に殺さないでおこう。下手にストーリーが変わるとつまなくなる可能性がある。

退屈だからあの糞みたいな街をでたんだから。

そしてまあ目ぼしい情報とか色々まあ補給して、港街を出てまた航海ですよ。

ルーキー時代のロジャーに会うのも一興か、と思って出たんだが、すぐ出会えるほど甘くねえだろうなあ…。

「ん？」

港から出てすぐなんか、海賊船があらわれた！って感じで出くわしてしまったわけだが、この時代確か、海賊は少なかったんじゃないかな？

俺の海賊とのエンカウント率高すぎるだろ。あほか。Fuck you ぶち殺すぞ海軍。

まあいいや、とりあえず襲って金品強奪しとけば金に困らない、何事も資本が大事。

せいぜい楽しませてくれよ？怖い怖い海賊サン達。

side とある海賊

仲間が小型船が近づいてくるぞって叫んでだから見にきたら中からガキが一人出てきやがった。

命乞いでもすんのかね。クヒヒ…。

仲間の一人がそのガキに話しかけた。

「おじょーちゃん、一人で船旅かい？危ないよ、おじさんたちと一緒にきな」

「親切なおじさんですね、下心みえみえですよ」

そうガキが言った瞬間仲間の首が飛んだ。
一瞬なにが起こったかわからなかった。

「おいやろつども！仲間がやられた、手加減なくていいやつちまえ！」

ふざけたガキだ、ぶち殺してやる。捕らえた後たっぷり楽しんでかな。大人の俺達が現実の厳しさを教えてやるよ。

「おらぁ！」

だが攻撃がガキに当たらない。追いかけてみれば仲間はいつの間にか首から上が無くなっていた。意味がわからない。なんだ？これは？

不気味に感じ、恐怖を感じた時にはもう遅かった。

「また、雑魚ばかりだった、つまんなーい」

「お、おい、おめえ何モンだ？ただもんじゃねえな、よかつたら仲間になんねえか？待遇は望むがままにしてやる」

「はー？意味がわかりませんしおすし。俺と出会ったときからもう決まったことなんだよ」

ガキを仲間に引き込もうとしたら、どうやら断られたらしい。
ちくしょうもつ、やるしかねえ。

「そうか、交渉決裂だな、こう見えても俺は賞金額7000万ベリ
ーの大物だぜ？ガキが倒せるかな？」

そついいニヤリと笑いかけてやる。

「あんたが7000万？がっかりだ、俺の金銭感覚じゃお前は20
0ベリーくらいだ」

「てめえ！なめた口きけなくしてやる！！」

ふざけやがって、下手に出てればつけあがりやがって！
ぶち殺してやる。もう我慢ならねえ。

「もう遅いよ、糞ガキ。見た目で人を判断しちゃいけないんだぜ？
親に教わらなかったのか」

「な…」

何言つてやがると言おうとしたが、言葉が続かなかった。
視界がぐるぐる回る。

何が起きてるのか俺はわからなかった。

そして最後に見たのは自分の身体だった。

s i d e o u t

はー…まじつまんねえ。

これが7000万ベリー？馬鹿なの？死ぬの？
金額設定してる奴馬鹿だろ。5000万のより下手したら弱いぞこ
いつ。

…まあ愚痴つてても仕方ない。後は船内探索して、金品ちょうだい
して、さっさとずらかるう。

「なんだあ？さわがしいとおもったらガキが一人血だまりのなかに
いやがる」

船から眠たそうにでかい男が出てきた。
まだいやがったのか、めんどくせえな。
しかしこいつ、どこかで見たことあるぞ。どこだったかぱっと思い
出せないが。

「おいガキ、これをやったのはおまえか」

「だったらどうするんだ小僧」

どうせ寝過ごした下っ端だろう。何も期待できない。面白くも何と
も無いだろう。

「俺を小僧呼ばわり？グララララ…。面白い」

おいおい…、この笑い方。白ひげかよ。
つつか若い頃からこの笑い方かよ。マジワロス。
こいつは殺せねえなあ…。
手加減しながら適当にあしらうか。

「小僧呼ばわりが気に食わなかったかい坊や？ かかって来いよ、ち
ち ついてるんだろ」

「面白い、やってやる」

そして戦いが始まった。

s i d e 白ひげ

寝てたら船内がなにやら騒がしくなって寝るに寝られなくなった。
また喧嘩か？ 文句を言いに行こうと部屋を出た。

さっきまでの喧騒が嘘のように静まった。
何が起きてるんだ？そう思いながら船を歩いてソレを見つけた。

このガキ…なんて眼してやがる。

血だまりにぼーっと突っ立ってる、身なりは自分くらいの大きさの刀を持つ少女、賞金稼ぎでも乗り込んできたのかと思ったが目が違う。

何の感情も持ち合わせていない深い眼だ。死体だらけの中無表情、とてもただのガキとはおもえねえ。

「おいガキ、これをやったのはおまえか」

「だったらどうするんだ小僧」

俺を小僧呼ばわりか、ただのガキとは思わなかったが、この身なりで年上なのか。世界は広いな、面白い。

「俺を小僧呼ばわり？グララララ…。面白い」

そう返すと、少女は怪訝なこちらを伺うような目付きに変わった。

「小僧呼ばわりが気に食わなかったかい坊や？ かかって来いよ、ちち ついてるんだろ」

「面白い、やってやる」

ここまで馬鹿にされたらやらなきゃ男がすたるってもんだ。
どんだけやれるのかわからねえがあそんでやろう。そう軽い気持ちで挑んだのが間違いだった。

数回手を合わせただけでわかった。力量が違いすぎる。

「おめえ…何モンだ」

「レアポケモン！ だったら面白かったかな？ 何モンって言われてもねえ…」

なにやらよくわからない事を言ってるが、俺の速度、力についてこれるような奴は見たことが無い。

しかもこの少女は本気を出していない。

嫌でもわかる、刀を使ってないのだから。

「おめえの名前だよ名前、教えてくんねえか、何も知らない坊やの俺に」

少女はなにやら考える仕草をして。

「名前…ねえ…お前が勝ったら教えてやるよ」

「んじゃ本気だすぞ、ちびんなよ？おじょうちゃん」

s i d e o u t

はあ…、マジなんなんだ。厄日だな今日は。

なんでもないモブなら殺してよかったんだが、こいつは駄目だ。
こいつが居ないと色々と原作から離れてしまう。それじゃあめんど
くさいことになる。

しかも流石白ひげと言った所か。まだまだ若いヒヨッコ時代だから
なんとかなるだろうと刀も使わず素手で相手してたんだが…。
糞つええ、いやマジなんであんたあんな雑魚船長の海賊のところに
いるんだよ。マジねえわ。しかもまだ能力なんて使ってないぞこいつ。
いやいや、俺が手加減してるとはいえ、さっきまで海賊ぶち殺して
たくらいの力を出してるんだぜ？ねえよ素でこの戦闘力は。
こいつサイヤ人なんじゃね？…なわけねえか。

「おっと」

ぽーっと見ながら戦ってたらたまにヒヤっとする一撃をこちらに向
かって放ってきやがる。

「おめえ…何モンだ」

「レアポケモン！だったら面白かったかな？何モンって言われても
ねえ…」

おいおい興味持たれちまった。さつさとあしらって逃げたかったんだけどねえ…。

「おめえの名前だよ名前、教えてくんねえか、何も知らない坊やの俺に」

あー、名前ね。名の知れた海賊だか賞金稼ぎだと思っただんかね。名前なあ…、そーいや外の世界じゃビツクボスじゃ通じねえんだよな。

仕方ない、前世の名でいつか。考えんのめんどくせえし。でも、ただで教えるのはおもしろくねえ。

「名前…ねえ…お前が勝ったら教えてやるよ」

「んじゃ本気だすぞ、ちびんなよ？おじょうちゃん」

そう言っただけにやら構える。

マジかよ、ここ船の上だぞコラ。出すのか？出してまうのか！？なんか白い光？かんか知らんが、力をためてるのはわかる。

アレだろアレ、グラグラの実の力だっけ、大気だろうが大地だろうが割っちゃうチート。

やめてよね、本気出されたら僕が君に敵う訳が無いじゃないか。

こちらら悪魔の実なんて食ってない普通の一般ピーポーだぞ糞。

「ふんっ」

マジでやりやがった。とつさによけたが、よけた後ろが割れてる。
なにこれ、頭おかしい。

いや、ねえよ。本気出さないと俺が死ぬ。それじゃつまんねえ。

「んじゃ俺も本気出さないとな、…名乗れよ餓鬼。戦の作法も知らねえか。ああ？」

そう言いつつ俺は刀を抜く。

もう手加減なんて馬鹿な真似はできない。

「そっちは名前教えてくんねえのに俺の名前は尋ねるのか」

そう言い白ひげはまた力を溜めて俺に向かって拳振りぬく。

「気が変わったんだよ、俺はミコトつつうんだ、覚えとけ糞餓鬼」

そして試しに気づけばいモノを刀に纏わせて白ひげの放ったモノを斬ってみる。

「てめえ…なにしゃがった…」

そしたら案の定そのモノが文字通り”斬れた？。どうやら俺は知らない間に覇気？だったかアレを習得できていたらしいな。
俺の考え通りだった。それなら問題ない。

「早く名乗れ餓鬼」

「ちっ、エドワード・ニューゲート、それが俺の名だ」

そうそうニューゲートだ、どこぞのHDD作ってる会社に似た名前だったな。

アア…笑っちゃう、何の巡りあわせだよ。第一ワンピース原作人物発見！ってレベルじゃねえよ。

所さん呼んで来い。

覇気纏わせながら戦うのは疲れるんだよ。あほか。

「んじゃ行くぞ」

そう俺が言つてニューゲートに斬りかかる。

この時はまだ、この時の事が後々に起こる事に影響を及ぼす事は俺は予想していなかった。

家族？なにそれ？食べるの？

結果だけ言おう、白ひげには勝った。

勝ったはいいがお互いぼろぼろ、ぎりぎりの戦いだった。

船は残ってるのが可笑しいくらいに砕けてるし、海は割るわ、大気は割るわ、なんだこのチート野郎マジありえねえ。勘弁してくれよおとつぁん。

こいつならあの街に居ても生きていけるだろうな。外の世界の人間にもこれくらい強い奴がいたとは思わなかった。流石白ひげ…。俺もまだまだだと思いつた限りである。

「これが大人と子供の力量差だ、わかったか？小僧」

「そういうおめえもぼろぼろじゃねえか…グララララララ」

ちっ、確かになめてたよ。

まだ若いヒヨッコ時代だから楽勝だと、そう思っていた時期がありました。

んなことねえ、あほか、糞チート野郎。

俺も悪魔の実食べようかな…。

海賊船を全壊させないようにやってたんだろうがそれでもこれはもう使えねえだろな。

しっかしいつ沈んでもおかしくねえなこの船。

そんな船の上で大の字に寝転がるニューゲート。マジ肝っ玉据わっ

てやがる。かけえ。

とか考えつつ残ってる柱みたいなモノにもたれ掛かっている俺も大概だな。

ここにベツトがあれば、びっくりするほどユートピア！…じゃねえか。あほか。

そんなあほな事を考えていたらニューゲートが驚くべき事を言ってきた。

「おめえ…俺の家族になつてくれねえか」

「は？ぱーどうん？」

「だからよ、家族になつてくれねえか」

俺は呆れてしまう。口をあんどぐりあけて。

はたから見たら馬鹿に見えるような状態だろう。

だが、これは予想でしなかつた。仲間殺した奴を家族？おいおいおまえ仲間殺しご法度なニューゲートさんじゃねえのかよ。

「なんでだ？理由を聞いても」

「俺はな、家族が欲しくて海に出たんだ」

なんか白ひげさんのありがたいお話がはじまった。

まあ簡単に言うとな家族を求めて三千里みたいな？

んでここに居たのは家族になっってくれるような奴を探して家族にしようとしてたって感じが。

けど、こいつらは馬鹿にして取り合わなかった。だが自分ひとりじや海に出てもすぐやられるんじゃないかねえかって事で鍛えて、そんで独り立ちの時を伺っていて。

そんでそろそろ独り立ちって時に俺が船でそいつら皆殺しにしてたって訳。

家族ねえ…家族の何がいいんだか、今の僕には理解できない。アンインストール。アンインストール。

「すまんが、俺は家族とやらの幻想を抱いていない。誰も信じないし、信じたくも無い。そういう奴なんだよ、他当たれ」

「女一人じゃあぶねえだろ？どうしても駄目か」

ああ、こいつまだ俺が女だと思ってるのか。

「こんな格好してるが俺は男だ、これは油断させるための格好、そ

んでどうしても駄目」

口を大きくあけて呆然としてるニューゲート。これは一枚写真にとっておきたい、そして年食った白ひげに見せてやりたい。でもカメラねえや。

「男だったのか…、じゃあせめて友になつてくれねえか？」

そついいながら座り、ほら握手といわんばかりに手をだしてくるニューゲート。

はあ…、しかたねえな。

「友ねえ…、まあそれくらいならいい。はい握手」

「よろしくな！ミコト！グララララ」

そう言いすんげー嬉しそうにするニューゲート。ちつ、何が嬉しいんだか。俺にはわかんねえぜ。

「さつて、んじゃこのままお前置いていくわけにはいかねーし、港町まで俺の船に乗せてってやる」

「グラララララ」

なにが可笑しいんだよ。糞。てめえに野垂れ死にされたら俺が困るんだよ。

「笑ってねえで早く来い小僧、置いてくぞ」

「おいおい待ってくれって。そんなカリカリするなよミコト」

そう言いながらまたグララララとか言いながら笑いながら俺の後を追ってくる。

マジなんなんだよ。何が楽しいんだかわけがわからねえ…。

この世界の人間ってこんな奴ばかりなのか？

いやそれはないな、あの糞みたいな街じゃみなかった。

多分こいつくらいだろう、うん。そう思いたい。

…んでまあ、ニューゲートを港町に下ろして。何日か滞在してたんだが。

色々とルーキー達が台頭してきたらしい。

うかうかしてられねえな小僧、とか言いながらニューゲートをからかったり、何度も一緒にいかねえかという誘いを断り続けながら。まあ色々楽しくおかしく飲んだり食ったりしたわけだ。

これから海に出てまたすぐにニューゲートに会うとは限らない、それに結構原作じゃ好きなキャラだ。

色々話して、遊んだりした。

街に居る人間から色々面白い話も聞けた。そろそろ飽きてきたって感じた日に俺はニューゲートに別れを告げる。

んでまあ俺はまた海に出たわけだ。

とりあえずわかった事は、今のままでは白ひげ若いバージョンクラスの悪魔の実の能力者相手だと、まだ今の俺じゃあ下手すると負けるって事だ。

今後の方針は、覇気？とやらを使いこなせるようにすること、後は六式くらい覚えとくか。

ソリ！ソリ！ソリソリソリー！んゝ切れてなあい。なんつって。前者は海賊狩りながら気を纏ってって感じで自然とできそうだが、後者はそうはいかない。

海軍の基地でも潜入して覚えるしかねえよな。あー…めんどくせえが仕方ねえ。

そう思いながらニューゲートを下ろした港町を眺めながら、その地を後にした。

side 白ひげ

「いったか…」

思えば不思議な奴だった。家族と言う単語を俺が言っただとたんものすごく嫌な顔をした。

過去に何かあったのだろう。無表情だった奴がものすごい嫌悪感を隠すこともせず、言葉でもきっちり嫌！って言ってたしな。

本来なら家族になろうだなんて言わなかった。

だがあいつの眼だ、何も映していないように見えてその奥に見え隠れする寂しさという奴。

何日か過ごしてわかった事は、あいつは自分以外の人間をまったく信用していないって事だ。

食いに行こうと誘っても、自分で作るとかいつて食材を自分で買って料理して食ってた。

言い方は悪いが極度の人間不信に近い。

寝るときも座って寝ているようだった。灯りも消さずに、何かに怯えているように。

あんな強ええのに、なにをそこまで恐れているのか。俺にはよくわからなかった。

こいつを独りにしちゃ駄目だ。直感でそう思った。

だがミコトは家族には絶対ならないと言う。ならせめて友にでもと。

これが正しい選択かどうかなんてわかんねえ。

ただ無理やりやっても仕方の無い事だ。

いつかあいつに認めさせよう。

俺は裏切ったりしねえ、信じてもいいんだって事を。

「さて、俺もうかうかしてられねえな」

まだ見ぬ家族、できるならミコトを今すぐ家族にしてえが、今のあいつに何言ってもきかねえだろ。

いつか、いつかきつとわかってくれる。

そんなときの俺はそんな感じで簡単にいくと思ってたんだ。
まさかそれがあんな風になるなんておもってもみなかったぜ。

家族？なにそれ？食えるの？（後書き）

人物プロフィール

ミコト

地図上にも無い街、通称暗黒街と呼ばれるところに生まれる。

性格は自分がよければ全てよし。

気に食わない奴は消す。自分勝手。そして人間不信。

漫画の世界に生まれ変わったからといって特に何も変わるわけでもない。そう本人は思っている。

前世の記憶の影響からか、家族というモノに何も感情を持っていない。

生まれ変わってから5歳くらいまで感情を出していなかったせいか、表情というものが出ない顔になってしまっていて、はたから見ると無表情。

そのせいでよく誤解されがちだが彼自身は感情豊かである。

たまにみせる笑顔は笑っていない笑顔、とても怖い。

容姿は君と紙ヒコーキと。の松野 鈴を幼くして黒いワンピースを着せたような感じ。ただし男である。

本人は白ひげをチート呼ばわりしているが、自身がとてつもないチートだと気付いていない。

その2

白ひげことニューゲート

言わずもがな、後の四皇さんである。

そしてまだまだ悪魔の実の力を使いこなせていない頃の未熟な時代のニューゲートさん。

それでもチート。糞強い。

ミコトに惹かれて、家族にしようとするも失敗。
だがあきらめてはいないらしい。

よよいのよい！

ちよりーっす。私ミコト、今あなたの後ろに居るの。
時が過ぎるのは早いものだ。もうあれから10年近く経っている。

10年の間になにやってたかって？そりやおめー海軍の基地に忍び込んで六式とやらを学ぼうとしたりしたんだよ。

だがいかんせん考えが甘かった。支部にや書物くらいしかなかったし、海兵も支部じゃあ六式の訓練なんてしてなかった。

んでまあ支部の海兵になって海軍本部にちよっくらお邪魔して、六式覚えてまいりました。

いやあ、言葉にしたらすんげー短いんだけど覚えてんのめんどくさかった。

つつかありや誰でも覚えられるシロモンではないわ。

マジチヨリソーリソリって感じで。

んで真剣に訓練して4・5年？くらいして全部覚えてたわけ。

なんでかその間にてきとーに海兵として海賊捕まえたり、殺したり、街の治安活動とかしてたんだけどいつの間にか大佐にまでなったんだわ。

んでまあ六式覚えてし、用はもうねえわって感じで「飽きたからやめるわ。じゃあの」って部下に言って抜けたんだけどよ。いやあ何故か俺賞金首になってた。

抜けるとき止めてきた海兵のおっさんとか上司だった中將とか切り殺して抜けたのが駄目だったのかね？

関羽千里行ならぬ、ミコト千里行！つつう感じでやつちやつたんだが。

ちなみにガープ中將はなんか好き勝手色々な所行って結局会わなかったな。センゴク大將は居たけど。

んでまあその後の5年くらいは適当に前みたいに海賊船襲っては金品貰って。政府の貨物船襲っては金品、食料貰って、追いかけてくる海軍の軍船見たら破壊して武器やら食料貰って、
ついでに覇気の練習みたいな？そんな事を繰り返してたのよ。

そしたらたまたま街で見てた手配書の中になんと自分が映ってる手配書がある。白髪のコト1億8000万ベリーだなんて手配書が！俺海賊ちゃうで？善良な一般ピーポーやで？仲間なんて居ないし一人なのにとこういうことなの…。

でも俺悪いことしてないと思うんだけどな、基本海賊と海軍にしか手を出してないし。

政府の貨物船は、奴隷？とか人魚さんとかが囚われていて、助けてって言われたから助けただけなのにな？

まったく世の中おかしいよ！わけがわからないよ！

そんで今日もそろそろ食い物のストックがやばくなってきたから街か海賊船でおすわけを貰おうと考えていたらよ。
なんか目の前にでっかいくじらみたいな船がでてきた。

あれ？俺こんなでっかい船気付かないくらい考え込んでたのかな？
とかまあ馬鹿な事を考えてたら上からでっかい人が飛び込んできた。

「グラララララ…久しぶりじゃねえか」

「この笑い方、このでかさ…まさかお前はシーゲート…!!」

「ニューゲートだ…!!」

ちえっ、せっかくボケてあげたのに普通に返されちゃった。ミコトちゃんシヨック。

「しかしまあ…あの小僧が立派になっちゃって、今じゃ白ひげ海賊団って聞きゃ泣く子も黙るらしいじゃねえか」

「おめえさんほどじゃねえよ、ずいぶんと暴れまわってるらしいじゃねえか」

「暴れまわってるだなんて人聞きの悪い、まあなんだ、食い物とか底つきそうなんだわ、助けてくんね」

「グラララララ、友の頼みだ、乗れ」

そう言ったニューゲートのあとについていく。

「親父！何飛び出してんだあぶねえだろ！」

なんか見たことあるぞ、この頭は…この頭は間違いない！マルコだ。しっかしちーせーな、まあ俺よりは大きいんだが。

「なんだこのパイナップル頭のカキ」

しかしすげえ、この髪型は間違いなく世紀末。間違いなく汚物は消毒だヒヤッハー！だ。

「俺の息子だ、マルコってんだ」

「息子お？お前結婚してたんかよ、結婚式呼べよ小僧」

「親父に向かつて小僧だあ？何様だよめえはよい」

「おいパイナツブルのガキ、相手に凄む前に消火器を持って汚物は消毒だヒッハー！って言うつけ。その方が似合う」

「ああ？」

なんかすんごいマルコに睨まれちゃった。ミコトちゃんちょっと仲良くしようとジョーク飛ばしたただけなのに。ショック。

「ミコト、そのあたりにしといてくれや。おい大事なお客さんだ！客室まで案内してやれ！」

そう部下か息子かわからんが、近くに居た奴に命じてるニューゲート。様になるねえ。

なんだかわけがわからないという感じで困惑するマルコ。
やだなにこの子面白い。オモチカエリイイイイイイイ！なん
つってな。

「んじゃ客室で寝てるから、色々説明しとけ、ニューゲートの坊や」

「坊や扱いはやめてくれよ。もう俺もいい歳だ。グララララララ」

なんかすんげー嬉しそうに笑ってるニューゲート。マジよくわからないって感じのマルコ。

いやなんか面白かった。とりあえず案内役っぽいのがきたからついていって客室で寝とこ。疲れた。

side マルコ

突然親父が飛び出したと思ったら小さいガキを連れて戻ってきた、なんだかよくわからねえ。

「親父！何飛び出してんだあぶねえだろ！」

けど親父はすんげー嬉しそうににやにやしているだけ。

「なんだこのパイナップル頭のカキ」

目の前のガキが俺をガキ呼ばわりしやがる。
態度の悪いガキだ。親父が白ひげってわかっててやってんのか？

「俺の息子だ、マルコってんだ」

「息子お？お前結婚してたんかよ、結婚式呼べよ小僧」

親父が俺をこのガキに向かって紹介する。するとあるうことが親父を小僧呼ばわりしやがった！

「親父に向かって小僧だあ？何様だよおめえはよい」

ガキを睨みつける、だがガキは臆するどころかなにやらわけのわからない事を言いながらこつちをみて馬鹿にしたような笑顔で見やがる。

ちっ、なんなんだあのガキ。どこかでみたような気はしなくもないがあんなガキに舐められるなんて。

しかも親父は客だといって仲間に客室に案内するように言っている。

わけがわからない。

「親父、あのガキ何モンなんですか」

「俺の友でミコトつつんだ。アレでも俺より年上だぞ。白髪のミコトつつたほうが早いかな」

「なっ」

親父の言葉に俺は言葉を失った。

白髪のミコトつつたら、親父がよく俺達に話してくれる親父の友達だ。

そして賞金額トップクラスの賞金首の海賊。手配書で昔見た覚えがある。どおりで見たことあると思ったわけだよい。

しかも、ただ一人でありながら海軍だろうが海賊だろうが政府だろうが関係なく気に入らないものは喧嘩をうって、むちゃくちゃやってるって話だ。

「親父の友とは…、もっと歳のいった方だとばかり、まさかあのような少女だとはおもわなかったよい」

「何故かしらんがあいつは昔っからあのままの姿だな。ちなみに男だぞ、グラララララ」

またも俺は驚愕する。男？アレで？マジかよい。

「あいつにお前を鍛えてもらおうかと思っている。どうだ？マルコ」

「えっ？」

親父の言葉が最初理解できなかった。

あの人斬りのいミコトに鍛えてもらう？命がいくつあってもたりねえよい！

「そう、心配そうな顔すんな、あいつはお前がおもってるよりずっと優しい奴だ。グララララララ」

考え直してくれ親父。と何回も言ったが、まるで相手にされなかった。
俺の人生ここで終わるのかな…。

s i d e o u t

「えー…なんで俺がパイナップルボーイを鍛えないといけないのー？ミコトちゃんわけわかんないよ」

「まあそういうな、食料やらなんやらの恩返しだと思って頼む」

朝起きて、さあストレッツ マン体操でもしようかと部屋から出て甲板に出たらニューゲートに話しかけられた。

そしたらマルコを鍛えてやってくれないかだって？おいおい冗談きついぜボーイ。

ルー大芝とラッキィ池田がN Kの番組で共演するくらい意味がわからないぜ。

「なあ坊や、お前の大事な家族で息子だろ？なんでこんな殺人狂いのような奴に頼む？自分で鍛えてやりやいいじゃねえか」

「俺も鍛えたんだがよ、なんか足りねえなつて、俺じゃアレ以上あいつを強くしてやれねえと思った。だから頼む」

頭を下げるニューゲート。大男が頭を下げるってなんかちよつとシユールだよな。

なんて馬鹿な考えをしてたら失礼か。

こいつが頭を下げるなんてよっぽどだな。しかたねえ…か。

「…わかったから頭を上げる。だがお前の理想通りとは多分いかねえぞ？強さの定義なんて曖昧だ。それにそういうものはゆっくり熟成させるもんだろ」

「引き受けてくれるか！ついでに時間があつたら他の息子達も頼んでいいか！！」

すんげー嬉しそうな顔をして顔を近づけてくるニューゲート。ちゅちゅですか？男割りです。

「はいはいはい…この際一人も二人もかわんねえしいいぜ…そんな嬉しそうな顔すんな。港街までだぞ？」

「おう、それじゃあ頼んだぞ。グラララララ」

はあ…港街まで何ヶ月かつかな…。安請け合いしすぎたか…。けどまああんなに嬉しそうなニューゲートを見ると、まあ悪くないかと思ってしまう自分が居た。

side 白ひげ

引き受けてくれたか…。

あいつは見てて危なっかしい。本来なら俺が息子達を鍛えるんだが、ちょうどいい機会だ。

息子達に生き残るための術を教えてもらおう。

その間に人とは何か、家族とは何かというものをミコトが感じ取ってくれればいいんだが。

というよりそれが目的だ。

あいつに足りないモノは信頼できる仲間だ。いくらあいつが強くて
も一人じゃその内限界が来る。

友として、俺はそれだけが心配だ。

息子達を鍛える中でそう言ったものを知ってくれば、あいつも変わるだろうか。

あいつの過去に何があったかなんて知らないが。信じてもいい仲間、
家族。そういうものも確かに存在するって事を教えてやりたい。

息子達が集まってるであろう場所に向かう友の後姿を見て、俺は願った。

人間ってなんだろうな

「ごめんなさいごめんなさい、産まれて来てごめんなさい」

「Sir , yes , sir !」

「どうしてこうなった」

やあ、俺だよ俺、俺俺。ミコトだよ、事故っちゃってさ、今から言う口座に500万ベリーほど頼むわ。

いやね、鍛えろつつうからハートマン軍曹の真似ごとをやってみたわけだよ。

海軍と違って、海賊のやろう達なら大丈夫かなっておもったんだ。一週間ハートマン軍曹したらトラウマになってる奴らで溢れかえりました。

さすがのニューゲートも苦笑い。俺も一言「やりすぎたわ」としか言いようがなかった。

あのマルコですら俺の顔見たら反射的に。

「Sir , yes , sir !」

とものすくびりながら応えるだけ。やばいやりすぎた。てへっ。

そしてまあソレからは、普通に生き残るための術つてのを色々と教えていったわけだ。

「いいか？絶対的強さとは何だと思う？マルコ」

「やっぱり力じゃないっすかね」

「残念ながら違う。圧倒的力を持っていてもそれが『強さ』とはならない」

「じゃあなんなんすか」

他のガキが質問してくる。

「それはな、どんな状態、状況だろうと、折れない心を持つてる奴が強いやつなんだよ」

皆一斉に？というような疑問をもった表情で俺を見つめる。まあまだわかんねえか。

「簡単に言つと絶対にまいつたと言わない奴だ。おまえらも歳とりやわかる」

というように自分なりにあの暗黒街で培ってきたとんでもない理論や心構え、こういった状況に陥った場合どう対処するのが正しいか、等等。

人間はどういった生き物で、何に対して恐怖するのか、そう言ったものを言葉や、時には身体を使って教えていった。

ただまあ、マルコを縄で縛って海に放り出して、上がって来いってやったときは他のガキ達が泣きながら止めてきたのでやめた。

そんなこんなでまた2週間過ぎた頃には、なんだかみんな馴れ馴れしいって言うか、懐かれてしまった。めんどくさい。

マルコですら「ミコトさん！親父と出会った頃の昔話聞かせてくださいよ！」なんて笑顔で言いながら俺に寄ってくる。他の奴らも大

抵同じ感じ。

そしてソレをみながらいたずらが成功して笑う小僧のように俺を見て微笑むニューゲート。

てめえ…、これを狙ってやがったな？はあ…要らんおせつかいだよニューゲート…。

「どうだ息子達は？いい奴ばかりだろ」

「おせつかいもほどほどにしとけよ？小僧、お前が思ってるようにはならん」

要らんおせつかいだとニューゲートに告げる。

「何の事だかわからんなあ？グラララララ…」

笑って誤魔化してやがる。ああ、わかってる。あんたもあんたの息子達もみんな良い奴だって事くらい。

だがな？俺はもう駄目なんだ。誰かを信じるって事に恐怖どころか嫌悪すら抱いてる。

前世でてめえらに会えてりや変わってたんだろうがな…。もうおせえよ。そんな奴が家族だなんて間違ってもできねえんだよ。

「なあ、ミコト人も案外捨てたモンじゃねえだろ」

そうさつきとは打って変わって真剣な表情で俺に語りかけるニューゲート。

「おめえの過去にどんなことがあったかなんてわかんねえ。けどよ、一人じゃつれえだろ？けどここじゃあてめえは独りじゃねえ」

そう言いながら周りを見渡す。

「ここの奴等は家族を裏切らねえ、信じてもいい、俺が胸を誇れる。血が繋がってなくとも、それくらい立派な家族だ」

ああ。ほんとうに良い奴だよお前はニューゲート。だから、だからこそ俺はお前らとは一緒に居られない。

「改めて言つ、ミコト、俺と家族にならねえか」

そう笑って、女だったら惚れそうな笑顔で俺に向かって握手を求め

るように手を、その手をとったら家族とでもいうように。

「残念だが、人に言われたとおりに生きるなんて真っ平ゴメンなんだよ」

この優しい人間達に嘘をつく。俺なんかが混ざっちゃ駄目だ。

「お前の言葉は、俺みたいな人間には伝わらねえんだよ」

本当は伝わっている。だからこそ、この優しい空間を己を混ぜて穢したくない。

「何故だ…ミコト…」

わからないというように悲しげな表情で俺に問うニューゲート。

「奇麗事、理想論、幻想……さすがにね、そんなのに感化されるほど若くないんだよね」

だから嘘を付く。お前等ありがとう。その気持ちだけで十分だ。俺にはそれだけで十分だ。

無言で悲痛な表情で俺を見るニューゲート。
ああ…めんどくせえ…。

「お前の息子達を鍛えるのも、港街に近いしもう終わりだな」

「ああ…」

「悪くは無かった。だがそれだけだ…世話になったな」

そう言い客室へと俺は戻る。明日には着くだろう。

side 白ひげ

結局あいつには届かなかったのか…。わからない。
最後に見せたあいつの眼、とてつもなく寂しそうだった。
世の人間が言うような殺人狂なんかじゃねえ、あいつはただの寂しがり屋だ。

その証拠に息子達は誰一人”死んではいない？。それに誰も重傷を負うこともなかった。

本当は優しい奴だあいつは。ただ、それをどう表現したら良いかわからない子供なんだ。

俺より年上の癖に、俺より強いはずなのに、なんでこんな事もわからないのか、わからないふりをしているのか…。

「親父がふられちまったよい」

そう言いながら俺を慰めるように近くに寄ってくるマルコ。

「ああ、ふられちまったな。グラララララ…」

ただ俺は笑うしかなかった。

s i d e o u t

そして翌日。俺の門出の祝いみたいなパーティが開かれた。
ああまじ良い奴等。こいつらほんと良い奴等だ。
ちよつとだけ参加して、逃げるように俺は出て行った。

「あばよ！」

そう柳沢 風に言い捨てて、自由に大地を駆ける。

さて、街で色々情報を貰うとしますか。
まだまだ先は長い。原作までなげーんだ。楽しまないとな、気ままに、気楽によ。

そんなことを考えながらも俺は白ひげ海賊団の奴等が出来れば幸せに過ごせるようにと心の片隅で祈っていた。

何だこのゴスロリ

ニューゲート達と別れてまた、5・6年経った。

今では私もおじいさん。恵まれない子供達にあげるのはキャンディ。なぜなら彼等もまた特別な存在だからです。

まあアレだ、特段変わったことなんてなかったな。しいて言うならルーキー時代のロジャーがどんなもんか見に行ったらなんかニューゲートと戦ってて、

「おつす、おら孫悟空、なんだかわくわくしてきたぞ！」とか言いながら乱入したくらいか。

あの時は若かった。山がみつっほど消し飛び、海軍の軍船は10隻ほど大破するわ、地形変わるわ、三人大の字になって寝て大笑いするわ。

いやあ、年甲斐も無くはしゃいじゃったもんだよ。

しかしまあロジャーはアレだね、なんというか人を惹きつけるような魅力を持った人間だった。ニューゲートとはまた違う魅力を持った人間だったな。

秀吉みたいなもんかね、人たらしみたいなの？

しかしまああいつら強かったわ。何がやばいってニューゲートも悪魔の実の能力フルに使ってたし、ロジャーもなんか素で山割るし、拳句にガープが黄猿やら赤犬やら引き連れて怒りながら追いかけてきたので、三人揃って「あばよとつっあゝん」とルパンのごとく逃げるという。

んで追いつかれて結局戦うわけだけでもさ。

いみわかんねえなにこのチートども？馬鹿なの？死ぬの？って感じで俺も刀に覇気纏わせてブンブン振り回してチャンバラごっこしましたとさ。

めでたしめでたし。

いやほんと良い思い出だわ。

とまあ回想しながらまた街に着きましたねはい。誰に実況してるってわけでもないが。

しかし最近は新鮮さがねえわ。街に行っても同じような情報ばかりだし。つまんない。

刀振り回しながら街中で ニニニ（＾　＾）ニ ブーンするぞコラ。恥ずかしいからしないけど。

ん？手配書か、どれどれ、…マジかよ…なんで俺白ひげより賞金額高くなってるの？

”白髪のみこと 3億2000万ベリー？” エドワード・ニューゲート 3億ベリー？

「なんでやん」

思わず一人で突っ込みを入れてしまった。俺なんか悪いことしたか？
なんで後の四皇より賞金額高くなってるのよ？俺なにやってんの！

うんうん唸りながら俺は考える。だが俺の記憶では特に悪いこと等
していない。

しいて言うなら、奴隷船を襲撃して奴隷解放したくらいだ。
良いことじゃねえか！！なんで賞金額あがってるんだよ！！ミコト
ちゃんシヨック！

まあそんなことはどうでもいいや、今日の宿探しに行こう。てくて
く歩くぼくちん。

そしたらなんか男が一人怒りの形相をしながら近づいてくる。

「おい、じょうちゃん、人にぶつかって挨拶もねえのか」

あれ？考え事してたらぶつかってたのか。気付かなかった。

「ごめんねー。んじゃ」

とりあえず謝っておく俺紳士。マジ俺が紳士じゃなかったらマザー
テレサはテロリストだよ。間違いない。

「おいこら！なめてんじゃねえぞ糞ガキ！金だせや！」

うわぁ…、やだなにこの人当たり屋？めんどくせーし斬つとくか。

「おい！黙ってねえで応えろや！」

うつせーな！最近の若者は。この世界の教育はどうなってんだよ？マジ学校とかないのかね。

学校でも作ってみるか？いやめんどくせえな、教師つてがらじゃねえし。

とか考えてる間もこの若者は文句を叫びながらキレている。きれてなーい。なんて言ったら面白いかなって思ったが、自分で思ってたまんなかったのやめた。
とりあえずだまらそ。

「はぁ…めんどくさ」

刀を抜いてシュシュツつとな。はい生首の出来上がり。

おーパチパチ。流石俺、一連の動作に無駄が無い。自分で褒めちゃうぜ！

寂しくなんて無いよ？だって男の子だもん！

…しかし治安が悪いねえこの街、まじか弱い俺が安心して歩けないじゃないか！

海軍にでも文句言いに言ってやろうか？とか考えてたらなんか妙にフリフリのゴスロリドレス？を着た女の子がおれの後をつけてくる。なんか人形持つてにやにやしなから俺についてくるんだけどなにこの子可愛い。…とでも言うと思ったか！！気味悪いわ！

「なに君、なんか用？」

とりあえず何が目的なのか少女に問いかける。

「キシキシシシ！…見つけた見つけた…」

おいこら何この言語障害。怖いんだけど普通に。見た目は可愛いゴスロリ少女！けど実は幽霊で俺を呪いにきましたとさ！って感じだなコレ。

「なにがやねん…」

「おまえ白髪だろ？」

「たしかに髪の毛は白いですが？何か文句があるんですか？この糞ガキぶち殺しますよ？」

なんなんだよ、この変な子。もうやだ、この街、とつとと宿屋探して寝よ。

「おまえについていけばおもしろい！間違いない。キシシシシシ！」

「あ？もう俺疲れてくたくたなの、宿屋探して寝るから」

「やどやはこっちだ、ついてきな。キシシシシシ」

とか言いながら俺の手を引っ張って歩いていくゴスロリ。なんだろう、何か一体感を感じる……。じゃねえや、なんか聞いたことのある笑い方なんだよな。

なんだったか、忘れちゃったね俺。駄目だわ。最近痴呆でも始まったのだろうか。

でもまだ容姿は8歳くらいだよ！病気だねこれ！直らないって病院の先生も言ってたし仕方ないね。

「ここやどや、キシシシシシ」

「案内あんがとさん、んじやな」

「キシシシシシ」

そんなこんなで宿屋に到着。ささつと部屋も借りました。
さて部屋に入ってベッドでオヤスイミング！！！！っておもったけど
まだ俺の後ろにゴスロリ居るんですけど何ですかコレ？難ですかコ
レ。わかります。

「なんなのお前」

「キシシシシ、あたしはモリア、ゲッコー・モリア…あんたについていくぜ！」

「は？」

この俺の問いに答えたゴスロリ今なんて言った？モリア？モリア…
モリゾウ…コワイデシヨウ…いや違う。あのモリア？
なんで未来の王下七武海の一人がここに居るの？しかも女？は？馬
鹿なの？食われるの？アッー！！！！！！

「なんでやねん」

「？」

なんか一人突っ込みをしてしまった。首をかしげて不思議そうに俺を見つめるゴスロリ少女。

やだすごく可愛い。お持ちかえR Y Y Y Y Y Y Y Y Y Y
Y
リア？

いや多分同姓同名なだけだな。間違いない。

「あんたについていくってどういう意味？」

「だからあんたの船のクルーになるって言うてんだ！」

OH…神よ…助けたまえ。意味がわからない。クルーきつとクルー。いやまて落ちて着け素数をかずえさんいらっしやい。

「いやはや混乱してしまった。頭を抱えて呆れたというか困ったのはすごい久々だよこのやろう！ダンカン馬鹿やろう。」

「それマジで言ってるの？マジで言ってるならソースだせ、マジなら俺が全力を挙げて逃げるが」

「マジだよ、あんたの船のクルーになる！そんであんたに世界を取ってもらおう！キシキシシ」

確かこいつ原作でも他力本願だったな。こんな子供の頃から他力本願ですかそうですか。

なんだかとてもジャポナーゼって感じだな。嫌いじゃない、むしろ好きですよ？

「世界を取ってもらってあーた、俺そんな力ねーよ」

「謙遜するなよ？3億2000万の賞金首！キシシシシ」

はあ、もうやだこの子、やだやだやだやだあきこ。

なんかこの子の中じゃ決定事項みたい。会話つうじねー。

宇宙人と会話してるみたいってのはこのことか。

初めて見る怪奇現象を相手にするかのごとく俺は、人差し指だけ出してモリアとかほざくゴスロリに近づける。

「キシシシシ、こうか？これが仲間の誓いつてか？キシシシシ」

言ってる言葉は理解出来ないが人差し指と人差し指をつき合わせる。俺は宇宙人と初めてコンタクトを取った。だが何もわからない、悲しいかな、どうやら使う言語が違うようだ。

だが俺のお断りしたい感情は相手に伝わったと思いたい、というか寝る。

「寝るおやすみ」

「キシシシシ、襲っちまうぞ」

なにやら聞こえるが無視だ、無視。

なにやらベットに潜り込んでもぞもぞ動くものがあるがもう眠気に勝てない…。zzz

side モリア

「ほんとに寝ちまいやがった、キシシシシ…」

一匹狼、孤高の王、人斬り、絶望、色々な名称で呼ばれる白髪のミコト。

そのミコトが目の前に居る。胸が躍る。ついに見つけたのだ。逃が

しはしない。

こいつについていって、こいつに世界を取ってもらうのだ。
それだけの力をこいつは秘めている。間違いない。

そしてあのチンピラ、チンピラといってもアレでも9000万ベリ
ーの賞金首だった奴だ。

あたしに嫌がらせをよくしてきたうざったい奴だった。

そのチンピラが何も出来ないまま生首になった瞬間あたしの心は奪
われた。

何も映していない瞳、その深い赤の綺麗な眼、そして目立つ白髪。
斬った事など無かったように無表情に歩き出すあの人。
とても綺麗だとおもった。

己がこれまでの人生で見てきたもので一番綺麗なものと。

そして今日の前で寝ている。同じベッドにもそそと入ってみたが
何の反応も無い。

本当に面白い人だ。

この人についていけばきつと面白い。間違いない。キシキシシ…。

s i d e o u t

「ああ…よく寝たわ」

「おはよう！キシシシシ」

めのまえに「ごすり」があらわれた。

「お前昨日言ってたことマジだったんか」

「だからマジだって言ってるだろ」

あーもーめんどくせええええええええ、相手するのもだるい。
まあ見た感じ俺に危害を加えたいってわけでもねえなこれ。寝たふりして数時間様子みてたけど普通になんか並んで寝始めたし。
ほつといたらその内飽きてどっかいくだろ。

「勝手にしたらいい、俺はしらねーきこえねー」

「勝手にについてく！キシシシシ」

見た目は可愛いし、眼の保養くらいにはなるかもしれない。うん人形だと思い込もう。

そして見た目ただのゴスロリ少女と黒のワンピースの少女の二人組が宿屋を後にした。

なんだこのアロハ

はいはいみなさんこにやにやちわー、皆のミコトちゃんですよ！
なんか後ろにキシキシとか笑いながらついてくるゴスロリが居るけど無視ね、無視。

アレからまあ半年以上経ってる訳ですが。こいつ飽きてない。選択肢間違ったかもしれん。誰かロードはよ。ロード。

半年の間何があっただかって訳ですが、特になにもありません。
いつもどおりに海賊船襲って、海軍追いかけてきたから軍艦沈めて、それでも泳ぎながら追いかけてくる海兵を見て「これが大和魂…」とか言いながらすたこらさっさで追いかけてこしたり。

あとは、助けてー助けてーと哀れにも助けを乞う貧弱奴隷達が居たのでかかと助けに行ったら。

「もうきたのか！」「はいい！」「きた！メイン白髪きた！」「これがかつる！」と大歓迎状態で思わずよろこびが鬼になった。

まー海軍に目をつけられる鯨飲もわかってきたんですよ。ええ。奴隷船開放なんて正義行為をしたため、海軍が嫉妬に狂って俺を襲うんでしょう？

間違いねえわ。流石海軍汚い。

まあ、そんな感じで半年過ごしてたんですけどね。この横に居るゴ

スロリ。結構強いだよ。

追いかけてくる海軍試しに任せたら、なんということでしょう！綺麗にゾンビィ！って感じてした。

カゲカゲの実の能力者だっけか。なんか言ってた。

多分経験積んでいけば良い感じになるんじゃない？俺にとっては他人事だけど。

そうそう今新聞見たけどさ、ロジャー大暴れだね、流石未来の海賊王。素敵。

金獅子のシキ、ゴール・D・ロジャーとのエッド・ウォーの海戦によつて大艦隊の半分を失い、

その戦闘中にすっかり舵輪が深く頭にめり込んで抜けなくなり刺さったままになる。とか書いてたな。

舵輪が深く頭にめり込んで抜けなくなりってどういうことだってばよ…。それ死んでるだろ…なんでいきてるの。マジこわ。

とかあほな事考えながら新聞読んで歩いてたら、なんか子供がチンピラに絡まれてるではありませんか！

なんかアロハシャツ着て、グラサンかけてる変な子供だけど、すんげーこまってる。

別に善人でもないけど、目の前で子供が苛められてたら、しかも相手が大人だったらその大人斬るしかないね。これ悲しいけど、定めなんだよね。

「俺がガンダムだ」

とか言いながら新聞片手に武力介入。刀でその大人の首をはねる。
俺の刀は覇気を込める事によってビームサーベルとなる。嘘だけど。
うん、いい事をした。だれか俺にジュースおごってよ。9杯でいいから。俺謙虚なんで。

するとなにやらいいたげに助けた？子供が近寄ってきた。

side アロハの子供

歩いていたらチンピラに絡まれた。
めんどくさい、おもしろくもねえ。世の中本当につまらないことばかり。

誰でもいいからこの面白くない状況、面白くしてくれないものだろ

うか。

そんなことを考えながら、こいつ殺そうかと思っていた矢先にそいつは現れた。

見た目は黒のワンピースを着た少女。白髪で赤い眼、アレが俗に言われるアルビノって病気が。

その後ろに黒いゴスロリ服を着て人形を持ってキシキシと笑う少女を引き連れ、新聞読みながらこちらに向かってくる。

なんだこいつら？とおもいながら再びチンピラに視線を戻す。ナイフ取り出しやがった。

こいつそんなに殺されたいのか。しかたねえなと思いながら能力を発動しようとしたとき、俺は運命に出会う。

「俺がガンダムだ」

何の事を言ってるのかわからないが。先ほどのアルビノの少女が男の首を跳ね飛ばしていた。

それだけならまだ俺を驚かせる事は無い、問題は奴の眼だ。

何も感情が籠っていない眼。街に落ちているゴミを片付けただけでもいくつかのごとく無表情でいて、何も思っていない眼。

一瞬で惚れてしまった。面白い。

「おい、あんた何モンだ」

アルビノの少女に問いかける。

「俺がガンダールブ、……いや作品ちゃうやんって突っ込んでよ」

「何を言ってるかわからねえが、あんたがただもんじゃねえことはわかったガンダールブ？さんよ」

「いや、真に受けるなよ冗談だ。俺はミコトつつんだ、何か暇だったんでガンダムこっこしてチンピラの首飛ばしました！以上！んじゃーな」

そう言いながら立ち去ろうとする少女。
今ミコトつつったか？あの白髪！？

「あんたがああの白髪かよ！すげえ面白そうなもんに出会えた」

「このパターンはまさか……よし逃げよう」

なにやら言ってるが逃がしはしない。

「おいこらなんだコレ、離しなさい。良い子だから、ね?」

能力を使い動きを止めさせる。

「俺を連れてつてくれねえか。あんたについていきや面白い、間違いない」

そう俺が言つと、白髪はすごく嫌そうな顔をして。

「俺は白ひげの坊やみたいに託児所ひらいてねーよ!!!他あたれ!!!」

うわさには聞いていたが、あの白ひげを坊や扱いとは、こいつはすげえ!ますます気に入った。

「俺の力見ただろ?あんたの役に立つと思つぜ?」

「ふん、ガキ、良いことを教えといてやる。悪魔の実の能力なんてな、簡単に効かなくなるんだぜ」

そうアルビノの少女が言葉を発したとたん。自分の周りに嫌な感じの雰囲気広がった。

初めての感覚。コレは…何だ？

そして気付いたときには自分は片ひざをついていた。そして自分の能力で作ったモノが消えていた。

「海にやーお前くらいの能力者なんてごまんという」

「わかったろ？とりあえずよ、俺を気に入ってくれたってのは気持ちだけ受け取っとく。

てめえが大人になってもまだ俺のここに来たいって言うならそのときは認めてやるよ」

そっぴいながらアルビノの少女達は去っていく。

おもしれえ……！！！！

いいぜ、てめえが認めるような力をつけて必ずてめえの元までいつてやる。覚悟しやがれ。フフフフ。

s i d e o u t

いやーまいったね、アレ。ドフラミンゴだろ。いやあ、なんか嫌な予感はしたんだけど暇だったんだよ。

まさかアロハシャツの子供みたら全部ドフラミンゴだと思えとか辞書にのってねえし。

まじやべえやつに目つけられちゃった。アロハシャツの子供には気をつける！！って教訓が今日から俺の中で増えてしまった。

「キシシシシ、いいのか？連れて行かないで」

なんかゴスロリが人形弄りながらしゃべってる。頭痛い。

「さっきも言ったように託児所じゃねえんだよ俺は、そういうのは白ひげの坊やだけでいい。後おまえみたいなガキ二人もイラネ」

「そうかよ。キシシシシシシ」

なんか笑いながら腕組んできたんですけど何この子怖い。

見た目だけは可愛いのにー。性格が台無しやでえ。この物騒なゴ

スロリ殺人鬼め！可愛いぞこのやろう！そついうの大好きだよ！！
信用は欠片もしてないけどな！！だって俺だもの。みこと。

後にこの事象を振り返り、自分の選択を悔やむことをまだ、この時の俺は知る由もなかった。

新時代の幕開け

はい。良い子の皆！元気にしてたかな？ミコトおにーさんはげんきだよつ。

どうも皆のアイドルミコトです。

あれからまた2・3年経ちました。相変わらずゴスロリモリアにストーカーされています。

ただストーカーされるんじゃ面白くないんで覇気使いながら追いかけることが日常でしてます。

しかし、なんでストーキング行為飽きないのこの子？意味がわからない。

ベットで一人寝てたらいつの間にか布団の中に居ないはずのゴスロリが！マジこええよ。ほんとわけがわからないよ。

魔法少女にするぞゴルア！！とか脳内で言ってますが実際は言いません。

だってなんか怖いんだもの…。

悪意じゃなくて好意で近づかれることの方が怖いお年頃なんですよ。まあもう精神的に五十路超えてますけど。

見た目は8歳の幼女だからいいよね。うん。そう思いたい。

そうだね、この2・3年でなにがあったか。

ちまたでうわさのロジャー君が海賊王とか呼ばれるようになって、でも海賊団解散しちゃって自首しちゃったんだよね。

ちよつとあいつの行動理念が理解不能だわ。

どれくらい理解不能かというと2進法で動いていたpcが10分後16進法で動き出した感じ。

さすが原作の主人公ルフィみたいな感じでしつちやかめつちやか世の中を動かしてるって感じ。

てめえもしつちやかめつちやかしてるじゃねえかって突っ込みは無しだぜ？

何せ俺は現世という呪縛から放たれた、自由人。もはや何も縛るものは無いごーいんぐまいうえいこうえいこ！ですから。

ただなるべく原作まで生きてる人間は殺してないはずだぜ！多分だけどな！！

んでまあモリアと一緒に海賊王が処刑される場所に向かつてるわけですよええ。

だって生で見てみたいじゃん？あの命台詞ならぬ名台詞が聞けるんだぜ？

せっかくワンピースの世界に生まれてきたんだ。アレを聞かないで何をするってんだ。

まあ俺目立ちすぎるらしいから変装して向かつてるんだけどね。横に並んでついてくるモリアがうるさいの。

おめえは俺の嫁さんかよ！って言ったらおまえがあたしの嫁だよキシキシとか返してきたので俺は無言で再び向かうしかなかった。

すーかーこわい。

「おい、もうすぐ始まるぞ！」

なんかすんげー人がいっぱい。祭りでも始まるのかコレって思うくらい人ごみ。人、人、人。みつつそろって轟！！

「ようにいちゃん！今日は祭りだってな！！」とか近くに居るにーちゃんに話しかけるが無視されました。悲しいです。非行に走りたくなりますが我慢します。ここで騒ぎを起こすとロジャー君に迷惑がかかるので。

とかまあなんか変な事考えたりしゃべりながら歩いていたら、広場に着きましたとき。

いやあ、想像してた通り、すんげー人。馬鹿みたいに居る。全員斬ったら面白いかもしれない。

モリアにそう言ったら面白そうだがやめとけっていわれました。なんかこいつ最初より常識学んでないか？

まさか：俺についていつて常識を学んでいたのか！！俺ビバ反面教師いいい。

なんかもー周り殺気立ってるねー。直接なにかされたわけでもないだろうに、ころせー、はやくやれー。そんな声しか聞こえない。ロジャーとは友とは言えないが一緒に海軍とチャンバラごっこした仲ではある。

知る顔が居なくなるというのは何か感慨深いものだ。まあ別に処刑止めたりしないけどね。あいつが望んでることだろうし。

「俺の財宝？ほしけりゃくれてやる。探せ！この世の全てをそこに置いてきた！」

おお！名せりふキタコレ。横で俺の手を握ってるモリアも何か感慨深そうに見つめている。

アレ…いつの間にオレノ手ニギッテルノ…モリアコワイ…。

処刑そっちのけで俺はモリアに恐怖していた。

いやあ、ほんとすとーかーさんはこわいですねー。

なんか決意したような表情で俺見るのやめてくれませんかねモリアさん。そんな手ぎゅっとしなくてください。いやまじ怖いんですけど。

とかまあそんなこんながあつてその日は処刑があつた街の宿屋借りたんですよ。

そしたらいつもどおりモリアさんがきなすつたんです。

また布団にもぐってくるのになつて、怖がりながら半目で「ああん？最近だらしねえな！」とか訳のわからない事を自分でも思つちやうような言葉言つちやつたんですよ。

そしたら返つてきた言葉がちょっと予想外でした。

「あたし、あんたにふさわしい女になつて戻ってくる！…それまで浮気すんなよ！キシキシキシ」

とか何とか言いながらどつか行つちやいました。

あるえー？もうストーリーカーおしまい？まあ別にいいんだけどね。

気ままに気楽にまた一人旅が始まるだけですええ。寂しいだなんて思つてないんだからねっ！！

キモツ。自分でキモツ。ああ、アンキモくいてえ…。明日は天中殺や…。

とか意味不明なことを考えながら、少し寂しい気がしながら眠りについた。

そしてまあ翌日宿屋出たわけですが。

何か物足りないなあ……アレ……もしかして依存されてるはずが依存してたのか俺？

なんとということだ……！これが俗に言われるミイラ取りがミイラになるって奴か！

ああ……駄目だ、俺らしくない。よし、今日も海賊と奴隷船ぶつつぶす!!!

滴り落ちる俺のビブラート。ユーミンの　よ来いを口ずさみながら
気合を入れる。

卒業写真じゃないのがポイントだ。アレは歌っちゃ駄目だ。さらに
てんさんよんが下がる。

[illegible]

奇声を発しながら規制すれすれの単語を連呼しながら自分の船まで駆け抜ける俺。

途中で見かけた海兵は可哀想なモノを見る目で俺を見つめるだけだった。

悲しくなんてないんだからねっ！ぐすん…。

とか言う間に3年また過ぎるんですよ。
3年なにかあったんやゴルァ！って？

俺は相変わらずグランドラインや新世界で海賊狩ったり、海軍と追いかけてっこしてました。

覇気を纏ってリアル鬼ごっこもしましたよ。
いやぁマジ怖いね海軍の大將さん達。覇気で海軍の制服ぶっ飛ばして筋肉アピールする大將には笑いましたが。

巷で聞いたけど今は白ひげの時代らしいぜー！あの小僧達も偉くな
ったもんだ。今度飯たかりに行こうそうしよう。

ロジャ―が死んだ後、世はまさに大航海時代って感じでさ、海賊の
数が増えた増えた。

たまに追いかけてこしてるガープ中將が海軍に戻って来いとかよく
わからない事を言うてくるくらい人材不足らしい。

大変やねえ…、って感じ。俺には所詮他人事さ。正義とは何か。そ
れは歴史の勝者である。

勝てば良いのだよ。勝てばね。

そうそう。何かモリアも頑張ってるらしい。部下色々揃えて魔の三
角地帯？とかいうとこに拠点置いたそうな。

独り立ちか！あのモリアが大きくなったよ…、つつつて褒めてあげた
ら、あんたのためだボケ！！ってでんでんむしごしでもわかる位す
んげー怒ってました。

ゴメンゴメンジョウダンダヨアリガトウって返す他なかったです。
超ビビりました、嘘だけど。

魔の三角地帯つつつて最初聞いたとき魔のトライアングルダラスを
連想して、「なんてことだ…ここは、惑星Ziだったのか…」とか
モアイ像みたいなものの前で言っちゃった俺は悪くねえ。

俺のデスザウラーはどこに落ちてるのだろうか？今度真剣に探して
みよう。

後は何か五皇とか呼ばれてる中に俺が入ってやがる。四皇じゃなくて五皇かよ。

やめてよね、俺狙われちゃうじゃない。というか俺領地とか持つてないぞ！！！アレ…もしかして…ゴスロリモリアさんの領地が俺のつて事になってるの…？

やばい、自分の知らない間に話が進む事ほど寂しいものは無いぜ…。

後はそうだなー、たまたま会ったレイリーがさ、なんか子犬拾って世話しててさ、子犬の可愛さ自慢してきてむっとしたわけよ。そして俺は自重しないから思わず言ってしまったんだよ。真剣な顔をしてね。

「黙れ小僧！ お前にあの娘の不幸が癒せるのか！！」とね。そしてレイリーと覇気を纏ったチャンバラごっこに発展。レイリーが乗ってた船壊しちゃったんだ！てへっ。

んで俺が壊しちゃったのが悪いから俺の船に乗せてレイリーの行きたい場所行こうとしたらさ、迷子になっちゃったんだよ。そしたらなんか喋るタコのがキが居て、そいつの道ならぬ海案内で無事目的地にたどり着きましたとさ。めでたしめでたし。

うーん、自分でもわかるくらい、はっちゃけてる人生送ってるなあってしみじみ思う。

第二の人生ここまで自由に生きていいのだろうか、いや生きていい。

反語。

んでまあそろそろ後の海軍VS白ひげ海賊団の原因となるエース君が誕生するのではないかなーと思いながら南の海まで来た訳ですよ。

いやー、この海マジ平和、ピンフと書いて平和ってくらい平和。一人マージャンしながら余裕で航海できる。つまんねーけど。

んでバテリラまで着いたわけです。そしてまあガープ中將が案の定居て、リアル鬼ごっこスタンバイおk? 見たいな感じで睨みあっちゃってるのが今現在俺の状態なのがある。

「白髪、なにしにきおった？」

「何かが生まれると聞いて観光しにきますた」

俺はついつい言ってしまった。そしたらガープ中将すんげー形相で睨むわけですはい。いや怖いけど別に怖くないぜ？

「何が目的だ…」

「だからーただの観光。しかし景色も空気も良い所だが、海軍の軍艦がこんなに居るとは思わなかったぜ！白ひげの坊やも連れて来ればよかったー！」

「おまえは戦争でもする気が…！」

なんか怒られました。せつかく場を紛らわせようと渾身のジョークをかましたのに通じなかったらしい。ミコトショック。
まあ連れて来れるかどうかわかんないけどね。ニューゲートなんか忙しいらしいし。

「まあ…頑張れよ、ガープ中将」

そう言い俺はブーンしながら去っていく。
何かいいたそうにガープ中将はしていたが、結局それ以上話しかけることも無かった。

ついでにいうと海軍が追いかけてくれないで、完全無視されるとなんか悲しいよね？3億の賞金首だぜ？五皇らしいぜ？

なんて馬鹿をしながら時は過ぎていった。

奴隷解放宣言（前書き）

この物語はフリーダムなのさ。ジャスティスは無い。

プロットすらあらず、ただただその場の思いつきで書き綴られていく。

とりあえず主人公が真面目になればいいね。

奴隷解放宣言

おはろーございます。

やあ？はじめましての方はさようなら。久しぶりの方はよく来たわね、いらっしやい。

君達のアイドルミコトちゃんだよっ。

あれから8年くらい経ちました。

特に何も無いかな。いやまじで。

せいぜい大きな事件といえばオハラ島にバスターコールがかけられ壊滅、地図から消滅って事くらいカナー。

生でバスターコール見に行きましたよええ。いやーアレはやばい。アレ受けたら俺でも死ぬかもしれん。まあ気合でどうにかなるだろう。

ロビンはどうしたかって？知らんわ。まったく見かけなかったし。バスターコール見るのに夢中で探さなかったとか無いよ？ほんとだよ？

多分頑張っ生きてると思う、この辛い世の中を、世知辛いなあ…。

そうそう日々欠かさず馬鹿やったり自己鍛錬を欠かさない俺様ですが、とうとう刀を振るスピード？とか言うものがやばいものになりました。

何か見えないんですよ、音もでなくなりました。例えるなら某セバーの風の結界みたいなものの状態みたいな感じ？アレとは違うか。

まあ努力すれば人間なんでも出来るものだって改めて思いましたね。

努力を続けられるのは天才だから。と某「ほぼ、イきかけました」の人も言ってますしね。

俺は多分天才だったんだろう。

つっても刀使わなくてもできるんですけどね。ハハハこやつめ。

そうそう話は変わりますが、俺は今日聖地マリージョアに来ています。

それは何故か！よく聞いてくださいました。え？聞いてない？知るか俺が言いたいんだよボケ。

まあ最近なんだけど、奴隷船いつもみたいに解放したら何かよう

ゝよに頼まれたんですよ。

お母さんを助けてくださいってさ、泣きながら。

何処に居るんだよクズって聞いたら、てんりゅつびとさんのすんできるところって言ったんですよ。ええ。

ああ…これは間違いない。天が俺に奴隷解放宣言をしろというお告げだ！というわけのわからない事柄で脳裏が埋め尽くされたとか尽くされてないとか。

というわけで来たんですよマリージョア。天竜人。こわいですねー
おそろしいですねー。

宇宙人だろあいつ等？なんかよくわからんマスク？被って俺達は宇宙飛行士だ！ってアピールしてるんでしょ？宇宙人のくせに。

奴隷制度とか古いんだよ。可愛い女の子を奴隷として扱うとかなんてうらやましいんだ！！そんな制度とかぶっ壊れる。いや宇宙人滅びろ。

というわけで天竜人とか名乗ってる宇宙人達を俺は今日懲らしめに行こうと思ってるわけですよ。

だがいかんせん海軍の警備がすげえわここ。やべえのなんの。

そこで海岸沿いでどー進入しようかなーとか考えてたらなんか変な奴に話しかけられたわけ。

「おいあんた…白髪のミコトだな？」

「違うアルヨ。ワタシ日本人アルネ！」

「あんたの噂は聞いている。そんなあんただからこそ頼みがある」

「スルー？スルーするの？いじけていい？」

人の話聞いてくれない、久々に俺はいじけた。砂浜にのの字を書い

てやる。

「今日俺はマリージョアで奴隷を解放する、あんたも奴隷解放のために来たんだろ？」

「あーあ、一人でしょうとおもったのにこの魚人さんは俺の手柄にするから協力しろと言っ」

「…あんたほんとそうしてると子供みてえだな」

「まだピチピチの60代だよ馬鹿野郎この野郎！いいぜ！奴隷解放宣言する気満々だったし？天竜人とかいう宇宙人ぶっこおしたかったし。ただどうやって進入しようかなくて」

はー、仕方ないか。この魚人さんなんか奴隷解放するらしいし？一人でやるより二人ってか？まあクリミナルパーティはにぎやかな方がいいよな。

あー、早く暴れたい。久々のクリミナルパーティ。楽しみで他ならない。

「俺について来な」

そついういい男な魚人さんに俺はホイホイついていってしまうので

あつた。

「ここから潜って進入する、あんたは俺に捕まっていればいい」

「俺正面から入って奴隷解放宣言して暴れたいんですが！」

「…あんたほど噂どおりでむちゃくちゃな奴は見たことねえ、正面から行ってもすぐ海軍大将が来るぞ？」

「…魚人の小僧、俺は誰だ？ミコト様だぜ？俺がおとりになってやるって言ってんだ、その間にめえは奴隷ちゃんたちを解放しろって事、あんだーすたん？」

なんか俺が言い終えたら信じられないとでも言うような顔をして、なにやら首をふりふりしながら考え込んでる。
オッサンがそんな仕草してもきめえぞ。

「…わかった。俺が直接解放しに行く、あんたは正面からおとりで暴れる。…死ぬなよ」

「おい小僧、あんまり舐めるなよ？俺は宇宙人だろうが人間だろうが魚人だろうが差別しねえ、気に食わなかったらぶっ殺す」

「ハハハ…もつと早くあんたみたいな人間に会いたかったぜ…」

「俺人間なように人間じゃないかもしれん。化け物かもよ？…まあ行ってくるわ、しくじるなよ」

「おう！任せとけ」

そう言葉を掛け合い俺はいい男な魚人と別れた。

そしてまあ正面のかい玄関のようなところまできたわけですよ。ここむつちや海兵居ます。というか近隣の住民の皆さんもいます。ここはいい場所だ。間違いない。俺の中の神様がここで奴隷解放宣言しろとささやく。

んじゃこのでかい玄関の上に登ってつと。

「人は！平等ではない。生まれつき足の速い者、美しい者、親が貧しい者、病弱な体を持つ者、生まれも育ちも才能も、人間は皆、違つておるのだ。」

そう、人は、差別されるためにある。だからこそ人は争い、競い合い、そこに進化が生まれる。不平等は！悪ではない。平等こそが悪

なのだ！」

…あ、違うわ、これ。言う台詞ミスった。はずかし…。むっちゃ海兵さんとか近隣の住民の皆さん見てます。

あー…、まあいいやとりあえず言い切ろう、ぜんぜん違うけど。

「しかし、弱者をなぶり、奴隷として扱うのは正しい事なのだろうか？それが平和なのだろうか？否、断じて違う。

政府、海軍は平和を謳い正義を掲げながらソレを見てみぬフリをするだけ。それは真の平和とは程遠い。誰かの犠牲の上に築かれた偽りの平和等壊してしまえ！！」

よって我は、ミコトの名において奴隷解放宣言をする！！！これが正義では無い！！仁義によるものだ！！！！」

ふっ、意味わからない前後の台詞になったが決まったぜ…！自分で言ってる意味がわからなかったからな。

なにやらこの場に居る全員がざわざわしている。お前等カイジにでも出るつもりなのか。そうなのか！。

「白髪だー！！！！白髪のみことが見れたぞー！！！！」

「本部に至急連絡だ！！！！急げ！！！！援軍を早く！！！！」

おーなんかすんげー大混乱みたい。これは楽しい。みていて面白い。
そしてクリミナルパーティーは開催されたのだった。

s i d e いい男な魚人

なにやら正門が騒がしいな……。白髪の奴うまくやってるみたいだな。
こっちはもう粗方奴隷を解放し終えた所だ。

俺は人間は嫌いだが、ああいう人間も居ると言う事は知っている。
ああいう人間ばかりなら平和なんだろうけ……。いや毎日がエブリデ
イだな。

爆音やらなにやらわからないモノまでとんでやがる。あんな人間が
沢山いたら世界が滅びるな、うん、間違いない。

「汚物は消毒だー！ヒヤッハー！」等とあいつの声が聞こえてくる。
すごく元気そうだ。

「おいおい、あいつここ壊す気が…?」

思わず呟いてしまった俺は悪くない。

白ひげの旦那からの伝言であいつに手を出すのは絶対やめとけって事なんだが…こういう事が…。

言われなくても手ださねえよ…。まだ俺は死にたくねえからな。ほんとに人間か疑いたくなるな。ほんとに能力者じゃないのか…?

「まあ関係ねえか…せいぜい死ぬなよ白髪…」

俺は最後まで見る事無くその場を後にした。

s i d e
o u t

結果から言おう。奴隷解放自体は上手くいきました。

あの魚人のオッサンも捕まっていらないそうです、ただ俺だけぼろぼろになりました。

いやーいつもの筋肉アピールの大將だけなら良かったんだけど。黄猿やら赤犬やら子安さんとかがやってきちゃってもう大変。

クリミナルパーティーどころじゃなくなつたね。流石に未来の3大將相手じゃやべえつての。

あいつら来てから俺は防戦一方で時間稼ぎに徹するだけでした。

しかたねーだろー！マグマ飛んできたり氷の塊が襲ってくるんだぞ！！ただの人間が相手できるわけねえだろー！！

まあ光速の黄猿くらいなら俺も人間半分辞めてますって感じの刀業で凌いでただけだね。

めんどくせーつつうの。途中まではノリノリで面白かつただけだよ。あの三人が真剣すぎて俺萎えちゃったんだよね。

んでまあ最終的にマリージョア半壊して、ふざけて放った刀技がたまたま射線上に居たモモンガちゃんに当たってそのまま飛んでいったり。

結局俺にしては珍しく誰も殺さなかったね。奴隷解放は成功したけどクリミナルパーティーは失敗した。

結局あの魚人、フィッツシャーマンだっけ？名乗ってないからわからん。アレくらいしか新たに原作のキャラに会わなかった。ハンコックとか見たかったんだけどなー。ロリ巨乳なのだろうか？ものすごく気になります。まあ仕方ないね。

いいんだよ！俺は俺さえ居ればいい。ヒャッハー…ぐすん。

まあそんなこんなでボロボロになってシャボンディ諸島の街の中で身を潜めているわけですが。

レイリーに捕まりました。さすがにもうくたくたで抵抗できません。悲しいかなあの未来の三大将チートすぎてワロエナイ…。

何なの？俺海軍に引き渡されちゃうの？冥王白髪のミコト捕らえ海軍に引き渡す！！明日の朝刊の見出しはコレに決まりだな。

「ミコトさん、あんたはやっぱ面白い男だ」

なんかレイリーが嬉しそうに俺に向かって語りかけます、死刑宣告ですわかります。

「海軍に引き渡して見やがれ、末代まで豆腐の角に頭ぶつけて死ぬ呪いを呪ってやるからな！！」

苦し紛れに適当な事を言うべくちゃん。かわいいでしょ。…あかん
マジ疲れて眠い…。

「心配せずともそんな事しませんよ、…眠ってらっしゃるのか、や
れやれ。まるで世話のかかる子供みたいに眠ってらっしゃる」

そう言いながらミコトを背負い歩いていくレイリーはどこか嬉しそ
うだった。

これから毎日バスターコールしようぜ？（前書き）

信じられないだろ…1日の思いつきと勢いなんだぜ…。暇人なんだな…。

これから毎日バスターコールしようぜ？

どうも、アンパンマンよりばいきんまん派の俺です。ミコトです。いやあアレから1週間近く寝たきりだったらしい。レイリー曰く。

というか俺はハンコックとか三姉妹のついでに助けたみたい。まさか事件をおこした張本人がまだ居るとは思わなかったとか。

三姉妹何処に居んの！ってな感じで聞いたけどもうとつくにニヨン婆とによろが島に帰ったそうなの…くすん。

しかしまあ俺がシャッキーン・S ぼったくりBARにお世話になる日が来るとは思わなかった。

そういえばシャボンディ諸島なんてはじめて来たんだったな。

あとどうでもいいニュースがあります。俺の賞金額上がったらしい。新しい手配書をレイリーから貰い、見てみると”白髪のミコト 7 億8000万ベリー？だつてさ。笑えよベジータ。

なんで倍以上になってんだよ。いみわかねー。奴隷解放宣言と言うとてもすばらしい行為、世のため人のためみたいな感じの行動だったのに何で何だぜ？

「レイリー…もう…ゴールしてもいいよね…」

「ハハハハッ」

笑ってんじゃねえぞ糞。しかしまああの頃の顔見知りで数少ない生き残りだ、寛大な俺は許してやろう。

思えばもうこの世界に転生？して60年近くか。前世合わせて80代だと…！？なのに8歳くらいそのまま成長しない身体。

そんな自分を直接知る人間も少なくなつた。これが…老い…！ジーザス！！まだまだ俺は現役だぜ！！…多分。

「お前って確か一つの家に留まってないんだっけ」

「確かに、どこかに定住は自分の性に合わないもので」

「レイリーの家でもあつたら個人的に毎日バスターコールしてやるのに」

「ハハハ…」

レイリーの笑みが引き攣つた笑みになった。ざまあ！

いやはや少し子供っぽい振る舞いをしてしまった。こういう風に知り合いをいびれば後50年は生きられるだろう。さすが俺。

「まあ何にしる俺を助けてくれたわけだし礼を言う。ありがとう。感謝する」

「いえいえ、たまたまですよ」

素直に礼だけは言っておく。こういうのはちゃんとしないと後進の若者がぐれてしまう。まあ若者がくれる前に俺がぐれてやるが。

改めて自分を振り返る。やってきた事はただ自由気ままに海賊潰して、海軍潰して追いかけてこして、奴隷船つぶして解放して、マリイジョアの奴隷解放して。
あげくに7億8000万ベリーの賞金首。そして五皇とかいう原作からはずれた存在。

やつちまったなあ！俺！もう原作とか信じれんかもしれない、これで俺が七武海とかに入ったらマジワロスなんだが、まあありえないだろう。

天竜人に喧嘩売ってるし、政府に喧嘩売ったし。間違っても俺を引き入れようとはしないだろう。自分で言うのもなんだが、手綱なんてつけてもすぐ飛んで行ってしまう。

そんな存在が俺だ。

面白いモノを求めてあの糞つたれな街から海に出た。それから何十年も過ぎた。ここらあたりで落ち着くのが貧弱一般人。だが俺は違う。

「その常識をぶち壊す！」

とあるそげぶな人の言葉を借りながら俺はレイリーに向かって何故か言う。

「？」

「いや、なんでもない」

何か疲れてるんだろうな俺。いや憑かれてるかもしれない、主にモリアさんに。

そしてまあそのまま居座る事一ヶ月余り。レイリー達と昔話でもりあがったり。覇気纏って追いかけてこしたりして過ごしてたある日のことです。

「ミコトさんにお客さんですよ」

「おk p k、かかって来いよ雑魚ども」

すっかり調子を取り戻した俺ことミコトちゃん。今日も黒いワンピースを着て、元氣にお外をのた打ち回る予定だったので、何やら俺にお客さんのようです。

「迎えにきたぜ、ミコトさんよお」

「!？」

何やら目の前に居る、ないすばでーなグラサンかけたアロハシャツを着た金髪のおねーさん。誰だこいつ。

思い出せないっていうより、マジで誰だっけ…。

「チツ、その顔はマジで忘れてる顔だな。ドフラミンゴだよドフラミンゴ、大人になっても変わらなかったら来いっつってただろ」

「なん…だと…」

ドフラミンゴが女？WHY？モリアさんに続いてドフラミンゴすら女だと…。いやだがあの時確かに男だと思ってたんだが…まさか性転換手術…？

「っていうかマジ？ドフラミンゴのおねーちゃんとか妹とかじゃないか？」

「あんたが俺の事をあの時どういう風に見てたのかよくわかったよ」

とかなんか言いながらドフラミンゴ？がフフフフとか言って笑って

る。何この人怖い。でもすんげー美人さん。様になる。

「しかし俺っ娘とか時代の最先端行きすぎだろドフラミンゴ」

「ああ？てめえもだろうが…」

「俺男ですよ？あいあむばーい、ゆーあーがーる」

俺がそう言つと、ずるつとドフラミンゴさんがずりこけました。グラサンもずれてる、やだなにこの子可愛い。

「マジかよ…女だと思ってたぜ…というかあんた全然姿変わってないのな」

「マジだお！姿はまー何だろう50年ほど変わってねえわ、お前が変わりすぎ、ナイスバディな美人になりすぎでおます」

「他の奴に言われると腹が立つが、てめえに褒められるのは悪くねえな…フフフフ」

おっかしいなー…どこでフラグ立てたんだ俺…？
最近記憶が曖昧な部分あるんだよね俺。歳なんだろうなあ…。

「俺の海賊団、てめえの下に入る。これからよろしくな白髪のニコト」

「いやあの…ちょっとまってくれませんかねえ…思い出せないんですが…」

「ああ？まだ文句あんのか？」

最近何故か女の子に弱い俺。どうしたんだろう…遅めの思春期かな…？なんだか胸が熱くなるんだけど。

「いやもう考えるのめんどくせえから任せるわ。多分よろしくドフラミンゴ」

「多分ってなんだよ！」

なんだかプンプンと擬音が出てきそうな感じで頬を膨らませているドフラミンゴさん。
あんたほんとにドフラミンゴさんなんですか？どうみてもツンデレみたいなただの女の子にしか見えないんですが。

なんて事は怖くて聞けない。

モリアさんといいなんでこんな真っ直ぐなんだろう？俺が擦れ切りすぎてるのか？

「拗ねるな、ほんの軽いじょーくでござる」

「あんたは本当に適当なんだな噂道理、相変わらず面白おかしい事もしてやがるし、ほんと愛してるぜ！」

「愛が重い！！いやそれマジで言ってるの？怖いんですけど」

「てめえには嘘はつかねえよ、フフフフ」

いかん。俺の寿命がマッハでやばい。長年危ない人に目をつけられていたようです。

子供の頃から一途って感じなんですかね？マジ感涙モノです。俺が普通の人間ならな。信用できるかボケ。

「そうときまりや早速俺とベッドに行こつぜー！」

「H A N A S E」

なんか引き摺られていく俺、うあ……文字通り食われそう誰か助けて。おいレイリー！黙ってみてないで助けるや！！いや助けてくださいお願いします！！

必死に目配せする俺。俺の熱い視線、レイリィ、君に届け！

「とうとうミコトさんにも春が来たか…」

とかいいつつ何か泣いてるんですけど?! レイリーつかえねええええええええええええええええ。
ちげーよ助けてっていったんだよおおおおおおお。

ドフラミンゴの笑顔が怖くて俺は喋れなかった。だって、すごい嬉しいそうなんだもの…。

純粹な好意ほど世の中で怖いものは無いな…。

いや綺麗にまとめようとするなぶちころがすぞ……！……ああ……ド
ナドナが脳内に流れ始めました。もう駄目だ……。

これから毎日レイリーの居るところにバスターコール並の火力で攻撃してやるっつっつっつっつっつっつっつっつっつ。…。

その日、BARから少女のような少年の悲鳴が聞こえたとか聞こえなかったとか。

モリアちゃんとおフリンリンちゃんとおフリンちゃん（前書き）

読むんじゃない、感じるんだ。

俺とドフラミンゴが思わず爆笑してしまったのは誰も責めれないと思うんだ。いやマジ俺的に大爆笑だったんだけど、嘲笑ってるように見えたらしい。

「あなたがやれと言ったんだ！」とか言いながら白いきぐるみ（ミコトちゃん作）を着たいい歳したおっさんが見た目幼女と綺麗な金髪のおねーさんを追い回すという珍事件が発生。

海軍が見たら逮捕されちゃうぞレイリー、まあ海軍も見て見ぬフリしてたがな。あいつら仕事しろよ。

その後もちろん覇気を纏った追いかけっこからチャンバラごっこに発展しましたとさ。この日、近隣住民から俺が何故か歩くバスターコールと呼ばれた。何故なんだぜ？

ドフラミンゴ結構強くなってた、これなら新世界だろうが暗黒街だろうが平気だろう。

行くかわからないし知らないけど。そうだね、機会があればモリアとドフラミンゴと一緒に海軍本部に乗り込んでガンダムごっこでもやりたいものだ。ちなみに俺がフリーダムな。

後はそうだねー…モリアちゃんに呼び出されました。でんでんむしさんで。魔のトライアングルダラス？まで来いってさ。

あんなところに拠点をおくだなんて、もしかしてあいつはダークカイザーにでもなるつもりなのか？モリアがデスザウラーに乗って登場しても俺は驚かないぞ。

ただ、俺が場所がわかんねーっていう問題が発生したのだ。レイリ―連れて行こうとしたらものすごく嫌がったからドフラミンゴちゃんを誘ってみたんです。

そしたら場所わかるっていうから俺の船と一緒にモリアが待ってる所まで行っただですよ。ええ…、それが間違いでした。

「おいミコト！あたしはあんたに浮気はするなよって言ったよな？」

「おいミコト、なんだこのゴスロリのキガイ。お前の娘か？フフフ」

「俺は悪くねえ…」

なんでこいつ等仲悪いの？初対面のはずだよ…。浮気ってなんだよ、いつお前と付き合っただよ…怖くて言えないけど。

着くまでは特に何の問題もなかったんだよ。なんかでさえ島みたいな船についたなーみたいな感じで「まっくらもりあでておいでー」。

でないと　　をほじくるぞー」

って叫びながらブーンしたのがいけなかったのだろうか。その叫びが聞こえたのかキシキシとかいう相変わらぬの笑い声が聞こえてきて何故か俺にダイブしてきやがったおじょうさん。

これは新手のレスリングかな？と思い俺のスペシャルな寝技を披露したらヘッドロックがまされました。

俺よりでかくなってるモリアさん、とうとうゴスロリ少女にも身長が抜かれて悲しみが鬼になったところにドフラミンゴさん参上。そして現在に至る。

そして何故か喧嘩腰のお二人さん。どうしてこうなったんだぜ…？まあそんな事はどうでもいいんだよ。俺にはすごく気になる事がある。

「なあなあ、デスザウラーどこにあるの？」

「人の話を聞けよ！！！！」

あるえー？何か二人仲良くはもってらっしゃる。さっきまで喧嘩腰だったのに、何か俺に不服でもあるかのようにジロ目で二人に見つめられてます。

何がなんだかわからないんだぜ？首を傾げる俺。

「はあ…こいつはこいつ奴だった…」

「違いねえ…フフフ…」

なんか二人して肩をがつくしさせてらっしゃる。何か変なモンでも食べたのかなこいつら。

そしてなにやら怪しく手をわきわきさせながら俺ににじり寄ってくるお二人さん。え…もしやこれは…バイ ハザードごっこ!?

…おk任せろよ、俺はゾンビだって構わずに食っちまうような男なんだぜ。

「ソル!やめて!来ないで!!…あ、これサイレント ルだ」

「ミコトはよくあたしにはわからない事を言う…」

「こいつの言ってる事が理解できるのはキチ イだけだろうよ」

いやあ、なんか前世の記憶も曖昧というか何というか、むちゃくちゃになってる気がしてきた。確か俺は前世皇帝だったはず。うん…間違いないな。

「そついやなんで俺呼んだの」

「やっと話が進められる…」

なんかぐったりしてるモリアさん。なんなん？誘ってんの？俺レスリングつええぞ？多分。

ドフラミンゴは何か肩を竦めてやれやれだぜとでもいう様な感じで黙ってる。何いい子ぶってんのこいつ。悪い子だろお前は。

まあ話聞くわけですよ、モリアちゃん曰く、俺に船の改造案考えて欲しいらしい。あたしとあんたのスイートホームだからとか何かほざいてた。こいつ絶対頭おかしい。

んで色々案言っていったわけけどさ、悉く却下されるニコトちゃん涙目。デスステインガーでもあれば荷電粒子砲打てるのにな、無いらしい。

流石に全部却下されてイラってしたから。

「ぐれてやる！海軍の軍艦ばくって、盗んだ軍艦で海軍本部の窓割ってやるー！！」

「「アホかー！！！！」」

って言って走り去ろうとしたらモリアとドフラミンゴにしばかれてとめられました。いつのまに仲良くなっただよお前等。しかしこいつ等の能力やっかいすぎだろ。

こいつらに組まれると多分後の三大将並にやっかいなんだぜ。海軍ざまぁwwwwww俺ざまぁ…。

で、まあ真面目にこことか強度増した方が良いんじゃない？とか砲台もつと増やそうぜとかちゃんと言ったらそうするって何か部下に命令だしてた。

てか部下いたんだな、気付かなかったよ。なんか震えている子犬さんかと思ってました。なんか俺をチラチラ見て怯えているですけど何で？

ちよつと気になったって言うか俺のガラスのハートが砕けそうになったから、何で？って本人達には聞けないからモリアに聞いたらさ。「あんた自分が生ける伝説級の海賊だって自覚してる？」とかなかほざくんですよ。伝説？俺はドラク の主人公になってしまっていたのか？

よし、もし自分の海賊旗を持つ事があればロトの紋章にしてやろう。そして俺は勇者になって神竜と世界征服するんだ。

ああ、海賊旗いいな。

「おい海賊旗作るぞ」

「「今更かよ…」」

なんでお二人は呆れているのでしょうか。今の俺には理解できない。
アンインストール。アンイン（ry

そして、何時間か経って海賊旗完成、二人にこの模様は何？って聞かれたので「俺が伝説の勇者という証だ」と言ったら。

肩を竦めてやれやれだぜとでもいうように二人が同時に同じ仕事をしやがったので、二人の額に肉って書いたらまたしばかれました。

「まあ何はともあれ、白髪海賊団誕生ってか？キシシキシシ」

「んでミコトよお？てめえは何を目指してるんだ？」

「LOVE & PEACE…いや冗談だから殴ろうとするな、老人虐待よくない」

ボケたら二人で握りこぶしつくって殴ろうとしてきやがる。こいつら老人敬えつつうんだよ。その見た目で老人にみえねえよって突っ込みいらねえよ。まったく最近の若いものは…。

「まあなんだろうな、俺が楽しめる世界にしたいなこの世界」

こう俺が言ったら、なんか真剣な表情で俺を見つめるお二人さん。そんなに見つめられると照れるんだぜ。えへへ。

「つまりあれか、世界政府を潰すと？フッフフ…流石ミコトだな、やっぱてめえはおもしれえわ」

「キシシキシシ、こいつはそんな事考えちゃいねえ、ただ、気に入らない相手を全部潰す気なだけだろ」

「はん！俺の大きな志はてめえらみたいないひよっこにはわかんねえんだよボケ」

「馬鹿な事を言ってるのはこの口か？キシシキシシ」

「クツ、ハハハハハハハ！やっぱりあんたは面白れえ」

なんだよこいつら俺を馬鹿にしゃがって。モリアは何か知らんが俺のほつぺた引つ張って笑ってやがる。ドフラミンゴは俺の背中叩いて爆笑してやがる。

俺様を敬ってないのはいただけないが、まあ平和っぽいし、なんかこっという雰囲気もたまには悪くねえとを感じる俺が居た。

あの頃から俺は変わったんだろっか？まあ相変わらず誰も信用してないけど。こつこつ日々が続けば楽しいだろうなって思った。

モリアちゃんとドフラミンゴちゃんとミコトちゃん（後書き）

人物プロフィール

ミコト あほの子になりました。

モリア ゴスロリ幼女から少女になりました。

ドフラミンゴ 綺麗な金髪ねーちゃん。

レイリー 白いマスコットのおじさん。

赤い彗星のシャunks

桜咲く、未来、恋、夢…どうも歌丸です。嘘です、ミコトちゃんです。

アレからどうしたかって？まあモリアとドフラミンゴと色々悪巧みごによごによキャツキャわいわいして、なんか準備のために仕事するから邪魔って放り出されました。

俺のこの扱い何なの？愛なの？愛に死ぬミコト。いやつまんねえよ。

んでまあ何か放り出される前にアレなんですよ、王下七武海のお誘いが二人にだけありました、俺は？ねえ俺は？ねえねえ！って駄々こねたらまた二人に笑われました。

んでなんか面白そうだから二人王下七武海やるらしいです。正直ほつとしてます、あいつらがしなかったら原作？なにそれ？食べるの？状態になるからね。

未来に起こるだろう事象がわからなくなったら駄目だしね、いやもう遅いか…。だってなんかあいつら仲よくなってるし。

というより傘下に王下七武海が二人ってどうなのよ？いやまあどうせ一人旅するんですけどね。

遊ぶのに暇だから部下何人かよこせてモリアとドフラミンゴに言ったらさ。

「おまえの遊びに耐えられる人間なんてそうそういねえよ！！！」
「と言われて何かとてつもなくショックを受けたんです。

アレ…？もしかして俺人外の域の遊びをしたのか？と。いやそんなわけねえよな。レイリーも遊んでくれたし。あいつ能力者じゃない一般人だろ？なら大丈夫だ。問題ない。

あとは、とりあえず海軍からオフアーこなかったのがムカついたので本部の門？みたいな所にロトの紋章書いて逃げてきました。

ほんとセンゴクの部屋に描きたかったんだけどね、だって門開けてくれないんだもん。たのもー！ってちゃんと云ったのに皆無視するんです。

そしてまあセンゴクとガープが怒って追いかけて、どきつ　海軍だらけの鬼ごっこをやったわけです。いやああの人たち化け物だわ。確実にガープは人間やめてる。センゴクさんは何か大仏になって張り手してきたり。東大寺に帰れ！って叫んだ俺は悪くない。でも楽しかった。

あー、それとハンコックも王下七武海入りしたそうな。まあほとんど接点無いしどうでもいいね。昔ロリ巨乳だったかどうか確認が出来なかった事だけが俺の唯一の後悔だ。

あとアラバスタでビビちゃんが誘拐されそうになる誘拐未遂事件が起こったって新聞に書いてました。

まだ幼女だろ？ビビちゃん。幼女を拐かすとかアラバスタは変質者と変態ロリコンだらけなのか？怖いな、俺なんてまんま幼女だしな。俺のあんまり行きたくない場所リストに追加だ。

そしてそんなこんなでやってきましたさうすぶるー。フーシャ村、
もとい風車村でござす。

そろそろこの世界の主人公ルフィが海賊目指してヒッターするよ
うな気がしたので来たんです。他意はない。

そしたらよ？なんかでけえ船があるんだわ。どつかでみたことある
なあーとか思ってたらさ、赤髪のにーちゃんが俺の前に走ってきた
んだわ。

そういえばこいつ見た事あるぜ！確かそう…。確か…。

「お前は赤い彗星のシャ　！！！！」

「歩くバスターコールのミコトさん！！！！…シャックスです」

「お前にだけ個人的にバスターコールごっこしてやるうか」

「勘弁してください…」

そう笑いながらちゃんとボケをボケで返してくれるし、突っ込みを入れてくれる良い奴、シャンクスだ。思い出した。

前に会ったのは確かロジャーとニユーゲートと一緒に海軍とチャンバラごっこした頃か。懐かしいな。

確かその時色々メモ渡してネタ仕込もうとしたんだっけな。中々ノリが良い奴だったから少し覚えてる。

歩くバスターコールってほんと面白いネーミングだわ、つけた奴俺が個人的に呪ってやる、いや祝ってやるよ。

「ミコトさん、何故こちらに？」

「俺の心の中のヴァン先生が行けってうるさかったんだ」

「剣術かなにかの師匠ですか？」

ああ、実は俺レプリカなんだよ。ってやると收拾がつかなくなるから辞めておこう。

通じていないようで微妙に通じてるところがなんとも言えないよな。

「それよりミコトさん！暇なら俺と勝負してくださいー！！」

「はあ？」

何を嬉しそうに剣出してるんだこいつは？ちょっと展開についていけない俺ガイル。

「いみわかんねえぞシャックス、ソレは新しいお前の持ちネタなのか？」

「いえ、マジです」

はあ……。何を勘違いしてるかわからないが。なんか俺と勝負するらしい。下着でも勝負するのだろうか？
いくら俺が女に見えるからって……というか幼女だぞ？こいつ……アラバスタの変態どもと同じ穴の貉……？

「お前に見せる下着はねえ！」

「勝負下着じゃないです！！！！剣で勝負してください！」

ちゃんと律儀に突っ込みを入れるシャックス君、君は本当に優秀な芸人だ。関西めざそか。

しかしこのガキは何をほざいてるんだ？俺と剣で勝負？菖蒲？WHY？

「あなたを目指して頑張ったんです、あなたのような海賊になりたいと」

「俺海賊ちゃうで？俺伝説の勇者らしい」

「お願いします」

真剣な顔で俺に何か期待するような眼で見つめてきてる。イケメンだなお前。イケメン死滅しろ。いやまじもうめんどくせえ……。ちよっと驚かせるか。ちよちよいのちよいつとな。

バコオ！！とシャンクスの足元に亀裂が走る。

「え……？」

「太刀筋見えた？見えなかったら菖蒲も勝負もねえぞ？」

「み、見えませんでした……」

なー？勝負なんて駄目なんだよ。俺お前殺したくないし、いい奴だし、面白いし。

馬鹿やって遊んでた方が絶対楽しい。これでわかってくれればいいんだけどなー。

っーかアレだな、剣士として勝負とか今はやらねえんだよ。そういうのは小次郎とかに頼めや。サーヴァント召還！なんてな。

「もっと精進しろって事ですな！わかりました！」

OH…何やら変な方向に目覚めてるシャックス。駄目だこいつはやくなんとかしないと。

一体俺の何をみて、俺を指すと言っのか？こいつの目の前で山を気合でたた切ったのがいけなかったのか。

それとも海軍の軍艦を「このミコト様がたっぷりと料理してやるぜ！」とか言いながら切り刻んだのが駄目だったのか。

子供の頃の刷り込みというか印象深い事柄って歳をとってもそのままのねー。いやまあモリアとかドフラミンゴでわかってた事だけどね…。

まあそんな事よりだ。

「そーいやお前も五皇だっけ？とりあえず俺と一緒に海軍本部で鬼ごっこしようぜー！！鬼はセンゴクなー！」

「とりあえずで海軍に喧嘩売らないでください！謹んでお断りします！！」

俺はがくつと膝を付いてあの台詞を言う。

「認めたくないものだな…自分自身の、若さ故の過ちと言うものを…」

「何かっこうつけてるんですか…」

ほんとはお前に言わせたい台詞なんだよ！ったく、ノリが良い奴なんだが変なところで常識人ぶりやがるのが玉に瑕なんだよなこいつ。しかし世代交代かなんか知らんけどさ。

全然知らない若い子達がなんか台頭してきたって感じ。ここ最近ね。でも隠居なんてしないんだぜ？海軍と追いかけてこけるうちはまだまだ俺も現役だなんて思う。

「そっぴや、白髪と赤髪つてむっちゃかぶらね？もしかしてお前俺

の子供…？いつ俺が結婚した…！！」

「ははは…」

なんか疲れた顔で笑ってるシャンクス。おいおいせっかく場を和ませてやろうとしたのに失笑は無いだろうか？ちゃんと突っ込め。

あ、棒は突っ込まないでね？俺そっちのけないから。まだ処女でいたい。

「それより腹減った、飯食わせろー！」

「そうですね…ミコトさん、店行きましょうか？」

「お前のおごりな！老人は勞わらないとのう？」

「あなたの姿であの言動じゃあ誰も老人だとは思いませんよ…」

なんかすごく疲れてるシャンクス。何か拾い食いでもしたんじゃないだろうか？少し心配してやろう。するだけだが。

そしてまあお店に行つて飲み食いして満足して一つテーブル借りて横になつて休んでたんですよ。そして気付いたらなんかどこかで見た事があるようなガキが何かシャンクスになつてた。

ああ、アレがルフィか。アレが未来の海賊王ですかー、主人公ですかー。まだほんとガキだな、どれくらいかっていうと幼稚園児みたいな感じ。

子供なあ…自分の子ね…。まあ出来ないからどうしようもないな。成長しない身体。ガキが作れない身体。嘆いてもしゃーないけどね。今更だ。

あー何か寂しいかも。何か中途半端に人と触れ合つてたから感覚がおかしくなつてるかもしれない。

もう別にシャンクスとルフィのお涙頂戴漫談なんて見てもしかたねーしな。どっかいこう。

俺は店を出てフーシャ村を後にしようとする。

「おじょうちゃん、一人で出歩くのは危ないぜ？ぐへへへへ」

OH…山賊か海賊かチンピラかわからないが、変なオッサンに絡まれてしまった。
めんどくさいのでとりあえず首跳ねとこうしよう。

「よかったらお」

最後までオッサンの言葉は続かず、彼の首はヒューンと飛んでいった。

確かにこの姿は相手を油断させるのもってこいだが、こっという事

が多々あるのが少々めんどくさい。

何か面白い事ねーかなー。そういえば革命軍とやらを直接見た事ねえな。何度が勧誘は来てたんだけど全部断ってた。

「我は世界を征服する王なり、誰の指図も受けぬ」とか「俺はノンケでいたいんで」とかよくわからない事言っただ断ったなあ。

そーいえばイワンコフ捕まったんだっけ？最近聞かないし。まだ革命軍もドラゴンも有名じゃないしなこの時代確か。

「はあ、人生ままならねーですよ」

マジほんとままならないって。海軍に居たまま大将にはなれないか、悪魔の実の能力者じゃないし。中将までなって正義の味方ごっこしてたほうが楽しかったのかなあ？

てゆかあれは駄目だ。束縛がありすぎて俺のフラストレーションが爆発して本部が壊滅する。

大佐になるまで我慢した俺を流石一般人だと逆に褒めてやりたいところだ。

偽りの正義を掲げて、容赦なく海賊や荒くれ者の弱者達を責め立てて、それが楽しいのならそれでいいんだけどね。

正義とか悪とか二元論に逃げちゃう人間はそっちに走るのかね？俺にはわかんねえや、楽しいか楽しくないかじゃないの？ああ、俺も二元論じゃん。

「あ、シャंकス赤い彗星化計画のメモ渡すの忘れてた」

これ、結構重要な事だったのに。普通に忘れていた。最近物忘れが激しい。次はいつ会うだろう？まあその内また会えるでしょ。俺が生きてさえ居れば。

いつまで生きられるのかなー。なんか病気で成長しない身体なんですけど。もう軽く70代いきそうですよ。精神で言うとな90代の大台。

精神は身体にひっぱられるというけど、俺はいつまで”若く？あり続けられるのだろうか？老衰で衰弱していく自分なぞ考えたくも無い。

できる事なら、これから好き勝手に生きて、好き勝手に死んでいきたいものだ。何者にも縛られる事無く。あるがままに。

これがシュタインズゲートの選択だよ

おいすー。今日も今日とて、「お前は誰だ！お前は誰だ！」と鏡に向かつて一人叫んでる可愛い幼女ことミコトだよ。男だがな。うるさいって後ろに居るモリアに何か黒いのを投げつけられてるが気にしない。愛情表現だろ？照れるぜ。

皆が多分大いに疑問を持っているであろう事に俺は答えてやろう。俺がパ イパンなのかそうじゃないのかだ。俺パ イパンで処女だぜ。

まあそんな事はどうでもいいがな。

アレからどうなったかって？せやな、特にする事もねーからモリアの所に住み着いてる。いわゆるニート。俺ニートが夢だったんだ。ニート神におれはなる！！あの白痴にはなりたくないですけどね。あれ…もしかしてもう…手遅れ…？

まあフーシャ村からまたこの魔のトライアングルダラスに帰ってくるまでに色々あった事でも話そうか。

フーシャ村から出てまた後悔はしてないが航海をはじめたわけなんだが。いつもどおり海賊やら海軍と遊ぶ旅になるのかなって思ってたんだ。

けど、ちよつと違ったんだ。なんかね世界政府がちよつと本気だしてるみたい。

とある街でちよつと食料とか水補給してたんですよ。ええ。そこまでは別に何も問題ないんですがね。

サファリボールだかサイファーボールだかしらんけど、なんか六式つかう奴等が3人ほど俺めがけて襲ってきやがったわけ。

マジソリソリだったよ。マスターボール持ってこい！って言っても無視するしね。あいつら人の話を聞かないからなあ。

追いかけてこもなんかあいつら本気すぎて萎えちゃって。適当にあしらって街を出るしかなかったね。ちなみに3人は死んでない。相手するのもめんどくさかったしね。

このままだと俺の平穏な生活が乱れる！そうおもって世界政府に直談判しに行こうと思ったわけ。

またマリージョアかよみたいな感じだったけど、平穏のためには行くしかねえなつてそう、感じたんだ。それでまあ行つたわけなんです。

建物の中に入れませんでした。俺の平穏のために直談判しにきたんじゃあ！通せ！って門番さんに言っただけで無視されました。それどころか海兵呼ばれてさあ大変。

ム力ついたんで壁に口トの紋章描いてやったのさ。そしたら海軍のアノ筋肉アピール大将が呆れながらこういうのさ、「もういい加減にしるよ？」とね。

俺は正直理解できなかったし、海軍大将も理解できなかったと思う。相互理解って難しいよね。とりあえずいつかのモリアみたいに人差し指突き出してコンタクトを取ろうとしたんだ。

筋肉大将は「ああ？」とかご立腹でコンタクトを取ってくださいさらなかった。そのときのシヨックは計り知れないものがあつたね。

そしてまあいつものように追いかけっこがはじまつたんですけど、その日は何か違つたんだよ。大将なんかいいたそうにしてるわけ。んでまあ、言いたい事も言えないこんな世の中じゃ〜とか筋肉大将に向かつて言っただですよええ。

それに筋肉大将は答えるかのようにさ「政府に目を付けられてる、おとなしく出来んのかお主は」とか、なんか俺に諭すように語り掛けてきたわけ。

この人の事あんま嫌いじゃないんだよね、海軍なのに政府公認じゃない奴隷船なんかはちゃんと取り締まってた。人攫い？の船かな。一緒に奴隷船解放もした事ある。解放した後またんかー！あばよーとつつあんみたいない関係だったんだよ俺ら。

結構上層部の人らに煙たがられてるらしい。その内大将じゃなくなるんだろー、後任がああ三人の誰かなんだろーね。

「そろそろ歳だから隠居しろというのか！！！小童！！！」とか俺もちよつと笑いながら言ってたと思うんだ。だけどその日の大將はノってくれなかった。

「わしの後の大將はわしみたいに甘くないぞ」とか真剣な顔して言うんですよ。

あー…何賊の心配してるんだが…。あんた、海軍に向いてねえよ。保父さんやれ保父さん。そう思ったけど、何か白けちゃってその日はそのまま俺は大人しく去った。

ただ、なんというか妙なパワーバランスで今の世の中は動いてるらしい。俺と白ひげどつちかが欠けたら無秩序な海になるとかならないとか。

筋肉大将のおっさんは去り際に呟いてた。難しいんだね！俺難しい事全然わかんねえよ！

海軍の人材不足も深刻みたいだな。俺そんなにぶっこおしてないとおもうんだけど。

とかまあそんな微妙にシリアスなような哀愁漂う世代交代を目の当たりにしてしまったわけですよ。切ないなあ！どうでもいいけど。

そんで、モリアが五皇のカイドー？海堂となんかいざこざあったみたい。

何か部下いっぱい死んだらしい、何かイライラしてた。でんでんむしで聞いたんだけどさ、何か珍しく神妙っていうか大人しかったね。アレは間違いなく後々爆発する。

多分どつかの島が地図から消えるくらい。んでなんか俺に謝ってた。よくわからなかったから今度は俺も混ぜろって言ったら。うんって答えただけだった。

マジで俺も呼んでくれれば良かったのに。マムシとテニスやってみたかった。アレだろ？フシーフシーが口癖でブーメランスネークとかが必殺技のアレ。俺ちゃんと知ってるんだぜ？

後はそうだなー、シャンクスが片腕魚の餌にしたらしい。原作のアレだろ？どうでもいいやつておもった。そんなどうでもいいことまで新聞は伝えるんだからすごいよな。

フィッシュマンも死んだし、アーロン捕まったらしいし。世の中目まぐるしく変わっていくね。

そうそう、世界政府の帰りにシャボンディ諸島寄ったときレイリーに会ったんだが、なんとシャンクスも居たんだよ。これは…間違いない…運命の出会い！とか妙なテンションで俺話しかけたな。そのときの会話も俺は何か空回りしてた。

「おい！片腕じゃ運動しにくいだろ？オートメール付けようず」

「相変わらず何の事を言ってるのかわからないです…」

「ハハハ…」

ああ、そういえばオートメールは別の世界だった、この世界はワンピースだったけ？最近ボケてきたのかなー。

「ああ、この世界にウィンリィは居なかったな、残念だな…」

そう言いながらシャンクス肩に手を置く。けどなんかシャンクスは晴れやかなイケメン顔をしてさ。

「…これは男の勲章みたいなもんですよ、未来への代価だと思えば痛くない」

とかかつこつけやがるんですよ。何か大人の階段のぼるーって感じで一つ上の男になってやがったんだよね。
もうこれからはあんま坊や扱いできねえな。残念。

「これ渡しとくわ」

「？」

昔渡し損ねたシャンクス赤い彗星化計画のメモを渡す。

「今度はデュランダル議長編も作って持ってくる、じゃあな」

「は？え？ちよつとミコトさん？」

あのボイスでさん付けされるとその内裏切られて後ろからあいつに刺されるんじゃないかと、そう思う俺は悪くない。まあ別に味方って訳でもないしな。

そんなこんなでシャボンディ諸島を後にし、ダークカイザーもといモリアが居る魔のトリアングルダラスに着いた訳なんだが。

着いてすぐ抱きつかれたんですね。なんか涙目になってるゴスロリ少女、ただし俺よりでかい。

なんか寂しかったのかなーって、あやすようにシモネタとか飛ばしたり、変なネタを交えて笑わせてやろうとおもったんだけどさ。

黙って手握るだけなのよね。やだこの子怖い…、何狙ってるの？俺のタマ（命）か？

とまあ内心ドキドキ恐怖しながら居ただけど、2・3時間くらい？そのまま俺ずーっとされるがまま立つてたんだわ。すごくこわかったです。

そしたら疲れたろ？部屋で休みなって感じで、そのまま俺はホイホイ付いていったんですよ。

船の中みたら怯えて俺を見る子犬ちゃん達の数マジ減ってたねー。

まあ部下の数がまた元居たくらいまでに戻るまでは居てやろうかなって思ったわけだ。俺らしくないけど別にたまには良いと思う。思えばどこかに腰を据えてじっとしてたことって無いしね。

お外で元気にのた打ち回るのもいいけど、あの筋肉大将が言ってたようにちよっと冷却期間も必要になってさ。最近動きづらいんだもの。

そしてまあ鏡に向かって叫ぶ俺が居てうるさいって黒い何かを俺にぶつけるモリアっていう今現在に至るわけです。

巷じゃジンベエの王下七武海加入によりアーロンが恩赦によってインペルダウンから釈放されるとかいふ噂っていうか新聞で見た。

どんどん原作から乖離して行ってるようで原作のままのようなそうでもないような。変な感じ。

俺という異物がありながら、それでも原作の流れに戻ろうとするこ

の妙な感覚。

そうか、これがシュタインズゲートの選択なのか！とか馬鹿な事を考えながらぼーっとしてたらモリアが話しかけてきた。

「ミコト、布団洗うからどいて」

「それが…世界の選択でちゅか！」

とあるハムスターの真似をして返事をする俺。

はあ…とか呆れながら、でもなんか嬉しそうにしてるモリアさん。
俺はどこで選択肢を間違ったのだろうか？

こんなに平和で穏やかな日々がくるだなんて思っても見なかった。
やばい。うずうずしてきた、カカロットみたいに強い奴と戦いたい
とかそういうのではない。

ただ、面白い事が無いとだめなんだよ。退屈は俺を殺す。暇は脳を
殺しちゃうんだよ。どっかの銃ぶっぱする三蔵法師も言ってただろ？

と、最近ハムスターと馬鹿やりながら平和に暮らしております。これ
からどうなるんだろう。突然ハムスターが牙をむいて襲ってくる未
来もあるかもしれない。

これがシュタインズゲートの選択だよ（後書き）

同じ空の下で - 完 -

[illegible]

ミコトちゃん寝る（前書き）

精神的成熟度

ト
ド
フ
ラ
ミ
ン
ゴ
>
>
>
>
>
超
え
ら
れ
な
い
壁
>
>
>
>
モ
リ
ア
>
ミ
コ

ミコトちゃん寝る

矢のように過ぎる日々、置いてかれないように時間を止める術など誰も持ってはいない。

だからこそ、今を楽しむのだ。そう、それが誰かの迷惑になろうと俺は戸惑わない。躊躇しない。

「という訳で、そろそろ海軍本部のセングクの部屋にモアイ像でも置きにいくと思う」

「脈絡もねえし！いみわかんねえよ！！」

俺が折角日々の癒しにセングクちゃんの部屋にモアイ像を持っていこうと宣言したらモリアさんとドフラミンゴさんに怒られました。弱いボクは泣くしかなかったのです。しくしく。

でも泣き寝入りなんて面白くもなんとも無いので少し反論したりします。

「俺は悪くねえ！俺の心の中のヴァン先生がやれって言ったんだ！」

「思いつきでモノ言ってるアホ面が更にアホ面に見えるからやめろ」

ドフラミンゴさんも俺に毒されたのか現代人臭い返しもできるようになりました。モリアさんもです。

俺は悪くねエ。

まあ何ヶ月も一緒に生活してたらなるよな。モリアなんてはっちゃける前から過ごしてたの合わせたらそうとう一緒に生活してる。

「なーなーモリア、いつになったらお外でのたうちまわれるん？」

「……」

「相手してくれないとグレてマリージョアを世紀末にするぞ？天竜人全員モヒカンにするぞ？」

「はぁ…少し頭冷やそうか…」

無視されました。ため息つかれました。某白い悪魔みたいにすごまれました。怖いネー！

最近スルースキル半端ないっすね！ちょっと真剣にぐれようか悩んできた自分がいる。

なんで俺が未だにモリアのところにいるのかというと、七武海に俺の抹殺命令が出たそうです。

何でも最上位の危険な人物に認定されたそう。何が原因でそうなったのか俺にはもちろんわからない。

ソレをモリアから聞いた俺はもちろんこう返した。

「王下七武海の皆さんに集まってもらってバトルロワイヤルですねわかります。今からここで皆さんに殺しあってもらいます。だろ？」
モリアはあほかと言って聞き入ってくれませんでした。

そこでドフラミンゴもモリアの船にやってきて、さあバトルロワイヤルか！って意気込んで覇気まとうて臨戦態勢で俺は相対したんだけどさ。

「ほとぼり冷めるまでここで隠居生活しろ」ってドフラミンゴさんが俺の頭でなでしながら仰るんですわー。予想外です。てっきり殺しあって楽しもうぜ！！これが殺し愛だ！！って展開を期待してたんですけどね。

しかしまあ、あの筋肉アピールする海軍大将の言つとおりになってきたなー。

「おいコラ、何いじけてやがんだ」

何か回想してて物思いに耽っていたら、いじけてると思ったのかモリアさんが俺のほっぺをつんつんしはじめました。

「ほんとおまえ歳とらないよなー、なんだよこのもちもちほっぺ」

「羨ましいだろ？永遠の8歳だぜ」

「ほれほれ、キシキシシ」

ほっぺたぐにぐにつかまれています。ちょっと痛い。

「ふぁふふぉひんひはひ」

「キシキシキシキシ」

なんだこれ…新手のいじめですかそうですか。いじめよくない！
俺もモリアのほっぺたを引っ張る事にした。

「ふぁひふふうふぁふぁ」

「ふぉふほぁはふいひほふふひよ」

「お前らそんなことして楽しいか…？」

不毛な争いをモリアとしてたらエプロンを着たドフラミンゴさんが
呆れた表情でお手上げだと言わんばかりに肩を竦めて俺達を馬鹿に
してます。

ちよつとムカつとしました。モリアと目を合わせて頷き合います。

「ふおまえふおやれええええええええええ」

「ちょ、こつちくんてめえら！」

そして何故かもつれ込み、片手でモリアとドフラミンゴのほっぺを引っ張るといふわけのわからない状態。モリアも同じ状態。ドフラミンゴさんは肩をわなわなさせてます。

「飯ができるまでくらい大人しくしてろ！」

モリアと俺がドフラミンゴに拳骨されます。痛いです。ぐすん。しかしまあドフラミンゴのエプロンの似合う事似合うこと。

手際よく皿を並べていく様はまるでよくできた奥さん。誰の奥さんだよこいつ。

ほんとうにわけがわからないよ。

「チャーハンなのね」

「えっ…いや…」

なんというか予想外の反応で俺はどうしたらわからなくなって、反応に困った。喧嘩売ってんのかぶっ殺すぞって感じでかえってくると思ったのに。

「反応に困るなら言つなよアホだろおまえ」

「ばっか、思いつきで喋らなくなったら俺が俺じゃなくなるだろ！
！」

「どんなアイデンティティーだよ…」

「馬鹿ばっかだなキシキシシ」

いつの間にか食べ終わってたモリアさん。ゴスロリ少女に馬鹿にされた、すんげーすんげーシヨック。
自分もさっさと残りを食べる。

「ゴスロリにチャーハンって合わないね、脱いで食えよ」

「もう食い終わったっつの」

「たまにはてめえら片付け手伝えよ」

「「おかーさんいつもありがとう!」!」」

「おまえらいつぺん死ねよ」

モリアと仲良くおかーさんよばわりしたら怒っちゃいました。けど律儀に片付けてくれるドフラミンゴちゃんマジ天使。

なんつーかここまで怠惰な生活続けるともう一人で居られなくなりそうで怖い。

食い終わって暇になった。何しよう。

「暇だ、トランプでもしようぜ」

「ばば抜きしようぜ！キシキシシ」

「いや、お前ら食器片付けるの手伝おうな」

ドフラミンゴさんが結構怒ってらっしゃるので仕方ないので手伝います。怒らせると怖いんです。

そうそう、何か最近俺幼児退行してると思うんだ。何か考え方がこどもっぽくなってしまった。行動も。何が原因なんだろう。今度ドクトル・ホグバックにそうだ…いやあいつ外科医だった。この島というか船に内科の医者いねえ！！

「おい、今気付いた。内科の医者いねえぞこの船」

「ああ？拾い食いで出したのか？」

「恋の病ですとか言い出すぞこいつ。キシキシシ」

「あれれ？おかしいな？このドキドキは……心不全wwフヒヒヒwwwwww」

一人で爆笑してしまった。二人にジロ目で見られています。はずかしい。

「おまえのその笑い方は笑ってるのか、馬鹿にしているのかわかんねえんだよな無表情すぎて」

「表情筋が鍛えられる事無く幼少期が過ぎていったものでサーセン」

「どんな幼少期だよ…」

「死んで起きたら赤ん坊でした」

「噓乙」

ほんとなんだけどな。誰も信じてくれないのwwwwwwワロスwwwwwwワロス…。

このままだと俺は狼少年みたいに誰にも信じてもらえなくて、食糧難になって無一文から天下を目指す羽目になる未来を想像した。

俺サイヤ人じゃないから無理だわ。でもあの人なら！ポロリのなかのひとならやってくれる！

「嘘じゃねえよ、前世は皇帝です」

「童貞の間違いだろキシシシシシシ」

「ちげえねえ」

「私の戦闘力は53万です」

「宇宙の帝王乙」

「海軍本部ぶっ飛ばしてこいよ」

なんというか普通に現世ネタが通じるようになってたのがとてもなく嬉しい。

というか大丈夫なんだろうか？七武海同士のコミュニケーション…は無いんだったなほとんど。海軍のおっちゃん達には定期的になんか報告せなあかんらしい。そのときのこいつらが心配である。

「そっぴや明日お前等七武海の定期報告とかあったんじゃなかったっけ？まったりしてていいのん？」

「「そっぴや」事は早く言えよ！！」」

こいつらすっかりしてるようで、どっか抜けてるんだよね。原作のあいつらの見る影が無いね。もはや別モノだぜ。楽しいから良いけど。

何というか、こんなに平和でいいのかねえ。

はじめてのおつかい（前書き）

はじめのおつかい

会えば喧嘩してたね。長く居すぎたのかな？どうも、甘い結婚を夢見る切ないミコトちゃんです。

離婚しかけの夫婦の一人息子に向かって喜ー！って叫ぼうかと思つて、実はもう叫んでたくらい好きだったかもしれないねアレ。まあわからないですよねこれ。

最近の若い子にわかり易くいうと…100円均一のおもちやの剣を振りかざして「ディアス！」とか「空破斬！」とかしたくなるお年頃が自分にもあつたわけですよ。余計わからんか。

アレから何年経つたっけ…？何かもうここ数年ボケというか、脳の老化が進んでるのかわからないが記憶がおかしいんだよね。

このままいくと素で「ばあさん飯はまだかのう？」「もう食べたでしょおじいちゃん」と、まだ食べていない箸のモノを食べた事にされて憤慨して、病院で奇声をあげながら廊下を走り出してトライアスロンで優勝する未来が見える。

ドクターカオスほどの天才でもボケには勝てなかったんだから、俺がボケに負けても仕方ないと思うんだ。でも身体のほうはバリバリで元気です。

特にまあ変わった事はなかったかな？あんな感じで七武海のお二人ことモリアさんとドフラミンゴ母さんと馬鹿やったりして平和に何年か過ごしてたんだけど。とうとう俺は飽きてしまったのです。

このままじゃ俺腐っちゃうなあと。培養されたブリーみたいになるのはゴメンなんです。

家族 画じゃあるまいし何で俺が家族ごっこしないといけないのさ？でも好き勝手にくい世界情勢。もとい俺の状況。世の中まならねーってやつですね。

だけだよ？このまま大人しくして居ると思ってる奴は俺がどういう奴かわかっていませぬ。

情勢？何それ食えるの？俺はフリーダムに乗ったキよりノリノリだぜ？自分のコンディションは、毒ガスで困った人が居たらその地域まるまる陥落させて助けるくらいのテンションまで高まっていた。

ちなみに今日は俺のお目付け役みたいなお二人は居ません。むふふ、えっちな本も読み放題。いや、読まないけどね。

何かお仕事が忙しくなったらいいんだ。ちなみに俺はお留守番。はじめてのおるす（ry:じゃないよ？そんな展開は無い。ありえないし、認めない。

それが俺の女神に捧ぐ愛だ！

「…女神って誰やねん！」

自分で自分に突っ込む、セルフ。ぶっちゃけ一人で居ても暇すぎるんですわ。この世界はテレビゲームも無いし、pcも無い。だからネットなんて無い。

「俺がゲイ になっておじや魔女踊ってやろうか…」

歌って踊れるCEO、バルマーの方が好きだけだね。あのノリのよさとキティ具合をとてもリスペクトしている。…思えば変な文明だよなこのワンピースといいナルTOの世界といい、電気あるのになんでこっち方面変な感じに発達してたりしてなかったりしてるんだ。そのせいでおうちで時間を潰そうにもセルフかくれんぼやら、セルフ鬼ごっこ、セルフで全部しなければならぬ。アホか。寂しすぎるでしょう？

あいつらが帰ってきたら「べ…、別に寂しかっただなんて思ってたんだからね！」ってツンデレごっこをするしかないな。でもただ待つのは面白くない。

「そうだ、バロックワークスに行こう」

京都に行くノリでバロックワークスに行くのもどうかと思うが、俺はそんな事全然気にしてないんだ。

モリアさんとドフラミンゴさん、最近疲れてると思う。仕事潰けだしさ？確かあそこは疲れが取れる薬作ってたはず。飛べる感じの。アレを二人にプレゼントしちゃおうというわけ。

ダンスパウダーだっけゾンビパウダーだっけ…。…ゾンビパウダー

だな。確か副作用で不老不死になるアレ。あいつら俺の身長馬鹿にするしさ、癒しついでにお前ら不老にしてみよ。フヒヒヒヒ。

あいつらの部下達に見つかからないように、まるでNARUとに出てくるザブザブザブザさんのごとくサイレントキリングしながら抜け出す。

そして何も考えずにひらめきと直感と淡い恋心を抱きながら俺はスリラーなおうちを後にした。

そおい！

そしてやってきましたアラバスタという変態の樂園。ロリ好きばかりの王国。いやね、着いてから思い出したんだわ。俺にとってここは鬼門だったという事に。

アレだろ？幼女ビビみたいな子が居たら問答無用でロリコンに連れ去られるような危ない国なんだからここ。

ほら、なんかあのスキンヘッドのおっさんもなんかじろじろ俺の事みてるしさ？連れさられちゃうの？俺。んで物陰に連れ込まれてアツ！

…絶対にノウ！どうせなら女装が似合いそうな美男子がいい。いや、可愛い女の子がいいです…安西先生…武道テニスがしたいです。

んでまあ城下町歩いてるんだけどよ？見事に寂れてるっていうか、治安悪そうだからここ。確かに兵士もいるんだけどさ、どう表現するのがいいんだろ。

アレだ、三国志の後漢後期の洛陽というかジャポンで言う応仁の乱の後の都みたいな感じじゃねえのこれ？いや、実際見た事もねえんだけどさ。そんな感じ。

とまあおっかなびっくりビクつきながら、ロリコンに襲われないように目立たないように暗い路地歩いてたら、何か見た事ある女の人
が目の前にいらっしやるではあーりませんか。

誰だったっけ…そう、あいつはS O ! 閻魔アイキャンフライ……い
っぺんとんでみる？ああ、能登かわいいよ能登。愛してる。

そして俺は誰かちゃんと思いいせないまま目の前の女の人に声をか
けちゃうんだ。

「おじょうさん。結婚からはじめよう」

「!？」

女の人が声のしたほうに振り返り、俺が居たわけだが。なにやら俺
の顔を凝視して驚いている。なんで？可愛い女の人には結婚からは
じめようって声をかけるんだろ？

それとも俺のあまりにぶりちーな容姿に惚れてしまったのか。一目
惚れですねわかります。明日は天中殺や…。

「貴方…白髪？」

「白い髪が珍しいですか？おじょうさん。かわいいでしょ？えへへ」

どうやら俺の白い髪が珍しくて驚いたみたい。こんなに綺麗な白い髪は流石レアポケモンの俺だと褒めてやりたい所だ。っていうかよく顔見て声聞いて思い出したわ。こいつ閻魔アイフォンじゃない。こいつ確かニコロビンソン。原作の登場人物で重要人物。川原の道を自転車で爆走して風になる女だ。

「貴方、私が誰だか知ってて言ってるの？」

「もちろんさあ！俺と同じ悪魔タイプのポケモンでしょ？」

「！？私と…同じ…？」

そうそう、オハラシティで確か警備員に負けて家族もろともポケモンゲットだぜされそうになるところを命からがら逃げ出して。確かミュウツーみたいに指名手配された女の子。

「うん、まあ俺の場合産みの親から悪魔タイプ呼ばわりされてるんだけどね」

「…」

うんうん、あの頃思いた…せないだど!? あれ? 俺幼少期どんな風にすごしたんだっけ…。いかな最近またボケが進行しているようだ。誰かドクターカオス呼んで。

後なんか親のことを何故か聞かれたから殺されたって答えた。

あんまり思い出せないけど確か…俺の心の中のヴァン先生に殺されたんだっただと思う。アクゼリユスを救うために俺の両親は犠牲になったのだ…犠牲の犠牲にな…。

世知辛い世の中だなあと回想しているとなにやらロビンちゃん俺をじーつと見てまた黙っちゃったんだけど? なんで? 俺なんか悪い事言ったっけ? 悪魔タイプうんぬんは俺みたいに可愛いつて意味で言っただけど…。

「そう…貴方も…」

「!?!」

いきなりで俺は驚いたあ。どれくらい驚いたかというとなのはさんとサクラちゃんが筋肉少女として共演するアニメを見た夢を見たときくらい。

なんか悲しそうな目をしながらいきなり俺を抱きしめたんですけどこの人…まさか…俺食われるの…? 可哀想だけどお金が無いから貴方を今日の夜のおかずにするわ。

みたいな? 晩御飯にはなりたくないよママ…。

というような思考がぐるぐるまわります。なんとかこのわけのワカラナイ状況を脱出しようと笑って誤魔化そうと表情を作ろうとする俺なんだが、いかんせんそんな表情なんて作れない。

「無理に笑おうとしなくて良いわ、泣きたい時は泣いていいのよ？」

何を勘違いしていらつしゃるのでしょうかこのロビンソンさんは。
俺が泣きたい？WHY？なんか俺を抱きしめながら俺の頭をなでな
でするんですけど？

そうか…俺の綺麗な白い髪を妬んで摩擦で燃やそうとでも言うのか
！！！！ニコロビン…なんて恐ろしい子！！

俺は困惑し、混乱しながらニコ・ロビンに恐怖を覚えていると。ロ
ビンさんが優しく俺に語り掛ける。

「どうしてこんな所に居るの？」

「仕事で忙しいお母さん達のためにおつかいに来ますた」

「そう…偉いのね」

なんだなんだ？なんでそんな優しいな表情で俺を見る。そして頭撫
ですぎだこら。こいつのせいで俺の頭がはげたらこいつの頭モヒカ
ンにして世紀末スタイルにしてやる！

s i d e ロビン

「おじょうさん。結婚からはじめよう」

「!？」

仕事の後一休みしていたら後ろから幼い女の子の声が聞こえた。気配なんて無かった。それだけでも驚きなのに、その声の主を見たと
き私は驚愕した。

「貴方…白髪？」

手配書で見た事のある風貌、あの伝説の海賊白髪のミコトが目の前に居た。もう何年も音沙汰がなく、世ではもう死亡説が流れていた人物。

まさか自分を捕らえにきたのだろうか？いや接点は無いらしいこの人は

そんな事をわざわざするような人物では無い。そもそも私以上に政府に目の敵にされている人物だ。何が目的なのだろうか。

「貴方、私が誰だか知ってて言ってるの？」

「もちろんさあ！俺と同じ悪魔タイプのポケモンでしょ？」

またまた私は驚いてしまった。自分は悪魔の子と呼ばれているが、この人の呼び名でそんなものは無い。だが嘘を言っているようには思えない。

そんな嘘を付いても仕方ないからだ。そしてとんでもない事を私は聞いてしまった。

「うん、まあ俺の場合産みの親から悪魔タイプ呼ばわりされてるんだけどね」

私は絶句した。産みの親にまで悪魔呼ばわりされるなんてそうとうな事だ。気になって両親のことを聞いてみたら殺されたらしい。親の事を言うときすごく寂しそうな目をしたのを私は見逃さなかった。

「そう…貴方も…」

寂しいのね。両親にすら悪魔呼ばわりされて、その両親すら殺されて……。私にはちゃんとした親が居たからわからないけど、想像を絶するくらい悲しい事なんだろうね。

私は思わずその小さい身体を抱きしめてしまった。するとこの人は驚いたようなそぶりを見せて、でもどうしたらいいかわからないとでも言うように困惑していた。

親に抱きしめてもらった事すらないのだろう。なにやら泣きそうな表情をしている。それとも何かに負けないように我慢しているかのように笑おうとしている。

しょうがない人ね。

「無理に笑おうとしなくて良いわ、泣きたい時は泣いていいのよ？」

そう言いながらこの人の頭を優しく撫でる。どうしたらいいかわからない子供のように困惑する様は、ほんとうに子供みたいだった。なにやら怖がっている子犬みたいに見えてきて思わず私は微笑んでしまう。

そっぴいえは何故ここに居るのだろう？

「どうしてこんな所に居るの？」

「仕事で忙しいお母さん達のためにおつかいに來ますた」

産みの親は殺されているらしいから、多分育ての親だろう。しかし自分も子供を持ったらこんな感じなのだろうか？
こうして優しくこの子を撫でているとなんだか母性愛？というものが自分の中に生まれてくるような錯覚を覚える。
この子扱いは失礼かしら？なんかちよつと拗ねてるようにも見える。
ふふふ…可愛いじゃない。

s i d e o u t

「こら、いつまで撫でてんだ？ハゲたらどうする」

「あら？嫌なら逃げてもいいのよ？」

コイツ…コワイ…。純粋な好意なんだろうか？それとも何か狙っているのだろうか。俺金あるけど、今持ってないぞ。

俺が恐怖で逃げられない事をわかってて言ってるのならたいした奴だ
！！ここ何年か女に対して恐怖を覚える今日この頃である。

「それでおつかいはなにが必要なの？ミコトちゃん？」

もうやだ、この人俺の事完全に子供扱いする。こわいよ、誰か助けて…心の中のヴァン先生を呼ぶが、親指だけを立てて歯を見せて笑っているだけだった。ヴァン先生使えねエ…。

えーと俺は何しに来たんだっけ…恐怖の連続で忘れてしまった。確かアレだ…アレ、養命酒…じゃねえよ。ゾンビパウダーだ。

「ゾンビパウダーっていう薬。疲れに効くらしい」

「聞いた事ないわね…」

ふむ、ロビンさんは知らないらしい。まだ作られてないのかな？仕方ないね。

でも折角来たんだし観光かもしくはクロコダイルに会って遊ばないとつままない。

「社長なら知ってるかもしれない、案内してあげる」

「ああん？なんで？」

俺が言おうとした事をまるで予想していたかのような言葉を聞いて混乱は有頂天になった。

「そんなに怖がらなくても大丈夫」

「ちよつと言ってる意味がわかんないっすね……」

「私に任せなさい。悪いようにはしないから。ね？ミコトちゃん」

そう言いながら駄々をこねる子供をあやすように頭を撫でて俺の手をもう片方の手で握り連れ去ろうとするニコロビン。気分はドナドナドナルドです。

もうわけがわからないよ。こうして俺はロビンさんになされるがまま連れて行かれるのであった。

はじめてのおつかい（後書き）

人物プロフィール

ミコト 痴呆がはじまった老人。最近老人ホームから抜け出した。

ニコ・ロビン 勘違い娘 でも核心を突いてきてたりするかも？

心の中のヴァン先生 ミコトの妄想上の人物 ナイスゲイ

クロ子だ！要る？（前書き）

原作の”今？まで10年切ってるんで話の中の時間の流れは減速していくっぽい。

時よ止まれ

君は誰よりも面白い顔だから。

クロ子だ！要る？

夢の国を探す君の名を！誰もが心に刻むまで！君を殴るのを！俺はやめない！どうも皆さんこんにちば。太公望ことミコトです。

宝具は可愛い下着、そして今居る国は変態ロリペド野郎達のすくつ（何故か変換できない）、アラバスタ王国。

殷の国並に荒れ果ててるのであなたが間違っているのではないよなここ、ほんと一揆が起これないのが不思議。やばすぎて一揆すら起これないのか？俺はまだ来て2日目なのでよくわからない。

悲しみを乗り越えた民の微笑みに、ワニを信じて良いですか？良いんじゃないかな。本人達が幸せなら。

などと、現実逃避する俺は絶賛大ピンチだったんだよね。どれくらい大ピンチかだって？自作p.cしててUSBのケーブルを別のピンの所に刺したまま通電して、コンデンサが妊娠して妹が爆発するくらいやばかった。

昨日さ、綺麗なお姉さんがロビンさんだと思わずに話しかけちゃってさ。そのロビンさんがまさか幼女スキーマの変態だとは思ってもみなかったたので、ノリノリで会話しちゃったんだよなあ。俺：なんて奴だ…。

いやさ？原作どおりの性格だと思っじゃん？全然違っって言う、でっていう。もう俺の記憶曖昧3cmすぎて信用できねえんだけどさ。ほんとどうしちゃったんだろう俺。

ん？どんなピンチで今どうなってるかって？まあそう慌てるな、まだ慌てる時間じゃない。

「そろそろ行くわよ？」

「ペロペロキャンディがないじゃないですかやだー！」

「行きしに買ってあげるから……」

ロビンさん優しいですね、俺なら殴ってます。良いお母さんになれますようん。とか思いつつ飴ちゃんを貰う俺がジャステイス。まあそれは一時置いといて、そう、アレは前日の事だった。

宇宙人がM Bの黒服よろしく連れ去られていく感じで引き摺られ

ていった俺なんです。流石に休まずぶつ通して来たのがまずかったのか、すんげーすんげすんげすんげ水g…じゃなくて疲れた。だからとりあえず「ここまで来るのに疲れたですう。休みたいですうお花人間！」って某緑のオッドアイのお人形さんの真似をしたんだ。

そしたらさ、「…貴方、自分の立場わかってるの？街の宿なんか泊まれる訳ないでしょ？」って返して来るんだよ。サノバビッチ！まあ確かに街の宿屋なんか泊まったら、街のロリコンや変態達が襲ってくるかもしれない。そいつぁ駄目だ、のーさんきゅーばたんきゅー。なんとかしてよー！ニコえもーん。って地面に寝転がって駄々こねたらさ。

「…しょうがないわね、宿舎の部屋貸してあげる」ってロビンさん言ってくれたんですね。いやぁ、駄々をこねるって本当にいいものですねぇ。

「ところで宿舎って？」

「私の働いてる会社の宿舎よ」

えーっと…確か…、アンリミテッドブレイドワークスだっけ？創作してる会社だったかな？なにやら夕日に溶ける赤い英霊を幻視しそうになった。

そうになると社長は料理が大好きなコピー人間になってしまっただけではないか。違う違う。クロコダイルはそんな奴じゃなかったはず。

もっとう海馬的なコーポレーションな社長だったはず。というか社宅とかあんのか。

なんて記憶の齟齬を確認してたら眠くなるミィ。ミィはエキセントリックでエキサイティングネ。あかんねむい。

「んじゃしゅくしゃまでつれてってー…ねむいー…」

「貴方、そうしてると本当に子供みたいね…こっちよ」

いやほんとにね、ねむねむ眠ちゃんなのよ。ハツサクは関係ないぜ？最近早寝早起きが癖になってしまって、ますます年寄り臭くなっってしまったんだ。まあ年寄りなんだけどね。そしてまあロビンさんに手を引かれて歩いていくんですけど、マジ親子みたいですね。髪の色も肌の色も全然違うけどね。思うだけならただなのさ。

そんなこんなで宿舎に到着したわけですはい。立派な建物ですねー。これほんとに悪の秘密結社の宿舎かよ。

そうそう、途中で会った他の社員さんにペロペロキャンディーを買いました。可愛いつて罪だわぁ。

それはヴェルース・オリジナルで、わたしは…ねむい…。いかな、何か眠くなると幼児退行したくなってしまうー。しまっーかわいいよしまっー。だがやんだ、てめえは駄目だ。

「この部屋を使うと良いわ、私の部屋だけど」

「!？」

これはどういう意味だろう。マジで俺の想像通り、俺を晩御飯にする気なのだろうか？なんてことだ…ここは上月家だったのか…。カニバリズムとか由良様ですか？流行らないよ。やめとこう？ないや由良様大好きだけどね。俺の数居る嫁の内の一人だ。NO.1はもちろん大鳥大尉。しかし俺はいつ秋五になったのだろう。等と彼女の言葉を聞いた俺は混乱の極みに達していた。

「そのベッド使つと良いわ、私は隣の部屋に居るから。じゃあね、おやすみなさい」

「はひ」

と、俺が火星に居るウンディーネのような返事をした後、ロビンさんは部屋から出て行ったわけだが。これは俺が寝た後、あらあらうふふとか言いながら解体包丁でも持ってきてやられちまうフラグなのか？想像したらちよつと震えてきやがりました。

だが、怖くて寝れねー…なんて事は無く、敵意は無かったし大丈夫だろうと思い、脳内にアリアなBGMが流れ眠りにつく。俺はひっそりと裏世界で幕を閉じた。完。

いや、いきてるよお？まあ翌日無事に起きました。無事に朝を迎えられた事を心の中のヴァン先生に感謝しつつ俺は窓から朝陽を見る。うん、見事に曇っていらつしやる。ここって雨降らねえんじゃねえの？記憶の齟齬が俺を苛む。なんだかげんによりする気分になりつつあった俺に電流が走る。

「あら？もう起きてたの」

「…」

俺は怖くて言葉が出なくなった。窓から振り返るとそこにはドアを開いて包丁を持っているニコロビンソン。

「リンゴ貰ったから一緒に食べようかと思って。リンゴ嫌いだった

「？」

「ワイと一緒にならへんk…いや、ちゃうねん！ワイとリンゴ一緒に食べような！な！」

テンパって俺は自分で自分が何を言ってるのかわからなくなっていた。いやぁマジで怖かったです。寿命半年くらい縮んだに違いな

い。変な事口走ったけど、ロビンさん気にしてなくて良かった。そして仲良くリンゴを食べたのです。にぱー。

そしていよいよ会社に行ってクロコボーイの所へ行く道中の今に至る。

「うー！うー！」

「おいしそうに舐めるわね、キャンディ」

「うー」

俺はなんだかやるせなくなつて、まりあちゃんごつこをしながらペロペロとキャンディを舐めつつロビンさんについて行く。ニコニコと俺を見ながら歩くロビンさん。

それはまるで仲のいい右代宮親子の様に。そして俺はうーうー言いながら会社に入る。社員さん達は皆俺とロビンさんを見て微笑むだけでした。

誰もうーうー言うのやめなさい！って突っ込んでくれませんでした。見てないで仕事しろ社畜どもめ。

そしてやってまいりました社長室。普通に入ると思つたやろ？大間違ひじゃ！！

俺が普通に入室すると世の中が滅亡するらしいから、真剣な面持ちで事に当たる。悲しいけどこれ、戦争なのよね。

ドアをちよつとだけ開いてその隙間から俺は紙ヒコーキを飛ばす。

ファーストコンタクトは大事だからな。

「？」

ちょうど紙ヒコーキはクロコボーイの机の上に落ちた。ロビンさんはニコニコしながら俺を見つめるだけ。えへへ。

「ゴホッゴホッ……」

なにやらコーヒーを飲みながらむせて咳き込んでいるクロコボーイ、咳き込むような内容でもないとおもっただけだな。ただ「ニコ・ロピンは普段下着を着けていない。そしてパイパンである」って書いた紙ヒコーキを飛ばしたただけだ。心の中のヴァン先生が爆笑していた。先生、俺やりましたよ。世界を救いました。

「…誰だ？」

「撲殺天使のミコトちゃんです！ぴるぴ！ぴるぴ！いえーい！」

そう言いながら俺は社内の道中で拾ったエスカリルグっぽいモノを持って、社長室のドアをぶち破って入室する。特に理由はない。ただそこにエスカリルグっぽいモノがあったのならば、ソレを持ってやるしかない、俺はある刹那が黄昏の女神を崇拝するように、撲殺天使を妄信しているからだ。

そうか、俺の女神はドロちゃんだったのか、長年悩み続けた疑問が一つわかった。

「帰れ！」

おいおい第一声が帰れとかつれない事言うなよクロコボーイ。遊戯ボーイ。遊王に出ててもこいつなら違和感無いよね。

なにやら頭に手を当てて嘆いてるような仕草を取るワニ。そしてなにやら俺の顔を凝視しはじめる。俺ノンケだぜ？

「てめえ…白髪…」

「はい！白い綺麗な髪がチャームポイント！みんなのアイドルミコトちゃんだよっ！けど俺ノンケだからさ？俺のASS（明日）を狙っっちゃ駄目なんだぜ？」

「はあ…」

なにやらため息をついていらっしやるクロコダイルこと遊戯ボーイ。ちよい悪系のイケメンだねー、遊んでそう。なんでそんなに疲れるような顔をして俺を見ているのだろう。

昨日はお楽しみでしたか？そりや疲れてるよな、うん。ほんと遊戯ボーイじゃん。社長なのに遊戯ボーイとはこれはいかに。

「ニコ・ロビン…一体何を企んでやがる…」

「あら？私はお母さん達のためにおつかいに来た、可愛い女の子を連れてきただけよ？」

あらら？今度は俺の後ろで、俺の頭をずっと撫でてるロビンさんにクロコダイルの視点が変わる。なんでそんな睨んでるんだろう？もしかして浮気しやがった！とも思っているのだろうか。

自分が遊戯ボーイの癖に人の行動をどうこう文句を言うなんて、駄

目な人間の典型的な例だな。遊戯ボーイ死滅しろ。

side クロコダイル

俺は朝のモーニングコーヒを嗜んでいた。これを欠かさないのが健康の秘訣だ。けして、葉巻に合うからじゃない。

そんな風に俺は朝のひと時を楽しんでいたんだ。そうして過ごして居ると、どこからともなく紙ヒコーキが俺のデスクに落ちてきた。

不思議に思い、その紙ヒコーキを見る。丁寧に折られていて別段怪しい点はない。

開けば暗号でも書いてあるのだろうか？社員にそんな事を指示した覚えは無いんだが…。

気になり、俺は丁寧に折られている紙ヒコーキをもったいない気持ちを抑えながら開いていくと己の目を疑った。

「ゴホッゴホッ…」

思わず咳き込んだ自分は悪くない。何も書いてないならそれでよし、社員が暗号を使って何かを伝えようとしていたらソレを確認しようとしただけだ。

それがニコ・ロビンの下g、こんなアホな事を書く奴は社員に居ないはず。居ないと思いたい…。

誰が投げた紙ヒコーキなのか気になった。政府の犬どもならこんな回りくどいようないたずらなんてしないはず。

「…誰だ？」

まだ居るかはわからないが、まだ居るような気がして、ヒコーキを投げた犯人を呼んでみる。

するとその瞬間俺の部屋のドアが粉々に砕け散った。

「撲殺天使のミコトちゃんです！ぴるぴる！ぴるぴる！いえーい！」

「帰れ！」

思わず反射的に返事をしてしまった。呼んで出たものは、小さい女のカキだった。ただしキ印臭い。

ただ、どこかでこのカキを見た覚えがある。どこだったか…そうだ、思い出したぞ！この糞カキ…

「てめえ…白髪…」

「はい！白い綺麗な髪がチャームポイント！みんなのアイドルミコトちゃんだよっ！けど俺ノンケだからさ？俺のASS（明日）を狙っっちゃ駄目なんだぜ？」

「はあ…」

このキティ具合、間違いなく白髪のミコトだ。今日は厄日か？なんでもこんな歩くプルトンみたいな奴が俺の部屋に居る？なにやらこれまでの疲れが、どっと押し寄せるかのような感覚に囚われた。相変わらず意味不明な言葉を吐きやがる奴。

そして俺は、そのキチ印の後ろに自分が同盟関係みたいなものを結んだ奴が居る事に気付いた。

「ニコ・ロビン…一体何を企んでやがる…」

「あら？私はお母さん達のためにおつかいに来た、可愛い女の子を連れてきただけよ？」

意味がわからない。お母さん達のためにおつかいに来た、可愛い女の子を連れてきたただけだあ？

こいつがそんな可愛い玉かよ。今この世界で一番危険視されてる奴だぞ…。政府の犬が嗅ぎ付けてここに来たらどうするんだ…。

s i d e o u t

なにやら困惑げに俺とロビンさんを見つめるクロコダイル。
そして俺の横で、俺の頭をニコニコと撫で続けるロビンさん。
わけがわからないよ。

「わけがわからないよ」

「てめえが一番わけがわからねえよ!!」

「あらあらっ…っふふ」

ほんと、どうしてこうなった？俺はただ、ペロペロキャンディーを舐めながら。片手にエスカリ ルグを持って可愛く参上したただけだというのに。

最近の若いモンは、キレやすくていかな。もしかして…。

「クロコ、もしかして飴が欲しくてイライラしてるの？…要る？」

「てめえの舐めた後なんていらねえよ！！！」

キャンディが欲しくてイライラしてるのかなーって思ったんだけど、どうやら俺の舐めかけのキャンディはお気に召さなかったらしい。後でロビンさんか社員の人に新しいのを買ってもらうかわけてもらうといいよ。

なんというか、俺のおつかいは果たしてどうなってしまっただろうか。
続く。

クロ子だ！要る？（後書き）

人物プロフィール

ミコト メガロマニアックスが使えるそうな仙人 ただし痴呆症。認
知症の気あり。 崑崙山から脱走中

ロビン 火星から来たウンディーネ

クロコダイル 社長のくせに遊戯ボーイ

デュエルしようぜ？（前書き）

殺伐とした世の中で、なにげなくこの駄文シリーズみて、クスツツとくるようなモノがあればいいねって思う。

デュエルしようぜ？

壊れたモアイ像を、抱きしめ叫んだ！この想い、海軍本部の部屋に居るセンゴクに届け！！

どうも夕日の幼女こと、都市伝説のミコトちゃんです。

王立アラバスタ学園に通うミコトちゃんは、どこにでもいるような可愛いお年寄りだ。

日々をおもしろおかしく生きていて、周りに迷惑かけまくりでも気にしない、そんな日常のサイクリングロード。

そのサイクリングロードの中にリアル鬼ごっこというものがあつた。

いつもよそよそしい態度で人に張り手を打ってくる大仏、センゴク。臨時でこの学園に居る教師、ニコ・ロビン。

あやしい薬を作ろうとしているバロックワークス部の部長、サー・クロコダイル。

この話はその3人が遭遇する、都市伝説に関する物語である。そして、もちろん嘘に決まっている。

まあなんだ、夕姫ちゃんと一緒にあの夕日の向こう側へ行きたいなあ。永遠はあるよ？

まあ脳内でむふむふするのはコレくらいにして、現実にも目を向け…たくないなあ…。

もう白い鯨になって、白痴の蛇とグルメレースをしたい気分だ。

飴ちゃんから発展したとは思えないこの惨状。改めて漫画の世界なんだなあとしみじみと思いました。うんうん。

「てめえ…何一人で事が終わったかのように急に大人しくなってるんだ」

「アハハハハッ」

ずぶ濡れのクロコダイルさんと馬鹿笑いしているロビンさん。いやもうカオスだわ、ドクターカオス並にな。

ここに至るまでの顛末は、そう、こんな感じだった。

俺が親切で飴をあげようとしたら、クロコは飴要らないという。何を照れているのだろうか？

俺は断られてからクエスチョンマークで脳内がいつぱいになった。例えるならそう、にゃんこ先生がたかしくんを1話で食べてしまっ

て話が続かなくなる夢を見た時くらいだ。

あの時の俺は、「にゃんこ先生…除霊がしたいです…」と泣いてしまうくらいに起きた直後混乱してたぜ。

しかし男同士で何を照れる事があるんだろうね？食べ回しとかするでしょ、俺はそういうの嫌いだからしないけど。

「何照れてるん？」

「そういう問題じゃねーだろ…で、お使いって何が欲しいんだ、てめえはよ？」

俺が欲しいもの？デスザウラーに決まってるだろ。デスザウラーに乗って俺は登り始める、この長い長い坂道を…。人生ですわわかります。

メインヒロインはアンナ・ターレス、主人公はゼネバス・ムローア。首都ガイガロスで仕事が上手くいかずいじけている父のプロイツェンと織り成す家族モノのコメディ。

アレは泣けたなあ…。ん？何か違うな。ああ、おつかいだっただか、俺そつえば何が目的でこんな所までおつかいに来たんでしたっけ。

「俺何を求めてここに居るん？」

「そりゃ俺がききてえよ!!」

首を傾げて可愛らしく俺は聞いたのに怒鳴る社長。そんな怒らなくともいいじゃない。歳なんだよこっちはよう。お年寄りには優しくしようぜ？俺だったらしないがな。

横断歩道で困っている老人が居たら、ギターを片手に一緒に無劇を歌うくらいしかしてやらん。台詞無用の（ry

…ああ、そうだ思い出した。

「ゾンビパウダー無い？疲れが取れて飛べるやつ」

「…」

「ん？なんで黙るのよ。クロコダイル社長ともあろうお方が、顧客のニーズに応えないんですかー？拗ねて帰っちゃいますよー？」

「…付いて来い」

何でか知らんがゾンビパウダーと聞いた時クロコダイルはすんげえ怪訝な顔しやがったんだよな。まるで、お前そんなの薬局に普通に売ってるだろみたいなさ。

俺は世間知らずだったのか…なんて思いつつ俺は、ホイホイちょい悪男について行ってしまうのであった。

そしてやってきたのは広いフロア。何か色々薬品やらなんやらがいつぱいある。研究フロアなんかね。

何かアイパッチ博士でも出てきそうな雰囲気である。大勢でお父さんを殺しにくるよゝなんて声が聞こえてきても俺は何の違和感も持たないだろう。

そうだな…帰ったら馬鹿つつら！なモリアさんとドフラミンゴ母さんと一緒に寿司いくか！。

なんてアホな事を考えてる間にロビンさんは何か用事があるって言うてどっか行った。で、なにやらそこそこ机の上の箱の中を探るクロコダイル。まるで不審者。

「てめえが言ってる粉は」コレ？か？白髪」

「いや、見てもわからんっちゅーの。俺は栗田 澄じゃないんだぞ」

これが目力です！なんて俺は言わないし透視なんて出来るわけがないしな。いや、頑張れば霊視くらいは出来るようになるかもしれない。俺一回死んでるし？

…… ああ、死んで目覚めるのはアレだ、勅旨の魔眼だ。朝廷からの命令だと言わんばかりに貧民、平民、武家、公家達を分け隔てなく自由にしごきまわすことが出来る眼。ただし、幼女の帝に限る。

「…ダンスパウダーの事だろ？てめえが言ってるのは」

「ダンシングパウダー？WHAT？その粉で空を飛べるのかー。晴れたら良いね。…ちゅっちゅはしないよ？」

何かしかめっ面で俺が求めるモノとは別の粉を出して、俺にまるでちゅっちゅしに来るかのように顔を近づけて、粉の入った袋をひらひらさせるクロコダイル。ちゅっちゅは男割りします。

「…何を勘違いしてるのかわからねえが、コレにそんな効力はねえよ」

「!？」

捜し求めていたものが、自分が思っていたモノとは違っていて俺はものすごいショックを受けた。

そう、FF10で戦闘中にヘイストをかけて、ヘイストの効果が切れる前に戦闘を終えてワツカの動きを見た時と同じくらいのショックだ。

そしてその時の事を覚えたまま続編をちらつと見て、ものすごい何かに負けた気持ちになった時の事を俺は忘れはしない。

俺は信用しないぞ！絶対に許さない。絶対にだ！

「ワツカ腰振りすぎなんだよ…」

「なんの話をしてる。標準語でしゃべりやがれ」

「わんはむる標準語であびとーん!？」

ショックが抜けきれないせいか、俺は宮城がぎゅんっ!の主人公ただし君の台詞を喋っていた。

そして何か悩んでるような素振りをしたクロコダイル。
なんだろう？まるで風がよくないものを運んできていると河川敷で
呟いて後ろに居た女子高生に笑われたかのが気に食わなくて、トウ
スクールに里帰りでもしたくなったような表情で俺に向かって語りか
けてきた。

「何かきなくせえな…お前政府の犬か？…政府と取引でもしたか。
…まあ答えは聞いちゃいないが…なっ！」

そして何を勘違いしてるのか知らないが、俺に向かって攻撃してく
るクロコダイル。とっさにコサツクダンスをして避ける俺。ランス
も惚れ惚れするコサツクだったと思う。

まさか…これは…デュエルしろって事か！さすがクロコボーイ、遊
戯ボーイ。ならば仕方が無い、デュエルディスクもカードも無いが
リアルデュエルをご所望か！いいぜ！

心の中のイエガー大柴さんも俺にGOサインを出す。

「ミーのターンねっ！」

「ちっ…砂漠の宝刀！」
デザート・スパーダ

OH！彼が砂で刀をメイキングしました。実にブラボー！ミーは軽くエクセレントな攻撃を同じようなセンセーションで返す。

「エクセレント！研ぎ澄まされた野生の感覚、実にエクセレント！
！」

「余裕ぶっこきやがって…砂漠の金剛宝刀！」
デザート・ラ スパーダ

そして何やら4つのワンダフルな武器がミーを襲う、彼のグッドアンサーな攻撃をミーは軽々とアヴォイドする。

…ここまで俺はノリノリでやっていたんだが、イエガーさんごっこもすぐに飽きてしまう。ごめんね、イエガーさん。

っていうかクロコダイルさんよ、自分の研究室じゃねえの？試験管やら、ビーカー割れたり、怪しい液体とか粉が舞い散ってますよ？それは舞い散るのよ。舞人、俺これ以上頑張れそうにねえわ…後任せて良いかな…。心の中に居る舞人に話しかけるがゲームに忙しいらしく無視される。…ぐすん。

「そもそもさ、なんで俺が犬なん？俺人間やで？」

「はっ、信じられるか！」

そう言いつつ攻撃を繰り返すクロコダイル。俺犬なの？わんわんお！俺はイヌイヌの実の能力者だったのか…まあそんな人生も悪く無いな。

何故クロコダイルに犬認定試験合格通知を言い渡されるのか？あいつはいつ試験官になったのか？何故、人と人は分かり合えないのだろうか？

まるでいつかはこうなるディスティニーとでもいうかのように。心
の中のイエガー大柴さんも嘆いています。：こうなれば強引だが致
し方あるまい。

[illegible]

「ガッ！」

ぬるぽ！俺は素手でとあるていずのヤンデレヒロインの無限空中コンボをクロコボーイに叩き込む。

まだまだ俺のターンは続くぜ!!これで俺の愛が伝わったと思う。

いや愛なんてないけどね。そんなものをワニは食べない。
だがこの俺の空中コンボがいけなかった。

何かの機械が壊れる音がした。結構でかい音である。

そうそれはまるで時計仕掛けの摩天楼が某將軍様の命令で打ち出されたうさだヒカルの耳によって崩れ落ち、頭脳は子供、身体は大人のぱすてるSINさんが幼稚園で雄たけびをあげたかのごとく。

アクセス　我がシン　天井のスプリンクラーが発動！ターンエンド。

「ぶっ…何やってるの？貴方達」

そしていつのまにやら俺振られて…次の日またあの娘と幻想卿でお花見する準備でもして来たかのごとく、用事が済んだらしいニコ・ロビンさんがやってきて、水にずぶぬれな俺達を笑っていらつしやる。

軟式グロ―　先生も俺は大変リスpektしている。彼もまたキティ界の四天王として一時期君臨していたほどの男だからな。あの妖怪娘達が跋扈する忘れ去られた存在が行き着くといわれる場所でも元気でやってるだろうさ…。

なにやらクロコボーイはげんにやりしてますね。まあ俺もげんにや

りですわ、なんですかこれ？おらイライラしてきたぞ！

「ん？ミコトちゃんなあに？…ちよっ…」

なんかむかついたのでスプリンクラーが作動してる場所に、ロビンさんを引っ張ってくるくる回してやった。

血沸き肉踊るアンコールワット沸かす、タンスタンスレディーゴー？ファイナルアンサーチェック！！

水場で濡れながら踊るとか素敵やん？

「れつつだんすまかぶるー！」

「ちょ…やめなさ…く、アハハハハハハッ」

ほら？涼しくなっただろう？俺は優しいからよ、一人だけ仲間はずれとかしないんだわ。とか思いつつ俺は驚愕の事実を知った。

さつき色々舞い散った時にアレも舞い散っていた。するとあのパウダーの効果というのは思わずダンシングせずには居られなくなるだけという事になる。

なんて事だ…確かに持ち帰ればモリアさんやドフラミンゴ母さんは楽しく踊ってくれるかもしれない。だが、仕事に疲れている二人にあげるようなモノではない。

「てめえ…何一人で事が終わったかのように急に大人しくなってるんだ」

「アハハハハハッ」

そして今のこのドクターカオスもマリアを引き連れて参戦してきそうなるカオス具合になってしまったのである。
誰か令子さん呼んできて！！やっぱだめだ金がいくらあっても足りなくなる。俺結構節約家なんだよね。

「帰っていい？飽きた」

「もう帰れ！！」

「アハハハハハハッ」

なんでか怒り心頭！このまま俺はアクシズに突入！でもボールだからサッカーの試合のように蹴飛ばされるのがディステイニーガンムさ。ってな具合で怒ってるクロコダイル。

そして何か悪いものでも食べたかのように馬鹿笑いしているロビンさん。

なんだか俺も疲れちゃって、「卿らの気持ち確かに受け取った」とか意味不明な言動を吐いてそそくさと逃げるのさ。
人間ってむづかしいね！おわれ。

デュエルしようぜ？（後書き）

人物紹介

ミコト 見た目は幼女、頭脳は痴呆老人の多重人格少年探偵。
味は14歳病。 趣

ロビン 彼女に笑顔が戻りました。

クロコダイル 痴呆老人に付き合わされた可哀想な人。

イエガー大柴 世界のミスターとためをはる和製英語の使い手。

デュエルの裏側（前書き）

クロコダイル視点だとうなんだと言っ補足話。

デュエルの裏側

side クロコダイル

「何照れてるん？」

「そういう問題じゃねーだろ…で、お使いつて何が欲しいんだ、てめえはよ？」

こいつは何を求めてここまで来たんだ？俺の疑問は膨らむばかり。奴はなにやら考え込む素振りを見せる。悲しげな表情に見えなくも無い。何を考えてやがんだ？

「俺何を求めてここに居るん？」

「そりゃ俺がききてえよ！！」

こいつから少しはまともな返事が返ってくると思っていた俺が馬鹿だったらしい。

反射的にまた俺は返事を返してしまう。こいつと居ると調子が狂う。なにやら怒られた子供のように首を傾げているが、腹の中で何を考

えてるかわかったものじゃない。

「ゾンビパウダー無い？疲れが取れて飛べるやつ」

ゾンビパウダー…？まさかダンスパウダーの事を言ってるのか？
こいつ…政府から要請を受けて俺の事を探りに来たのか？

いや、それはおかしい。まだ世にすら出回っていない開発中のモノ
だぞ。

こいつが知っていると言うのはおかしい。

「ん？なんで黙るのよ。クロコダイル社長ともあるうお方が、顧客
のニーズに応えないんですかー？拗ねて帰っちゃいますよー？」

「…付いて来い」

わからねえ。しかしこのガキみたいな仕草はどうにかならないのか。
だがこいつの機嫌を損ねると何をしてくすかわからない。とりあえ
ず開発中のモノを見せて反応をみるか。

そう思い、俺は白髪を研究室まで連れて行く。

「てめえが言ってる粉は」コレ？か？白髪」

「いや、見てもわからんっちゅーの。俺は栗田 澄じゃないんだぞ」

箱の中にあるサンプルを奴に見せる。相変わらず奴は何を言ってるのかわからない。
だから奴に揺さぶりをかける。カマをかけて尻尾を出せばそれでいい。

「…ダンスパウダーの事だろ？てめえが言ってるのは」

「ダンシングパウダー？WHAT？その粉で空を飛べるのかー。晴れたら良いね。…ちゅっちゅはしないよ？」

相変わらずふざけた反応をしゃがるが、空を飛ぶ？麻薬か何かだと思ってるのか？こいつは。

「…何を勘違いしてるのかわからねえが、コレにそんな効力はねえよ」

「！？」

なにやら、期待していたモノとは違ったようだ。表情の薄い奴には珍しく、目に見えるように落胆してやがる。

「ワツカ腰振りすぎなんだよ…」

「なんの話をしてる。標準語でしゃべりやがれ」

「わんはむる標準語であびとーん！？」

こいつの思考回路はどうなってるのだろう。こいつは人の話をほとんど聞いてやがらねえな。間違いない。とんだくわせものだ。俺がわざわざサンプルなぞ見せる必要なんてなかったな。

こいつが政府からのまわしものという線は薄い、だが俺は他人なんざ信用しない口なんぞでね。
白髪、死んでもらおうか。

「何かきなくせえな…お前政府の犬か？…政府と取引でもしたか。
…まあ答えは聞いちゃいないが…なっ！」

奴に攻撃をしかけるが妙な姿勢で俺の攻撃をかわしやがる。

「ミーのターンねっ！」

「ちっ…砂漠の宝刀！」
デザート・スパード

奴に連打を叩き込もうとするが、すべて避けられる。それどころか俺の真似？でもしてるかの如く刀で応戦しやがる。

まるで歯が立たない。なんだコイツは？伝説級の人間はこんなに出鱈目なのか。噂どおりって事かよ！

「エクセレント！研ぎ澄まされた野生の感覚、実にエクセレント！

奴が何やら避けながら考え込む素振りを見せた後、急に胸糞悪い微笑みを俺に向けて、これまでとは訳が違う速度で俺を連打していく。俺の身体は天井に打ち付けられる。何やら機械が壊れた音がしたと思ったときは遅かった。スプリンクラーを壊しやがった。ちくしょう…。ここまでか…。

「ぶつ…何やってるの？貴方達」

なにやら笑っているニコ・ロビン。てめえの連れてきた奴のせいで俺はボロボロだぞ。睨むが奴はどこ吹く風。

「ん？ニコトちゃんなあに？…ちよっ…」

「れっつだんすまかぶるー！」

「ちょ…やめなさ…ク、アハハハハハッ」

何やら、白髪がニコ・ロビンをスプリンクラーが作動している場所までわざわざ連れて行きダンスを踊り始めた。本当に意味がわからない。これは関わってはいけないモノだ。気付くのは遅かったが、今からでも遅くないだろう。

「帰っていい？飽きた」

「もう帰れ！！」

「アハハハハハッ」

「まったくこの、糞ガキにしか見えない奴に俺は完膚なきまでに負けたのか。」

「ちよっと自信をなくしてしまう。それでも俺は七武海だぞ？ちくしよう。むかつきが止まらない。」

「はやく俺の目の前から消えろ！」

「奴は何やら疲れた顔をした後、何故か偉そうに「卿らの気持ち確かに受け取った」等と言いながらどこかに行った。理解できない。」

老い、あれはオクレ姉さん！？

纏わり着く言葉意識、全てが今の私には理解できない。アン（ry
前世が悟っちゃう系妖怪のミコトちゃんだよつ。

さあ！今日もハイパーミコトちゃんタイムはじまるよー！

俺もそろそろ地獄に戻らないといけないなあと思ったりしたとかし
ないとか。鬼っ娘とか可愛いよね。モリアさんが大体そんな感じ、
ツノあるし。ああ、悪魔っ娘かアレは。

悪魔の実の能力者も合わせると、ワンピースの世界って悪魔だらけ
だったんだね。

そのうちこの世界にも、悪路王もとい装甲悪鬼クス兄さんが出てき
ても不思議じゃないなあと思う。鬼に逢っては鬼を斬り、仏に逢っ
ては仏を斬る系。

仏のセンゴクが危ない！早く逃げて！…俺は善悪関係なく人をばっ
さばっさ切り刻むヒカル様をとでもリスペクトしている。俺もあんな
幼女になりたいなと日々精進している所だ。

…まあ全部脳内妄想なんだけどね。

人間って難しいよね。相手が何を考えてるかわかれば、相互理解
というものが簡単にできて、皆ハッピーで仲良くできると思うんだ
けどなあ。

でもまあわかりすぎるっていうのもそれはそれで考え物かもしれない
けどね。

ガラスで出来たハートの持ち主の俺は、地底に住み着くあの娘みたい
になっちゃうかもしれない。

いやさ、クロコダイルとニコ・ロビンが何を考えてるのか本当にわからなくて、アラバスタに滞在してたときは常時テンパってましたね。

普段はそうでも無いんですよ？極度の緊張というものは人を変えてしまうものなのですよ。にぱー。

話は変わるが、まあを連呼すると某ジャパンF1レーサーを思い出すよね。自分がF1を見てたのはあの頃までだ。給油無しなんてそれはF1ではない。

ワールドな本のV9エンジン音が会場に鳴り響いていた時期が最盛期だったと俺は思う。あの音を聞く度に俺の胸は熱くなったものだ。

五作がバトンの尻を狙っているかの如く、後ろから虎視眈々とカーを走らせていたレースの時は俺の　　が熱くなりそうになったが。ああいう胸の高鳴るような出来事に最近出会えていないと思う。まあ軟禁状態から抜け出してまだあまり月日は経ってないんだけどね。世知辛いなあ。

ん？あの後どうなったんだこのやろうつて？特に何も面白い事は無いような気がする。

水浸しのクロコダイルとロビンさんとあの後別れて、着替えたいなあって思っで、社員の人に着替える場所ねえの？って聞いて社員用のロッカーに案内されたっけ。

そしてロッカールームに入ったら俺は変な奴に出会ったんだ。確かミスターボ カレーっていうオカマだったと思う。

ハッキングトウ インドの踊れるインディアンの如くダンスしながら。カレー ンマンみたいに口からカレー吐き出す、印印の実の能力者だっけか。

この世界線は恐ろしい世界線だったんだな…。おそらくダイバー エンスメーターが明日の天気をお知らせするくらい。晴れたら良いね。

そんで、ミスターボ カレーが何か言いたげに俺のことをじろじろと見やがるからさ、ロッカールームでやる事といえば一つだと思い、俺は着替えた後、ついロッカーを閉めた後、振り向きざまに彼に言うってしまったんだ。

「F c k Y o u」

「なんなのようっ！」

それは、起きた直後にB E Aに出会って、感動の再開を果たしてしまい「あいたかったよかすみ！」と泣いて錯乱しながらB E Aと抱き合う白銀君の如く。

すね毛ぼーぼーのミスターボ カレーは、着替えも途中だったろうに何か泣きながらロッカールーム走り去って行ったっけ。

社員の悲鳴が聞こえたのは俺のせいでは無いと思う。でもちよつと悪い事したかなって思う…わけ無いじゃない！俺だもの。

その後、俺の脳内に何故か戦士よ、 ち上がれ！のB G Mが流れ出したっけ。んで次はどこに特攻しに行こうかなって会社から出ようとするんだけどさ。

会社の出入り口に待っていたかのように、何故か俺に熱い眼差しを送りながら敬礼している丸坊主のいかついニーチャンと、笑顔で微笑んでいたロビンさん。

これはそうか、俺の門出を祝ってくれているんだなと思い、「靖で会おう」ってちゃんと挨拶して別れを済ませたっけ。ロビンさんは「またいつでもいらっしやい」とか別れ際に言ってたなあ。

s i d e ロビン

本当に不思議な人だった。いや、不思議な子？やる事なす事すべてがはやめちゃ。まるで我侭な子供にしか見えなかった。

あの子が来てからというもの、私に笑顔が絶えなかった。だって本当におかしいんですもの。

自分に子供ができたらこんな感じなのかなって、育児をしている気分になっていた。

まさかクロコダイルと水遊びをするとは思っていなかったけど。あの子に付き合わされ水浸しになったやるせない表情で居るクロコダイル。本当に笑ったわ。

出来るなら、もっと早くあの子に会いたかった。そう思わずにはいられなかった。

「行っちゃったわね…」

「そうだな…」

そして何故かあの子に向かって敬礼をしていたミスター1。まるで敬愛する者に向けるかのような視線をあの子に向けて。彼がここに居るのは珍しい。というより何故敬礼？

「貴方がここに居るのも珍しいけど…何故ミコトちゃんに向かって敬礼してたの？」

「昔、西の海でウエストブルーあの人ウエストブルーに世話になった事がある…それだけだ」

へえ、面識があつたのね。見てるだけじゃなくて混ざって一緒に遊んであげれば良いのに、そうすればあの子もきつと喜んだだろうに彼は終始見ているだけだった。それは母と子が水遊びをしているところを微笑ましそうに見ている父親のように、彼は私とミコトちゃんが踊っていたところを遠くから見ている。

「見てるだけじゃなくミコトちゃんと一緒に遊んであげたらいいのに」

「ふっ…、今の俺では会っても誰だか分からないだろう。それに何やら昔と様子が違っていた」

「そうなの？」

「昔会った時は、あそこまで子供のような感じでは無かった。何かあったのだろう…」

私の問いかけに微笑みながら、何やら感慨深げに物思いにふけだすミスター1。

彼が感情をあらわにするのも珍しいが、私の問いかけに答えるのも物凄く珍しい。明日は天中殺ね…。

「お互い生きていれば、また会えるだろうさ…」

「そうね…」

そう彼と言いつつ。ミコトちゃんが去っていった方向を二人で見つめ続けていた。

あとで聞いた話だけど、私が去った後もミスター1は一人で敬礼し続けていたらしい。風邪ひくわよ？

いやー。アラバスタ王国に来て、クロコボーイと遊んで、ロビンさんに恐怖したりの日々だったが。中々に楽しかった。また是非とも来た…いや、誘拐されるかもしれんな。

今度来るときは、他の人にも付いて来てもらおう。

そして俺はこいつと旅に出る！ピ チュウ！そっいえば初めて紹介するかなこれ。誰に紹介してるのかわからないが、俺の乗る船、ピチュウだ。

黄色いぼでえのねずみーな可愛い奴、思えばこいつとは長い付き合いだ。もうほとんど思い出せないが、多分生まれ故郷からの長い付き合い。

何で出来ているかは不明だ。だがすげえ頑丈。俺が本気で「光！いつになったら10万ボルトを覚えるんだ！」と殴ってもびくともしなかった。

思えばこいつのおかげで航海に慣れてない頃、生き残れたようなモノだろうなあ。初めて乗った時は「波乗りピ チュウゲットだぜ」とか言ってたっけ？

その内返事してくれるかなって乗る度に話しかけるが、こいつはツンデレなのか中々返事を返さない。愛いやつめ！

そして、俺はこの国から旅立つ。マサラな街から、まるで大東京界チャンピオンになるために。

「行くぞ！ピ チュウ！今日も元気にお外をのた打ち回ろうぜ！！」

そう俺が雄たけびをあげると、「まってくださいよーアユ ちゃーん」というピ チュウの声が聞こえたような気がした。

幻聴か？今度は幻覚も見始めそうだな俺。だがな、ピ チュウ。俺はミコトだ、間違えんなよクス。

そして、そんなこんなで何も考えずに俺は海に出た。それが失敗でした。

海に出てまあ何日経ったか知らんが、最近ちゃんと食べてない。アラバスタで食料買うの忘れてたね！ミコトちゃんシヨック。

どっかに海賊船落ちてないかなあゝなんて思いながらぼーっと海を眺めている俺。

まるでアドミラル東郷に負けたロシア艦隊の艦長が、突然目の前に出てきた鏡のようなモノに吸い込まれて、ピンク色のツンデレくぎゅうに出会うかのような心境だった。

俺、ニーソが似合うツンデレな少女と漫才して世界征服したかった……。等とげんによりした気分が更にどん底までいったようなテンションまで落ち込んでいると、目の前に海上レストラン？みたいなモ

ノが見えてきた。

「スカイ　ークのチェーン店はここまで進出していたのか…」

なんてことだ、大手チェーン店がとうとうこの世界にまで来たみたいだ。近い未来、　ーソンやセブン　レブンがこの世界に進出してくる日もそう遠くないだろう。

等と、大手チェーン店に押しつぶされていく小店舗の老人達の行く末を案じた。

世知辛い世の中になったなあと思っている所になにやら大手チェーン店に入ろうとした初老の女性が俺に向かって走ってきた。何か見た事あるような無いような…。

「あんた…ミコトかい？」

「!？」

なにをそんなに慌てて俺に向かってきているんだろう？そんなに俺は可愛いかな。てるぜ…。等と考えて様子を見守っていると、俺の前に来て俺に声をかける初老の女性。

俺は驚愕した。近くで顔と声を聞いて確信した。こいつは…いやこの人は…。間違いない…。

「オ…オクレ姉さん!？」

「最初の一文字しか合っていないだろ…あたしゃおつるだ!!」

この突っ込み方、優しい瞳。ああ…間違いない。おつるさんだ。海軍に居た頃ずいぶん世話になった。

こんなに歳とつちやって…昔は海賊だヒヤッハー!と俺と一緒に戦場に居れば、某TAS眼が主人公の物語に出てくる草壁美 先輩にお薬注射して飛んでるような元気な人だったのに。

この人でも時代の波には勝てないのな、まあ俺が若いままなのがおかしいだけなんだが。

「オツルサン。オヒサシブリデス」

「あんたはちつとも変わってないねえ…死んだかと思ってたんだよ?」

そう言いながら、昔と同じ、優しい瞳で俺を見つつ俺を抱きしめるおつるさん。懐かしい。よくたかいたかいとかしてもらっていた。何かよくわからないが、最初は俺のASSを狙ってたみたいけど、俺があまりにも嫌がるからあきらめたんだっけ?それから何か俺を弟扱いしてた怖い人。かなり苦手。

「ナンデキヨウセイフクジヤナイン？オレヲダマスタメノヘンソウ？オレクワレルノ？」

「休暇貰って気ままに一人旅さ。…あたしやミコトの敵じゃないって昔から言ってるだろ。まだ信用してないのかい」

よくわからないが、俺は昼飯代わりに食われずに済むらしい。そういえば海軍の追いかけてこでおつるさんが参加する事はなかったな。この人もなんで、こんなに真っ直ぐに俺と接するのだろう？よくわからない。

「まあ、積もる話の中でゆっくりしないかい？お腹すいてるんだろ？」

「う、うん。俺を食べないでね？」

そして俺は恐怖でそう返事する他なかった。なんでそんな優しい瞳で俺を見る。まさか…俺を油断させて食うつもりか？と思ったんだが。

「そんな事するわけ無いだろ…」とちよつと怒った仕草をして俺の頭を撫でるおつるさん。あんた歳とっても綺麗ですね。俺もそんな感じで歳を取りたかったよ。

積もる話ってなんだ？俺が政府の建物の門にロトの紋章を書いた事か？それとも海軍本部の門にロトの（ry

思い当たる節がありすぎてわからないよ！果たして俺はどうなってしまうのか。

おつるさんに手を握られて、気分はそう、リンハイブに激震で単機突入して「大佐！帰ってきてください！」と部下に無線で怒られて、逆切れしてBE Aとタップダンスした夢を見た時の気分。

戦術機がBE Aに求愛されて突撃されたかのごとく、俺はおつるさんになされるがまま大手チェーン店に連れて行かれるのであった。

老い、あれはオクレ姉さん！？（後書き）

人物紹介

ミコト ヒカル様に憧れ、神様になるべく海に出たレアポ モン。

ピ チュウ ミコトの船。喋るがミコトには幻聴扱いで相手にされない。

おつる 草壁流を継承する女傑。 昔ミコトをゲットしようとした。

ミコト昔話／ダズさんの描く英雄（前書き）

補足話

そこにやってくるニコ・ロビン。二人をみて笑っている。そしてなにやらあの人がニコ・ロビンを妙な笑顔でスプリングラーが作動して水がふっている場所まで引っ張る。

「ん？ニコトちゃんなあに？…ちよっ…」

「れつつだんすまかぶるー！」

「ちよ…やめなさ…ク、アハハハハハハッ」

そして踊り始める。あの人はあるな事をする人だったのだろうか？自分の記憶では他人との接触をめんどくさがっていたような気がする。そう記憶の中にあるあの人。死亡説が流れ、俺も死んだと思った人。あの記憶は俺の中の宝物の一つだ。アレはそう、昔のとある船での出来事だ。

「ひい
ひい
ひい
ひい
ひい
ひい
ひい
ひい
ひい
ひい
助けてくれー！！」

「うるさいぞ。黙ってる」

バシントン、助けを乞う男を鞭で打つ奴隷商人の男、そう、ここは奴隷船。いや、人攫いの船と言った方がいいか。

手錠され、身動きも自由に出来ない。男一人ならばどうにかできるだろうが、何人も居て、手錠された身では奴隷達は何もきでない。

母ともども人攫いに攫われ、オークションにかけられ、母は天竜人に買われる。だが自分は売れ残った。売れ残った奴隷はまた収容所に返される。

自分もまた、あそこに戻されるだけ。そしてまた時期が来たらオークション会場へ、その繰り返しだ。

「
…」

騒いでも仕方が無い。誰も助けてはくれないのだから。母に会いたい。時間が巻き戻れば良いのに。理不尽な世の中だ。

奴隷商人は男を鞭で打つのが飽きたのか船室から出て行く。幼い自分は恐怖でいっぱいだった。誰か助けてくれ。誰でもいい。そう願っていた。

それから何日かした時にソレは訪れた。

「おい、なんだ貴様は！」

部屋の外がうるさい。何かあったのだろうか？奴隷商人達はなにやら慌てているような声で外に居る誰かに叫んでいる。

「私はム カ大佐だ。全世界は再びラ ユタの元にひれ伏すことになるだろう！！」

「ああ？言ってる事はよくわからねえが、大佐って事は海兵か？ならわかるだろ？この船はちゃんと政府に認可されてる船なんだよ？

わかるか？チビの大佐さんよ」

外の声はなにやらくぐもっていてよく聞き取れないがム　力大佐：？が来たようだ。海軍の人かな？助けてくれるのかな？と淡い期待をしたのがつかの間。

政府公認？という事は海軍は助けてくれない。自分は再び絶望に落ちる。

「言葉をつつしみたまえ！！君はラ　ユタ王の前にいるのだ！！」

「あん？なんだ？どこかの王族か？嘘こけ、そんな服装の王族なんて見た事ねえよ。意味のわかんねえ事言っでねえで早く自分の船に帰ってくれませんかオチビさんよ？」

「君のアホづらには、心底うんざりさせられる。フヒヒヒヒヒヒ」

「ぎあああああああああああああ」

何やら外で叫び声が聞こえます。何が起こっているのだろうか。怖くて自分は震えて縮こまっているしかできなかった。

となりのおばさんも同じように縮こまって震えています。

「てめえ！何をやったかわかってるんだろうな？おめえら、やっちまえ！！」

「オラアアアアアアア」

なにやら男の叫ぶ声と刀と刀がぶつかり合う音が外から聞こえてくる。戦っているのだろうか？

「こいつ、どこかで見たことあると思ったら白髪だ！！海兵なんかじゃねえ！白髪のミコトだこいつ！」

「おいやめる馬鹿、早くも大佐ごっこは終了のようですな」

「ふざけやがって！！やっちまえええええ！！！！」

何やら刀のぶつかり合う音に加えて、爆音や銃声も聞こえ始めた。何が起きているのだろうか？恐怖で震えがとまらない。船がものすごく揺れる。船は大丈夫なのだろうか？壊れたりして海の藻屑になってしまふのか？幼い自分はただただ恐怖してるだけだった。

「私をあまり怒らせない方がいい… ひざまずけ、命乞いをしろ…
それともその大砲で私と勝負するかね？」

「…こうなりややけど、やっちまえ！！！」

「させるわけ無いだろう女子 生的に考えて。俺が素に戻るって言う、でっていう。船壊れるっつーの」

「ウツ…」

爆音やら銃声、刀がぶつかる音が聞こえてからどれくらい時間が経っただろうか、急に船は静かになった。

そして自分達が閉じ込められている部屋のドアが開かれる。そしてあの人に出会った。

「はあ… 奴隷ちゃん達？ 解放しにきたよー」

入ってきた人は白髪で赤い目をした綺麗な女の子だった。返り血？で顔も全身も真っ赤だった。疲れているのだろうか？無表情で解放しに来たと自分達に伝える。

「助かるのか」「家に帰れる」等船内に居た自分と同じような売れ残り奴隷達がざわめき始める。

中には泣き始める人も居た。自分も気がついたら泣いていた。

血まみれの少女が奴隷達の手錠等はずしていく。自分も手錠をはずしてもらった。

手がしびれている。やっと解放されるのかと、安堵した、だが母はまだ囚われの身のはず。母が心配だ。

他の奴隷の人たちが、彼女に礼を言ったりしているが、全然取り合わない。めんどくさそうにしている。

この人なら、お母さんを助けてくれるかもしれない。そう思い怖いという事にする。

「あの…」

「なんだ？泣いてる幼女」

幼女呼ばわりされ、あなたもさほど年齢が変わらないのでは？と思っただけで怖くていえなかった。

しかしこの人も自分を女だと思っただけなのか、やはり髪型を変えて身体を

鍛えないと男に見えないんだろうな。
そう思いながらも、自分は目の前の血まみれのこの人に恐る恐る言う。

「お、おかあ…さんを、ひぐつたすけて…ひぐつ…ください」

「あ？何処に居るんだよクズ」

「てんりゅう…びとさんがひぐつ…つれてった…」

泣きながら言ったのでちゃんと伝わったかわからない。言い切った後自分は疲れからか座り込んでしまった。
なにやらこの人は考え込む。表情からは何を思っているのかは想像できない。お願い…。

「はあ…仕方ないか」

そう言い、少女は自分に向かってしゃがみこみ、不自然で不器用に作られた笑顔で自分の頭を撫でる。
思ったより怖い人ではないかもしれない。失礼だと思っだろうが血まみれのこの人が怖かった。

「天が俺に大統領になれとでも言うのだろうか…」

そしてなにやらぶつぶつ言い始める血まみれの少女。はためから見ると不気味だ。

「まあ、まかしとき？マリージョアぶっこわしてきてやる」

「？」

そう言いながら自分の頭を撫でる。この時の自分には言ってる事がよくわからなかった。

そしてこの人の船に奴隷の人達と乗り、何日か航海した後、近くの港に下ろされる。

みんな、お礼を言っている。「ミコトさんありがとう」とか色々聞こえる。ミコトって言うんだ、あの人。

そしてあの人港から出る時、自分はいばいと手をふるうとするが、ミコトさんは「そうじゃないこうだ」と自分の腕を持ち上げて敬礼？というものでお別れはするものと教わった。

「じゃあの」

そう言いあの人は去っていった。

そして自分の家に帰ってから何週間か経ったある日、自分の母が帰ってきた。わんわん泣いた。

本当に約束をあの人は守ってくれたみたいだ。母も感謝していた。そう、これが自分が英雄を目指すきっかけ。

それから身体を鍛え、男らしくするため頭を丸め、日々鍛錬。むちやくちややっているといるというあの人の噂等も聞きながら。そして月日が流れ、色々な事があって今に至るといいうわけだ。

「お互い生きていれば、また会えるだろうさ……」

「そうね……」

久々に会ったあの人は、少し変わっていたけれど、でも楽しそうにしていた。

仕方ない、あれからもう何十年も経っている。自分も変わり果てた。外見も中身も。

別に憧れているとかそういうのではない。だが俺は俺なりに英雄ヒーローになろうとあの日誓った事を俺は忘れない。

そう思いつつ俺はあの人に教わった、敬礼をする。

ミコト昔話／ダズさんの描く英雄（後書き）

独自解釈っていうか過去捏造っていうか、男のツンデレっていう。

ミコト昔話／つるの怨返し（前書き）

補完話。視点コロコロ変わる。非情で非常に暗い。あと普段の投稿より少し長いかもしれない。別に過去話なんていらないし、産業以上は無理って人はこの話と次の話は読まないほうがいい。

何も考えずに感じるだけで、ただネタ見たいってだけの人は読まないほうがいい。大事な（ry

主人公があそこまでぶっ飛ばざるを得ない適当な理由付け。人は理由付けしたいものなのだろう？

さあ始めよう、この空の下で巻き起こる喜劇の幕開けをお見せしよう。

ミコト昔話／つるの怨返し

side おつる

久々に休暇を貰って、ふらふらと気ままに一人旅に出た。まあ余分なのも後から来るんだけどね。

仕事が手につかず、気分転換をしようと思い、海に出て溜まっていた鬱憤やらなんやらのガスを抜こうと出たわけさ。

その旅の中、立ち寄ったレストラン。ここが待ち合わせ場所。そこで私はいつも心のどこかで引っかかっていた人物の声を聞いた。

「スカイークのチェーン店はここまで進出していたのか…」

ドアを開いてさて入ろうかと言うときに聞こえた声。その声が気になり振り返る。

こんな偶然があつて良いものなのだろうか？

昔の些細な勘違いが産んだ末に砕け散ってしまった絆。できる事なら修復したい。そう思い続けている大切な事。

自分が昔、家族同様に関わっていた人間。その子が昔と変わらない姿でそこに居た。

「あんだ…ミコトかい？」

「!？」

私は急ぎ、なつかしのあの子に声をかける。間違いない…ミコトだ。

「オ…オクレ姉さん!？」

「最初の一文字しか合ってないだろ…あたしゃおつるだ!!」

本当に懐かしい。海軍に来たての頃、私に向かって言った言葉とまったく同じ。

あの頃は本当に楽しかった。泣きそうになるのを我慢し、微笑みかける。

「オツルサン。オヒサシブリデス」

「あんたはちつとも変わってないねえ…死んだかと思ってたんだよ?」

私はこの子の死亡説が流れたとき、何か大切なものが砕け散ったような感覚を持った。

そこで気付いたのさ、自分は自分が思っていた以上にこの子の事が大切だったんだなと。

「ナンデキヨウセイフクジヤナイン？オレヲダマスタメノヘンソウ？オレクワレルノ？」

「休暇貰って気ままに一人旅さ。…あたしゃミコトの敵じゃないって昔から言ってるだろ。まだ信用してないのかい」

たまには休暇を貰ってみるもんだ。こうして再び出会えた。ほんとにあたしゃ嬉しいよ。例え今が敵同士だとこの子が認識していたとしても。

しかし、七武海の二人と過ごしているという噂を聞いて、少しは人を信じるようになったのかと思っただけだねえ。

「まあ、積もる話の中でゆっくりしないかい？お腹すいてるんだろ？」

「う、うん。俺を食べないでね？」

相変わらず、というか、アレからやはり人間不信？が酷くなってるようだね。

すごく怯えた表情、あたしゃ鬼じゃないってんだ。そしてミコトをずるずる引っ張りながら店に入る。

そして二人で店の中に入り注文し、料理が来て、何故か叫ぶミコトを嗜めながら二人で食事をする。最近はどうしていたんだ？病気や怪我はしてないか。

一緒に暮らしている人に迷惑をかけていないか？等を聞く。

ミコトは怯えからか、テンぱりながらしどろもどろに答える。そんなに苦手意識を持たなくてもいいのにねえ。傷ついちまうよ。

そして気になるあの事件の真相を本人から聞き出そうと思い、聞くうと思ったのだが。どうやらボケ？が進行していて昔の事をほとんど覚えていないそうだ。

そういえば私より年上だとか言ってたかねえ？あの頃の姿のままでからつい弟扱いをしちまうよ。

仕方ないねえ、ゆっくり話してやるから、思い出しな。今のおまえさんなら、もう大丈夫だろう？あの娘も来る事だ。はっきりしたい。

s i d e o u t

これは、白ひげがまだルーキー時代の頃の昔話である。

s i d e 若かりし頃のおつる

その子供は唐突にやってきた。支部からの推薦で本部まで来た少女。不気味なまでに無表情なその子に対して最初は特に何も思わなかった。せいぜい親が海賊にでも殺されて、海軍に復讐かなにかでもする気なのだろう。

遠くからあの子を見た第一印象はそんな感じだった。

そして上からちょうど暇だろ？とあの子の教育係に任命され、訓練をするわけだが、いかんせん余りやる気はなかった。めんどくさいと、そう思っていただけだった。

「はじめまして。今日から貴方の教育担当になります。おつるです」
「オ、オクレ姉さん!？」
「最初の一文字しか合っていないでしょ…私はおつるです!!」

思わず突っ込まずにはいられなかった。言う事は何かよくわからないし、むちゃくちゃだし。言葉遣いを直そうとしても聞いてくれない。
なんだろうこの子、頭大丈夫かな？それが直にであって思った感想だった。

誰か教育係変わってよ…。そう思った。

だがそれも日々訓練で触れ合っていくにつれてそれが誤解だとわかる。

この子は無表情なんかじゃなかった。わかりにくいが、ちゃんと喜怒哀楽はある。ただあまり表情が動かないため、誤解されがちなのだろう。

そして非常に優秀であった。確かにこれなら本部に推薦するのもわかる。この子はダイヤの原石のような子だ。

「剃はこうするの」

「うゝん、きれてなあゝい」

「真面目にしなさい」

「ソーリーソーリーヒゲソー」はあ…ふふふ。ほら、こうするの、こう…はひい！」

日々不真面目なようでちゃんと私の話を聞いて、飲み込んでいくのだ。この子は才能がある。教えがいがあると云うものだ。この子に何故海軍に入ったか聞いてみたら、「俺の中の神様がこう囁くのさ、今、ここで　る運命だと」などと意味のわからないことを言っただけで優しく頭を撫でてあげると素直にこう言った。

「俺の夢がLOVE&PEACEだからです！！いやね？このままじゃ俺弱いし、六式つてすごいから覚えただけですよ？最近物騒だし？」

と不器用な笑顔で可愛い返答を答えてくれた。親はどうしたのと聞いたときははぐらかされた。まあいいでしょ、無理に聞かなくても大体わかる。

何か怯えてるような気がしないでもないが気のせいだろう。ちゃんと話せばわかってくれるいい子だ。

そしてなにより可愛い弟が出来たような感情が生まれる。それは他の人たちも例外ではない。

「センゴク！！東大寺ごっこしようぜ！！おまえ大仏な！」

「こら！やめんかミコト！人の身体に登って拝むな！」

「まーたミコトちゃんか、おじさんともボディービルダーごっこしようぜ！」

「あらあら」

ここに居る将校達は一人身が多い。その寂しさを紛らわすかのよう
に日々あの子と遊んだり、動きを見たりする。

センゴクも嫌がっているように見えるが、口元が笑っている。あの
筋肉バカは自分に歳の近い娘が居るから、あの子に変な遊びを教え
る。

自分の娘にもしてるのかしら？後で言い聞かせないと…。

などと、まるで自分に子供が出来たかのように、遊びながら鍛える。
将校達とあの子の周りには笑顔が絶えない。もちろん私も。それが
新しい日常だった。

そして月日は流れていく。あの子も独り立ちをし、立派に海兵として治安維持や海賊討伐をしていく。

どどん出世していくあの子。もう大佐か。非能力者でありながら、すごい速度で出世街道を登っていく。

手のかかる子ほど可愛いと言うが、本当にそうだと思う。自分の手から離れたとき、ほんとに寂しくなっちゃったもの。

たまに同じ時期に本部に居たときは…。

「一緒にお風呂入りましたよっか」

「おいやめる馬鹿、こんな見た目だが中身は40代のオッサンですよ!？」

なんて可愛い言い訳をして照れているミコトを無理やり拉致し、服を脱がせて一緒に入る。ミコト成分の補給だ。

何やら風呂場で頭を抱えて「これなんてえr g?」等とよくわからない事を言うミコトの頭を洗ってあげる。

綺麗な長い白い髪、女の子にしかみえない。でも男の子。髪切らないの? って聞いたら「これは家訓で切ってはいけないのだー」なんて言ってたっけ。変な家訓ね。

そしてミコトはふらつきながら風呂を出る。ミコト成分もたっぷり摂取したし、また頑張れるわ!

外に出ると何やら騒がしい。ミコトと少女の声が聞こえる。なんだろうか?

「お前はP・ーラサワー……で、なんの用だ？ 少尉。」

「サイダーですう！いい加減覚えてください！…大佐をお食事に誘いたいと思ひまして…」

「少尉。今、世界は大きな変革期を迎えようとしている。そのことについて考えるようなことはないのか？」

「はい！ ないです！」

「まったく。放っておけん男だ」

「え、あたし女……なんですけど……」

「よし！今日も元気にハー マン軍曹ごっこだ！！」

「やっ……て……ええええええええええ！？」

「信用しろ、俺がお前を男にしてやる」

「え、あ、ああ……」

そして風呂から出ると、少女が先に出たミコトに絡んでいて、なにやらミコトに連れて行かれていく。

何故私が先ほどのように無理にでも一緒の時間を作ろうとするのか？それはミコトの部下がなにやらものすごくミコトに懐いていて、取られた気分になったからだ。

そう、さきほどミコトに絡んでいた少女であり、あの筋肉バカの娘だ。悪魔の実の能力者だがまだ経験不足、そこでミコトの直属に歳が近いという理由もあり配属される。

ただ、ミコトの配属先には裏がある。優秀なミコトを買って、横領疑惑のある中將を調べるといふ本人にだけ伝えた仕事。

あの筋肉バカは自分の娘の心配ばかりしていた。ミコトのことも心配してあげなさいよって言うと、何やら複雑そうな顔で「娘がとられたらどうしよう……」等と気の早い事を言っていた。

馬鹿ね、ミコトは私のモノよ？小娘になんかに可愛い弟をくれてやるものですか。……ぐすん。

s i d e o u t

s i d e サイダー

はじめましてサイダーですう！唐突ですがあたしと大佐の馴れ初め

を教えちゃいましょう！……いや、誰に言ってるんだろっあたし……。そう、それは初陣での出来事。

最初、自分の配属先に不満があった。大佐とはいえ何故自分と同じような年恰好の、少女みたいな男の子の下に行かないといけないのか？

名前も何度言ってもちゃんと覚えてくれないし。なんなの？父に文句を言いに言ったが。あいつならお前を任せても大丈夫だ。なんて笑いながら言う。

何が大丈夫なのだろう。そう、始めてであつた頃は思っていた。

そして初めての戦闘、初陣である。思えば自分の力を過信しすぎていたのかもしれない。

能力を使い、はしやぎすぎていたのかもしれない。

そして海賊に不覚を取る。最悪だ、一人で突っ込みすぎたのかもしれない。

「ちくしょー！模擬戦でも負け知らずのスペシャル様なんだぞ！！」

あたしの叫びが聞こえたのか大佐はすかさず来てくれた。ものすごいスピードで、普段の訓練では見た事の無い速さだった。

海賊どもを物凄いスピードで切り刻んでいく。アレが大佐の本気？

普段は手を抜いてるのかな？無表情で、ちょっと怖かった。でもすごく綺麗だなんて思った。

そしてあたしを助けてくれた。それだけならただ感謝するだけだった。ぼーっと大佐を見ていたら。

「おまえはマジでーラなのな、ちょっと反省しろ」
「ぐっ……っあ、何！？よくも女の顔をうつ……」

パンツと自分の頬をはたかれる。痛い。

「ぼーっとして油断したら駄目だろ、まだ戦闘中だ」

（に、二度もぶった……！父にもぶたれた事無いのに！本気であたしの心配してくれてる！）

「油断して申し訳ありません、大佐殿！」

（惚れた……！）

これがあたしと大佐の馴れ初め。アレからずっと大佐を追い回して

いる。四六時中。

それはもう、ずっとずっと。えへへ。

「まあハー マン軍曹もあきたし普通に行くか」

「相変わらず飽きっぱいですね！大佐！そんなところも大好きです！」

「はあ… まあいこか」

そして、二人並んで食堂に食べに行く。こんな日々がこれからも続くんだと、この頃のあたしは信じていた。

s i d e o u t

こうして平和な日常の日々は続く。だがそれも唐突に終わりを告げる。

side 若かりし頃のおつる

「何だって？ミコトがあの中将を？」

部下からの報告に驚いた。ミコトがあの中將疑惑のあった中將と戦闘し殺害したというのだ。
あわてて現場に駆けつけてみるとそこはさながら地獄絵図であった。

「ミコト…なんだってこんな事を…」

「迷いなんか、すべて消えたわ」

「待ちなさい！」

声をかけるがミコトは答えず、ものすごいスピードで走り去ってしまった。

アレがあの子の本気…？追いかけてやうとしたが近くにサイダーを見

つけ、駆け寄って先に何があったのか聞いてみる。

「なにがあつた!？」

「あ…ああ…あやまらなきゃ…たいさに…ああ…」

なにやら錯乱状態で茫然としている。

「たすけてくれたのに…みかたころした…ひとごろし…ああ…」
「もついい!」

サイダーを抱きかかえて医療室に駆け込む。

どうやら負傷しているようだが、幸い重傷ではなかった。

そして少し落ち着いた所で話を聞いたら。とんでもなかった。

掻い摘むとサイダーがあの中将の部下に襲われて、その部下をミコトが尋問して殺し、中将与戦っていたという。

説明も途中でまた彼女は錯乱状態に戻った。

彼女が正気に戻るまでいくらかの歳月が必要となる。

s i d e o u t

そして月日は流れ、あの子は賞金首に、さらに月日が流れ、あの子は五皇に。
後に政府から抹殺命令が七武海に下され、世に死亡説が流れ始める。
そして時は現在に至る。

side おつる

アレから何年も過ぎた。
センゴクやあの筋肉馬鹿は微妙な心境なのだろう。筋肉大将はなんとか抹殺命令は避けようとしていた。
センゴクにミコトの事を聞いても「あいつは俺達を裏切った、それだけだ」と悲痛な顔で言うだけだった。
直接かばったりはしないが、それでもなんとかしようとしていたのを私は知っている。あいつも不器用な奴だ。

「あそこで何があったんだい？ミコト本人から聞きたいんだがね。アレから…」

そう言っている時にふとミコトの様子がおかしいことに気がついた。話に夢中で気付かなかった。尋常ではない。震えている。呆然として涙を流していた。

「ミコト？あんたどうしたんだい？」

心配してどうしたのか聞いてみる。呆然と表情の出にくい顔のはずのミコトが悲痛な表情を露にし、涙を流していたのだから。

「あ…ああ…、おも…い…だした…」

そこに時の悪戯とでも言うように店で待ち合わせていた人物が登場する。

「あー居たーおつるさん！置いてくなんて酷いじゃないです…へ？…たい…さ…？」

そう、サイダーと待ち合わせていた。元々はそのためにここにきた

のだ。

ミコトに出会ったのは本当に偶然。その偶然に、サイダーも驚いている。

そしてミコトはガタガタと音を立てて震えて顔面蒼白で涙を流していた。ただ事ではない。

[illegible]

「！！！！」

ミコトが悲痛な表情で叫ぶ。

私のもう大丈夫だろうという思惑は外れていたらしい。やってしまった、そう思ったときにはもう手遅れだった。

ミコト昔話／つるの怨返し（後書き）

ミコト千里行の真実。それは次回。

人物紹介

サイダー 女版P・ーラサワー 筋肉大将の娘でアホ少女だった。
ミコトに惚れていた。

失われたメモリアル（前書き）

いつもの雰囲気（ふいんきで何故だか変換できた）では無いので予めご了承ください。

改訂 11 / 12

失われたメモリアル

生れ落ちた罪、生き残る罰、私という涙のハリケーン！！どうもワ
ンピース界のルドラサウムこと花月っちゃんです。うそですみこと
です。

え？白い鯨ならニューゲートだろって？

なんて事だ…白ひげとリトルプリン ステンコーが戦国時代の日本
で、無限城に居るセンゴクを倒すために戦い、天下統一をするゲー
ムが次回作だったのか…。

まあ、そんなもん知らんがな。

いやー何というか、キャッチセールスの如くお店に引っ張られちゃ
って連れ込まれちゃいそうなミコトちゃん。

そして入店するわけだが、普通に入店しても面白くもなんとも無い。
これは…心の中の海 先生がやれとおっしゃっている。

おっしゃっているが俺にはそれを実行する勇気が無かった。怖い。
そう怖いのだ。

「ほら、入るよ」

「はひい」

俺はあかりちゃんのように素直に可愛く返事をするしかなかった。
この人すげえ苦手だわ。

あれ…？なんで苦手なんだっけ…。駄目だ、ノイズが入って思い出
せない。

そんなこんなで頭痛が起こる自分に対して、脳裏にクエスチョンマ

かしいな、そんな記憶あつたっけ…？

そして大人しく恐ろしがりながら食べていると、おつるさんが俺の近況をなんか聞いてきたので適当に答える。

食ってみれば中々うまいじゃないか。シェフよ褒美にジュースでもおごつてやろう。

食事もまあまあ食べた頃だつたかなにやらわからないことをおつるさんは俺に聞く。

「結局さ、ミコトが　を　きつかけになつた事件は、おまえさんが全て悪いわけじゃないんだろ？」

「…？」

ん？何かノイズが走り俺はおつるさんの言葉が理解できない。頭が痛い。何を言つたのかわからない。事件？そんなものあつたっけ？最近老化が進みすぎてるのかもしれないなあ。そしてついに耳まで遠くなつてしまったのか…。

「よくわかんないけど最近ボケがひどいというか老化が進んでわかんね」

「そうかい？じゃあゆっくり話していこうか？」

そう言いながら俺の頭に手を乗せてなでなでしながら語り始めるおつるさん。

俺はこの時、自らが出していた”サイン？”を気のせいだと思い、無

視したままだった。

そして俺は話ながら普通に過去を思い出していった。

s i d e 昔のミコト

六式を覚えるため、海軍の支部で海兵になった俺なわけですが、六式の訓練なんてなかったし、書物くらいしかないっていう。流石の俺でもそれじゃあ無理だわ。だから海兵になるときにオネガイした大佐殿にまたオネガイをする。

「六式覚えたいんで本部へ行くための推薦状書いてくれ」

「はいはい、書くからさっさといつてくれ」

なんかものすごい嫌そうな顔で大佐ちゃんは答えたが、それでも書

いてくれるそうだ。

厄介払いみたいなもんかね？まあしてくれるっていうんならそれでいい。

そんなこんなで俺は本部に配属が決定され本部に行く事になる。

そしてやってきました海軍本部。書類やらなにややって、本来なら軍学校とやらに行かないと行けないらしいんだが。

書類やら推薦状での選考の上で、どうやら一人将校さんがマンツーマンで指導してくれるらしい。ほえー。あの大佐何書きやがったんだろう。

そして将校さんとか対面なわけですよ。

「はじめまして。今日から貴方の教育担当になります。おつるです」

「オ、オクレ姉さん!？」

「最初の一文字しか合っていないでしょ…私はおつるです!!」

おれはついつい、素の自分で返事をしてしまう。原作のキャラじゃない!しかもすげえ美人、やべえテンション上がったきたwww
www

と、俺は少し緊張状態やら色々しながらみを忘れて、普通に接した。おつるさんから可哀想な子を見る目で見られたのは気のせいだと思いたい。…ぐすん。

そして訓練する日々が始まるわけだが、原作じゃほとんどしゃべってないし、アニメじゃしゃべらなかつた人だが、話してみるとすごく優しくていい人だって事がわかった。

原作で結構好きなキャラに出会うつていうのはテンションがあがるものなのです。この世界に生まれた醍醐味じゃないかな。

そして極度の緊張状態が続いていた日々だったので、久々に自分が出せて俺は喜んではしゃいだ。久々に感じた開放感だったのだ。とある訓練のある日、俺はついついはめをはずしはじめる。

「剃はこうするの」

「うゝん、きれてなあゝい」

おれは美人なおつるさんについつい場を和ませるためにしゃれを言う。

「真面目にしなさい」

「ソーリーソーリーヒゲソー」はあ…ふふふ。ほら、こうするの、こう「…はひい！」

だんだん俺の事がわかってきたのだろう。ちょっと優しい笑顔で頭を撫でられるのに弱いのだ。

ちよつとした恐怖を感じる。女の人苦手なんだよ。

そしてまた日々が過ぎていくわけだが、とある訓練の時、なにやら聞いたそうにしているおつるさんがいたので。

言いたい事もいえないこんな世の中じゃ〜と親切に言ってあげたのさ。そしたらどうして海軍に入ったのかとか聞いてきたので素直に思い浮かんだ事を俺はこう答える。

「俺の中の神様がこう囁くのさ、今、ここで　　る運命だと」

するとおつるさんは無言で笑いながら俺のあたまをなでる、…怖い
です。

「俺の夢がLOVE & PEACEだからです！！いやね？このま
まじゃ俺弱いし、六式ってすごいから覚えたかっただけです
よ？最近物騒だし？」

と、ありきたりな事を言っただけでその場をごまかす。うん、あんまりこ
の人の前ではふざけない方がいいね。みこと覚えた。
そして一応真面目に訓練をする日々が続く。

そうした日常が流れていく日々。若い頃の原作キャラやら知らない
人等に出会う。俺はテンションがあがりまくる。

そしてついついはしゃいでしまったんだよ。折角の第二の人生、楽
しまないと損だろう？

ある日、センゴクに報告書を出すわけだが、普通に出しても俺にと
っては面白くない、ならば遊ぼう。

「センゴク！！東大寺ごっこしようぜ！！おまえ大仏な！」

「こら！やめんかミコト！人の身体に登って拝むな！」

そう言いながら俺は仕事中のセンゴクさんの身体によじ登る。いやね、原作ですんげー好きな人なんですよ。

なんか理想の父親っていうか、上司っていうかね。この人には何故か甘えたくなる。

「まーたミコトちゃんか、おじさんともボディビルダーごっこしようぜ！」

「あらあら」

そして、自分の容姿と同じくらいの歳の娘が居るからか、俺に構ってくれる筋肉将校さん。

周りをみわたすと笑顔で俺とセンゴクさんをみている。おれはとても幸せな気分を感じていた。

ここの人たちなら信じてても良いかもしれない。そう思い始めていた。

そして月日は流れていく。今では俺も大佐という地位に居る。いやさ、そんなに頑張ってたわけじゃないんだけどさ、何か武功でのしあがってしまった。

まだ若いのにどうのこうのと、嫉妬やねたまなんかもちろんあるけど俺は日々の日常が幸せすぎて、そんな些細な事など気にも留めなかった。

そしてなにやら副官がつくらしい。どんな奴が来るのかわくわくしている、筋肉大將が娘をよろしくたのむぞ！なんていいながら去っていく。

どういうことだろう？俺にはよくわからなかった。

そして何時間かした後、副官が挨拶しに、俺の部屋に来る。

「本日より貴方の副官になります。模擬戦でも負け知らずのスペシヤル様なサイダーです！階級は少尉です！！よろしくおねがいします！」

そして入ってきたのは、P・ーラサワーを髭髯させるような事を言いやがる少女。ちよつと頭を抱えて、俺はいつダブルオー的な世界に迷い込んだのか悩んだ。

だが、同時に素のテンションの俺と仲良くやっていけるんじゃないかと言う期待も抱く。

「おまえ、P・ーラサワーだろ本名、嘘付くなよ」

「サイダーですう！勝手に人の名前変えないでください！」

味方？に囲まれて、緊張がほぐれて、まるで家族のように接してくれる将校さん達、そのおかげでこうして今の俺がある。

そして、これがこいつとの初対面。まさかこの時はあんな事になるなんて俺は想像もしていなかったし。できなかっただろう。

そしてそんなこんなでこいつと書類とにらめっこしたり、まあ仲良く？お話したりコミニケーションを取っていくんだが。

この子もなんだかんだで懐いてくれている。徐々に俺はこの子に惹かれていった。なんかアホなんだがほっとけない妹が出来たような感覚に陥ったのだ。

そしてそんな事が日常になってきたある日、治安維持の一環として、どういう仕事かという事を覚えさせるために街へといくのだが、その道中で近くを縄張りとしていた海賊と出会ってしまう。

少女にとっては初陣の日。一応、自分はこの子を託されている身だったのでもフォローできる位置どりをしながら海賊を討つ。

すると少女は「イーヤッホオーウ！」とか言いながら単機突撃しはじめる。いやね、能力者で自分に自信があるんだろうけど、前しかみてない。

こりゃ駄目だ。多分奇襲されちゃう。そう予測した俺は追いかける。すると案の定後ろから奇襲されていた。

「ちくしょー！模擬戦でも負け知らずのスペシャル様なんだぞ！！」

すかさずフォローする俺。結構本気で走った。とりあえず奇襲してた奴等を片っ端から気絶させる。

「おまえはマジでーラなのな、ちょっと反省しろ」
「ぐっ……っあ、何！？　よくも女の顔をうつ……」

こいつマジでーラなんじゃね？そう思いつつ、こういう事を今後
もされては自分が疲れるので注意する。

「ぼーっとして油断したら駄目だろ、まだ戦闘中だ」

そしてだめですよーって少し厳しく注意したんだが、反抗でもして
くるかな？とおもったんだが。
何故かこいつは恍惚とした眼差しを俺に向けて。

「油断して申し訳ありません、大佐殿！」

と、素直に謝ってきた。わかってくれたみたいだ。そして残りの海
賊どもを捕まえ、そんなこんなで治安維持活動をしたのだった。
思えばこれが駄目だったのかもしれない。俺は変なフラグを踏んだ
ようだ。

それからというものの、来る日も来る日も、俺の側を離れない少女。
いや、あの、怖いんですけど。

懐かれるのはいいんだが、限度があるでしょう？とか思いつつも俺は少女に惹かれていく。

この子なら信じられるかもしれない。そんな事を無意識に考えてきた俺は笑ってしまった。

自分は変わるかもしれない。幸せになれるかもしれない。そんな事を。

そして、本部に帰ってくると何故か俺と風呂に入ろうとするおつるさん。

本当にこの人は俺を何だと思っているのだろうか。多分弟のように感じているんだろう。

俺は照れ隠しに適当な事を言う日々だった。

そんなある日。俺に異動命令が下される。

どうも俺個人にだけでこの任務をするそうだ。不正の疑いのある中将の監視および、事実確認。

まあ大丈夫だろうと、俺は軽い気持ちで事に当たってしまった。思えば緩みきっていたのだろう。

幸せな日々、それが俺を蝕んでいたのだと、後に俺は思う。

そして、そんなある日、違和感を感じる。いつものようにーラといや、サイダーと一緒に食堂で食事をしていたんだ。

すると食べ物の中に何か入っていた。そう、針だ。こんなものは自然に紛れ込むわけが無い。

食堂で食い物を作ってる人も俺とよく会話をして仲良くしていた人なんだが、この人がそんなことをするわけが無いと、勝手に俺はそう片付けて。

偶然だと、そんな風に勝手に結論付けていく。

そして、来る日も来る日も、”何故か？俺の食うものだけに変なものが入っている。

それとなくサイダーにも聞いてみるのだが、サイダーの方には特になにも入っていないようだ。

良かった。誰かが妬みでやっているのだろうか？それとも普段仲良く話していたあの食堂の人が？だが怖くて直接聞けない。

俺の心に直りかけていた、まるで前原君のような疑心暗鬼の心が再び戻っていく。

「サイダー……」

「はい！なんですか大佐！」

「おまえは俺を裏切ったりしないよな？敵じゃないよな？」
「はい！大佐が好きです！」

俺は疑心暗鬼に囚われ、つい、サイダーに変な事を聞いてしまった。
確かおつるさんにも同じような事を昔言つた気がする。
それに笑顔で答えるサイダー。微妙に会話になっていないが、いつもの事だったので俺はサイダーの頭を撫でる。

「ひゃうっ…はずかしいですよお」などと言っている。
家族同然の付き合いをしていた将校達とも仕事のすれ違いで繋がりが薄れていく中。俺の中でこの子の存在が大きくなっていくのを感じる。

そして月日は流れていく。

そしてそんなある日、ソレは起こった。

倉庫に借りた機材を返しに行くときだった。倉庫でなにやら声が聞こえる。

「いやだ！離せ！」と、聞きなれた少女の声が聞こえ俺は機材などほおって置いて、倉庫まで駆ける。

「何をやっているんだお前ら……」

そこで見た光景、それはまさに少女を大の大人が寄つてたかつて何かをしようと暴行している現場。

「おつとお！動くなよ？こいつがどうなってもいいなら知らないがな」

そして「おまえも後でたつぷりと楽しんでやる」等と俺にはわからない事をほざく同じ部隊の海兵。なんだこれは？

俺に刀を向けて俺の服を破ろうとする海兵。何だこの状況？わけがわからない。そして同じようにサイダーの服が破られそうになる。

俺の中のリミッターでもはずれたのだろうか？日ごろ溜まっていた鬱憤が爆発したのだろうか？

自分の中で大切だと思ったものを傷つけられそうになってたがが外れたのだろうか。

普段は出さない本気で俺はいつのまにかこいつらを殴り気絶させていく。

「は？」

少女を助け出す、そして少し離れた場所に行くよう指示する。少女は怯えたようにじっとしているだけだった。

そして何が起こったのかわかっていないような顔をした残しておいた一人、そいつに俺は刀を向ける。

「何故このような事態になっているのかを素直に話せ」

だが俺が脅しても、こいつは素直に話さない。仕方ないので拷問をする。

この時の俺に自重というものは存在しなかった。

「あつぐ…アアアアアアアアアアアア」

こいつの手を刺す。それでも痛みで叫ぶだけでまだ話さない。仕方がないので指を、一本ずつ丁寧にゆっくりと時間をかけて刺してはそぎ落としていく。

それでもこいつは呻くだけで何も話そうとはしない。

なら仕方ない、足もいっところ。そうしてぐりぐりと刺す。

するともつやめてくれ…話す…とやつと口を開く。早く答える。そう言つと、何やらこいつらは俺に嫉妬してこの犯行に及んだと聞く。聞いても居ないのにあの不正疑惑がかけられていた中將の指示とも

答えた。なるほど、アレが黒幕なのか。

用が済んだコレを切り刻む。「話したのに……」とか言っていたが俺は頭に血が上っていて何を言ってるのかわからなかった。

そして何かの息の根を止め、俺は振り向き、自分にとって大切な存在である少女に、もう大丈夫だよと笑顔で笑いかける。

「ひつ…」

何故か怯えている少女、サイダー？何を怖がる必要がある？俺はお前の敵を倒したぞ？

「ひとごころし……イヤアアアアアアアアアアアアアアア
アア」

震えていた少女が、叫びながら俺から逃げるように走り去っていく。

何故？どうして？俺は君を助けたんだよ？ナンデ？

俺はこの時そうとうなショックを受け呆然としていた。

何かに輝が入っていく気がした。その中で脳裏に前世がフラッシュバックする。

そう、友人にも家族にも裏切られ、唯一信用していたと言ってもいい年下の恋人。

その恋人が、恨みを持って俺に近づいていたなんて誰が想像するだろう。

恋人が男に襲われているところを俺は助ける。

ここまでいい、だが、助けたはずの恋人に何故か俺は刺されていた。

刺した恋人は嬉しそうに俺を見て、やっと殺せる。等と訳のわからない事を言う。

何故こんなことを…？そう尋ねる俺に、恋人は「あんたの親にあたしの親は　されたんだよ！！その復讐だよ！！」等と言って笑っている。

そしてなにやら起き上がった襲ってきた男、そいつがやれやれとでもいうように恋人の側に立つ。

どうも恋人が言うには本当の彼はその男らしい。わけがわからなかった。

長年の恨みが晴らせたとも言うように二人で笑って俺を見る。そこで俺のたがは外れた。

ひところしと叫ぶ恋人、そして何かの息の根を止める俺。

「飽きたな…」俺はそう言いながら自分の首をかき　る。

何故今になってそんなことを思い出すのか俺にはよくわからない。
そして現実に戻る。サイダーはあの恋人とは違う。そもそも恋人で
はない。

俺はそう思いながら疑心暗鬼になってきた心を必死に抑える。

そして黒幕という中将の居る場所を伸びていて残っていた何かを、
無理やり覚醒させて居場所を吐かせる。

用が済んだモノ達を順番に解体していく。これで、後は中将だけだ
ろう。

そして聞き出した場所に向かう。演習場の一つである。そこに座つ
て呆けている中将に言う。

「面白い事をしてくれたものだ。中将さんよ」

「…貴様、何故ここに居る？」

俺は笑いながらこいつに話してやる。しくじったのかとか何とかほ
ざいているがもういい。

そして何やら俺が任務で探っているという事が、筒抜けだったらし
い。何故か聞くと。

「貴様によくくつついてるアレが聞いたなら教えてくれたよ」等と理
解できない言葉を吐くコレ。

どういうことだ？閉じ込めていた疑心暗鬼は極限まで高まっていく。

だが、こんな奴のいう事など信じるものか。

俺はあの子を信じる。そう思いながらいつと戦い始める。

だが流石は中将まであがっているだけあって強かった、当時の俺は苦戦をする。

あちこちが炎に包まれる。コイツの能力か？よくわからない。

そうして戦っている最中、俺は信じたくない光景を目の当たりにする。

「やめてください大佐！」等と、あの少女があの中将を庇うように俺の前に立つ。

何故ソレを庇う……？ どうして？ なんで？ 何故？ 何故？ 何故？
何故？ 何故？ 何故？ 何故？ 何故？ 何故？ 何故？ 何故？
何故？ 何故？ 何故？ 何故？

この時、輝の入っていた種か何かが砕けるような音がした。

俺はその後、目の前のガキを蹴飛ばして、男を切り刻む。ガキは何か言っているように見えるが、何も聞こえない。俺はノリノリに覚醒したキ様だ。

目の前の何かは、馬鹿な…何故貴様如きが覇気を…と言っている。よくわからない。

シード覚醒中の俺は、この喋っている何かを黙らせる。そして、ガキにもとどめを刺そうとする……

…出来るわけ無いだろう…大切な存在だった。仲良くなれたと思っていた。こんな俺でも好いてくれる人が居るのだと思った。とても懐いてくれていた。

折角やり直せると思っていた。だがもう信じて良いかわからない。自分の心はぐちゃぐちゃだ。目の前の大切な存在だったものは子犬のように震えて怯えているだけ。

前世と同じなのか？また全部裏切られるのか？漫画の世界だから違うと思っていたのに。

…そうか、所詮人間なんてものはリアルだろうと漫画だろうと変わらないのか。

大切だった日々がセピア色になって消えていく。それはまるで途切れたフィルムのように。

何処を間違えたんだろうか？俺が生まれた事か？生れ落ちたのが罪？

真面目に少しでも生きようとしたのがだめだったのだろうか。

もうワカラナイ。目から滴るのは何だろう？わからない。そんな時。もう一人なにかが来た。

「ミコト…なんだってこんな事を…」

そう言いながら、俺に武器を向ける姉のように思っていた何か。

そうか、あの任務とやら、何かおかしいと思っていたんだ。俺を嵌める為の罠か。

もう、駄目だ……。ここに居たくない。痛い。頭が痛い。痛い。痛い。
痛い。痛い。痛い。痛い。痛い。痛い。痛い。痛い。痛い。痛い。
イタイ。イタイ。イタイ。イタイ。イタイ。イタイ。イタイ。イタイ。
イタイ。イタイ。イタイ。イタイ。イタイ。イタイ。イタイ。イタイ。
イタイ。イタイ。イタイ。イタイ。イタイ。イタイ。イタイ。イタイ。
イタイ。イタイ。イタイ。イタイ。イタイ。イタイ。イタイ。イタイ。

「迷いなんか、すべて消えたわ」
「待ちなさい！」

もう、信じるなんて事はやめた。信じるから裏切られる。最初から”信じる？”なんてしなれば裏切られない。とあるヨミさんの台詞を俺は言う。

そう、ここは漫画の世界だ。漫画の世界の住民のようにちゃめちやに生きないとダメなんだ。

中途半端にふざけてたからだめなんだ。平和に楽しく生きるには、徹底的にふざけないと。

結局、人なんてわからない。リアルだろうが、この世界だろうが。

そう思いながら、何かに別れを告げて俺はブーンしながらこの場所を去る。

そして、それから何年か俺は、何かに憑かれたように敵対するモノを駆逐していく。

そして自分の煩わしい記憶を塗り替えるため、知識にある人物になりきる。そうした日々が続く。

何かを忘れるためのように。俺は大切だった？何かを忘れていく。そう。いつしか”本当？に忘れていく。

s i d e
o u t

思い…出した。

「あそこで何があったんだい？ミコト本人から聞きたいんだがね。
アレから…」

何故今になって思い出させる！？ナンデ？ナンデ？ナンデ？ナンデ？
ナンデ？ナンデ？ナンデ？ナンデ？ナンデ？ナンデ？ナンデ？ナンデ？
ナンデ？ナンデ？
ナンデ？ナンデ？ナンデ？ナンデ？ナンデ？ナンデ？ナンデ？ナンデ？ナン
デ？ナンデ？ナンデ？ナンデ？ナンデ？ナンデ？ナンデ？ナンデ？ナン
デ？ナンデ？ナンデ？

目の前の何かは喋っているようだが、聞こえない。

「あー居たーおつるさん！置いてくなんて酷いじゃないです…へ？
…たい…さ…？」

あ…ああ…なんだコレは…俺をこつ呼ぶ聞き覚えのある声…なんだ
ったか。

まさか油断させて俺を捕まえるために、俺をこの店に招きいれたの
か？ されるのか？俺は？

また裏切られるのか？またこいつらは同じ事を繰り返すのか？人は
やはりそうなのか？

…まだふざけ足り無いのか。激しい頭痛を伴い、俺の思考はまたわ
けがわからなくなる。

どうもまだ俺を嵌め足り無いらしい。

勝手に動く俺。そして何かを斬っていた。

いつか見たような光景。だが俺は思い出せない。

赤く零れる、コレは涙か？何かが何かを庇うように立っている。

頭痛が酷い。俺？俺は何だ？ヨミさんなのか、本 的雷鳴だったか。
なんだったか。俺は俺さえ居ればいい。
他は何も見えない。聞こえない。

俺はそこから逃げるように去る。何かは追いかけては来ないようだ。
そして何かに恐怖するように俺は船を走らせ続ける。

「人も…想い出も、しがらみも、全て無かった事にし…たい…」

めんどくさい。全てがめんどくさい。考えるのもめんどくさい。全
て捨てよう。忘れよう。

中途半端にまた人を信じかけていたのがダメだったんだろう。
中途半端にまたふざけきつてないのがダメだったのだろうか？

…バチが当たったんだ。本気でふざけないと。
そして、放心状態の俺は遠くへ遠くへ船を動かしていった。

真実の一つ。無くしてはいけない何かを俺は無くした。それだけだ。

s i d e おつる

「おつるさん！大丈夫ですか？」
「たいした事無いよ…それより…」

どうやらあの子の心の傷は癒えていなかったようだ。それどころか踏みにじったような形になってしまったようだ。

あの子の口から、真相を聞きだそうとした。だがそれがいけなかったのかもしれない。そつとしておいてあげたほうが良かったのか？ 関係修復なんて無理なのかもしれないねえ。

「どうやら、おまえさんの思ってた通りみたいだよ…」

「やはり…大佐はまだあのときの事を…あの時、あたしが拒絶しなければ…」

「それは仕方ないだろう？子供だったおまえさんじゃあ土台無理な話だ。もう、過ぎ去った過去なんだよ…」

悲痛な表情で泣き叫びながら私を斬ったミコト。もう駄目かもわからんねえ。

「もう…手遅れなんでしょうか…」と悲しげに言うサイダー。それはわからないねえ。あたしゃミコトじゃないんでね。

もう会っても会話すら出来ないかもしれない。あの子にとってはもう敵なのかもしれない。

…できる事なら、誰かがあの子を救ってくれますように。そう願わずには居られなかった。

失われたメモリアル（後書き）

真実というものは人の数だけある。しがらみを取り払ってそこに残るのは事実のみ。

筋書きも役者もありきたりで
未知もない
だろう？

おつるさん関係修復失敗の巻。相互理解って大切だね。白ひげ達のらぶこーるを断った裏側。
前世から主人公はキチ印。救いは無い。すれ違いが産む喜劇。人間なんて分かり合えないものなのです。どうして他人を簡単に信じられる？

人物紹介

サイダー 実は今でも独身の一途な人。ここ不幸。

ミコト 嘘で塗り固めないと自分を守れない人。 実際脳の老化も進んでた。

D i v e 1 ちょwwwツパー（前書き）

前の2話すつ飛ばした大勢の人に丁寧に産業以内でサダーを説明すると、主人公が本 的雷鳴の雄たけびを覚えるきっかけになった人。 リキャラ。
以上。

序文は前の話の蛇足。 とばしてこ。

D i v e 1 ちょｗｗｗｗッパ―

s i d e サイダー

おつるさんを連れて海軍本部まで帰ろうとする。…………あたしは結局また何も出来なかった。

自分をみて、怯え泣き叫ぶ、あの頃と変わらない姿のあの人を見てあたしはほとんど動けなかった。

“それどころか” また？ 同じ事をあの人にしてしまった。

幼い私は、何も知らなかった。知らされていなかった。まさかそんな任務についてるだなんて知らなかった。

ただあの人と馬鹿をやって、楽しくわいわい騒いでいけるだろうとそう信じていた。

あんなに一緒だったのに、夕暮れは大グレイト！ ああ、俺は武神だったんだな。なんて、あの人なら言いそう。

海軍に居た頃、あの人と一緒にすごした時間は誰よりも長かったと自負している。

あの人の事なら何でも知っている。そう思っていた。けど、それは間違いだった。

間違いはすれ違いを呼び、すれ違いは、…………うつん…まだ、まだあきらめたりしない。私はいつかきつと仲直りする。

「おつるさん…あたしは負けません！！大佐に必ず振り向いてもらいます！！」

「そうかい……、まあがんばんな」

そっついながら二人であの人が去っていった方向に視線を向ける。
大佐…、今はまだあたしの覚悟が出来てませんけど。覚悟が決まったら、迎えに行きますからね？

s i d e o u t

そう、それはとある、あいと　うきのおとぎばなしのような。あま
くてせつなくさわやかな。そしてさいごじぶんがやりとげたどやが
おをして、　きえるような…。

[illegible]

今日も今日とて、シュミ ラムに乗って、電脳世界でコレクター
イと日々戦う可愛い男の娘だ。

309

な幼女のまこちゃん狙われてしまう！

等と、とあるゲンハの超電 砲を思い出す。ラスボス前の装甲軍団はやばかったな…。

後、何故か自分が見ていた夢がどんな夢だったかを思い出せない。

…そうか、俺はゲ ハのように脳内にチップを埋め込まれているのだろう。

俺はゲ ハさんも大変リスペクトしている。俺の脳内キティ四天王の一人。切なく一途な想いを抱き、主人公に振られてしまう可哀想なキティさんだ。

しかし、俺はいつサタ イルにチップを埋められた？管理局に俺は追われているのか？

ううーん…マ ダム。…そうだった、俺は、 色のクリスマスを生き延びたミコトのみこちゃんでした。まこちゃんと同じなのは容姿だけか。

確か…クロコボーイとロビンさんと遊んで、それから海に出て「覇気だけで俺を倒す事はできん」とか言いながら、一人でとある老師ごっこをして疲れて寝たんだったか。

俺、寂しすぎるだろwwwワロスwwwワロス…。

「あたしって、ほんとワロス…」

そんな馬鹿な事を言いつつ、いつもの様に思考に耽っていて気付かなかったんだが。目の前に広がる景色は、あたり一面が真っ白の雪景色ではないか！

あれ？いつピ チュウから降りたんだったっけ…？

うーむ…だめだ、思い出せない。まあいいや。

ふむ…、ずっと降っている雪に森？…ここはもしかして龍 村かね？
あんまんのために村に雪を万年降らせるあんまん大魔神と、あのちよっと大きな緑のうさぎさんが「悪撲滅運動なのだーっ！」と道行く人々を襲っていくという。

昔パ リだとかなんだとか叩かれていたが、俺の中ではナンバーワンだわ。ゲームで素直に泣いたのはアレが初めて最後だった。

ああ…あさひたん…はやく俺を撲滅運動しに来てくれ…！！いや…君は彼方君のペットだもんな。俺が撲滅される役を取ってはいけな
いな、うん。

そんなこんなで、自分でもわからないうちに、龍 村のようなよく

わからない場所に来ていたミコちゃん。

いけどもいけども雪景色。綺麗だわー、なんか年甲斐も無く雪合戦でもしたいくらいだ。もう何歳だ俺？100超えてたか？

なんか頭だけ老化が激しい気がする。身体が若いままというのが原因なんだろうか？またちゃんとした医者に見てもらわなければ。

スリラーなおうちのドクトル・ホグバックは駄目だ。あいつに頼むと何か余計なもの付けられそう。あいつは人の話を聞かないからなあ。

しかし、なんつーか、疲れた。非常に身体がだるい。というかおなかが減って力が出ない。

助けてー！アン　ンマーン！なんて叫んだら、あの正義の味方さんは来てくれるのだろうか？

そんな事を脳裏に浮かべながら、ちょっと一休みって感じでへたりこんだわけです。

それはもう某無限城のカミナリ様の如く。たれてます。すると何か変な生き物に俺は話しかけられた。

「お、おい。大丈夫かおまえ？」

「そ、その声は…木の葉　！！？？」

なんてことだ…ここはどうやらNARUTOの世界だったらしい。
という事は俺はでかい刀を持っているし斬り隠れの里の七人衆だったのか…。

なぞは全て解けたな。うむ、しかし木の葉 はこんなたぬきみたい
な小さいやつだったっけ？まあいいか。

しかしそうなるとやべえな…、俺抜け忍じゃん？こいつ追い忍だっ
たらいやだな…。よし名前を聞かれたらまことのまこちゃんにしと
こう。

「オレはチョッパーだ！」

「ちょwwwパーですわかります。かわいいですね」

「う、うん？何かイントネーションが違う気がする…。…褒められ
ても嬉しく思ったりしないんだぞコレ！」

なんだよ、やつぱりツンデレな木の葉 じゃねえか。こいつは嘘を
ついちよる。まあいいんだけどね。俺も偽名使う気まんまんだし。
チョッパーはトグロな弟みたいな肉体で「パンプアップは ックス
より気持ちいい」が口癖だろ。

そして名前とか色々聞かれ、まことっていいます、まこちゃんって
呼んでね！って可愛く言う俺がじゃすていす。

何かじーっと見つめてくる木の葉 こと、ちょwwwパー。も
しかしてこいつ、アラバスタの奴等みたいに幼女をいじめる趣味で

もあるのだろうか？

「あう……………いぢめる？」

「い、いじめたりしないぞ！それよりどうしてこんな場所で寝転がってるんだコレ？」

俺はとりあえずまこちゃんごっこをしだす。なんでねっころがってるって言われてもねえ…。

「こんな現実見たくなかった。未来を信じたかった。おにぎりが…
すきなんだな…」

「はらへってるのか？」

「うん」

もうおなかですいてるし、なんだか身体はだるいし、何のやる気もないっていう。

べとーつと雪の上で寝転がっているとちょｗｗｗｗッパーはなにやらこちらを不憫そうな目で見てきやがる。

「うーん…今食べ物持っていないぞ…」

「チッ」

「今舌打ちした!？」

せっかく可愛く俺はまこちゃんごっこをしてやったのに、こいつは食べ物を持っていないという。使えない奴だ。

「おーなーかーすーいーたー!！」

「…」

もう俺は自重しない。ねっころがってする事は駄々をこねる事だけだ。いいい。

しかしこのちょｗｗｗｗｗｗッパーは変な表情で俺をじっと見て悩んでいる。おそらく悲しい現実に立ち向かおうとしているのだろう。頑張れ！木の葉！

俺は某眼鏡教師のように熱いエールを送る。

「…オレん家くる?。」

「あう……………いぢめる？」

「い、いじめたりしないぞ！それよりどうしてこんな場所で寝転がって…会話がループしてるうううううう！！？」

「無限ループって怖いよね」

二回同じ事をするのは鉄則だと、えろい人が昔言っていた。なにやらちょｗｗｗｗｗｗツパー困ってます。

いや何かすまんね。なんかお約束みたいなもんなんだよ。反応がいいからついな。ごめんな木の葉。

side ちょｗｗｗｗｗｗツパー

ドクトリーヌにおつかいを頼まれて、おつかいの帰りに、オレは森で倒れている白髪ロングで黒ワンピースの少女を見つける。そのままの姿では怖がらせてしまうと思い、小さくなって話しかける。

「お、おい。大丈夫かおまえ？」

「そ、その声は…木の葉　！！？？」

何やら驚いているようだが、街の人間のような感じではなかった。というか名前が違う。

「オレはチョッパーだ！」

「ちょｗｗｗｗパーですねわかります。かわいいですね」

「う、うん？何かイントネーションが違う気がする…。…褒められても嬉しく思ったりしないんだぞコレ！」

どうやらこの小さい姿を褒められたようだ。嬉しいんだなコレ。ちよっとくねくねしてしまう。

名前やら色々聞いてコミュニケーションをとってみる。別段怖がられてはいないようだ。

じーっとこの子を見ていると、なにやら怯えた表情をしはじめた。

「あう……………いぢめる？」

「い、いじめたりしないぞ！それよりどうしてこんな場所で寝転がってるんだコレ？」

とりあえず誤解を解いておく。うーん？なんだろうこの子？そして、何故こんなところで倒れているのか聞いてみる。

「こんな現実見たくなかった。未来を信じたかった。おにぎりが…すきなんだな…」

「はらへってるのか？」

「うん」

どうやらおなががすいてて倒れていたらしい。行き倒れだったのか。可哀想だ。

今食べ物を持っていないことを伝えると何やら舌打ちの音が聞こえたが、多分気のせいだと思う。…そう思いたい。

そして何やら駄々をこねだした女の子。うーん…困ったぞコレ。ドクトリー又にあわせても平気だろうか…？

なにやらオレに期待するような眼差しでみてる女の子にオレは、
ついつい言ってしまう。

「…オレン家くる？」

「あう……………いぢめる？」

「い、いじめたりしないぞ！それよりどうしてこんな場所で寝転がって…会話がループしてるうううううう！！？」

なんだか混乱してきたぞコレ。なにやら微妙に嬉しそうな表情でオレを見る女の子。あんまり表情の動かない子だなあ。

…というか、もしかしてからかわれてたのかな？いや、小さい子を疑っちゃ駄目だ。オレのほうが大きいんだぞ。大人がしつかりしないと。

とりあえずオレン家に連れて行こう。こんなところで一人にさせちゃ危ない。

「とりあえず…ついてきて?」

悩んだ末、この子連れで行くことにする。

s i d e o u t

やばい、ちょwwwwwwツパーをからかうの楽しい。

こいつなかなか良い奴っぱいな。最初は追い忍かとおもったけど。どうやらちがうみたいだ。

すげー困った顔してる。おらなんだかワクワクしてきたぞ!!

「まあ、おなかもすいたし、ちょwwwwwwツパーで遊ぶのはこ

れくらいにしといて…いいっか」

「オレ遊ばれてたの!？」

なんか混乱しているちょwwwwwwツパーをなだめながら、俺はこいつについていくと楽しそうだと思いついて行った。

D i v e 1 ちょwwwッパー（後書き）

人物紹介

ミコト 見た目はバ スカのロリィな、まこちゃん。 ゲ ハのよ
うに脳内にチップが埋め込まれている。

ちょwwwッパー 雪の降る地方の草むらに出現する木の葉。

糸と冬であ　こさんは即了承

毎日厳しい寒さに見舞われていますが、いかがお過ごしでしょうか。おかげさまで、元気に暮らしております。

ありがとうは言わない。俺はずっと心の中に隠しておく。何か夢なんて持っていたのだろうか。

たとえば俺が昔助けた狐が、記憶をなくしてまで人間になって恩返しにきたりして、毎日をしっちゃんかめっちゃんかして過ごし。その狐を助けることが俺の夢だったのだろうか？

月をみながらふと、ありもしない記憶に想いを馳せる。

思えば好き勝手生きて、何も考えずに日々、過ごしてきた。

横に寝ているモリア、そして俺も半目で寝たふり。それをドフラミンゴさんが微笑みながら見守っている。

両手には雪がふりそそぐ。こんなセンチな気分は自分には似合わない。幸せになんてなつてはいけなかもしれない。そう思いながらも、俺はこの状態に何故か満足していた。

「おい、起きてんだろ？ミコト」

「うん…習慣だからな。人間すぐ変わるわけじゃない。また馬鹿ををすると思う。迷惑かけまくりんだと思うんですよ」

どうも狸寝入りはばれていたらしい。小声で俺にだけ伝わるように声をかけてくるこいつ。流石ドフラミンゴだと思った。もう俺はこいつに一生敵わないかもしれないな。いろいろな意味で。

「奇跡も魔法も無いけど…楽しい日常はあるかもしれないな…」
「てめえがそうしたいなら、そうしたらいいさ。俺はあんたにずっとついていく…だからアホみたいな面して笑ってろ」

俺は横で寝ているモリアを起こさないように、起きているドフラミンゴに小さな声で語りかける。
それに優しい表情で俺に小さな声で答えるドフラミンゴ。俺はどうやらイノセントなファイナーレ にたどり着いたようだ。
そして俺はこうなった経緯を思い返す。

アレから、俺はチョッパーと医者だと言うババアに飯をたかり、やれやれだぜとでもいうような表情で俺を見るチョッパーをからかったり過ごし、それからこの島を出ようとこいつらが起きないように家から外に出る。

チョッパーをからかうのも楽しいのだが、何かモノ足りなさを俺は感じていた。

それが何だったのか俺にはわからないし、何も思い当たる節は無い。これは既知感なのだろうか？いつ永劫に回帰するような世界に来たのだろうか？

そんな風に外を出て俺はいつものごとく妄想しながらブーンをし、この雪景色を駆ける。

なんだろう？こんな記憶あつたはずが無いのに。俺は記憶に苛まれ、ちゃんと寝る事が出来ない。

こつちに来てからの両親を　した奴に俺は生きる術を叩き込まれた。言葉にすればとても短いだろう。

だがその日々は辛くはあったものの、とても輝いていたような気がする。

思えば親代わりのようなものだったのかもしれない。

そしてそんなある日。そいつも街のボスにやられ、俺はまた独りになる。

ここは昔と変わらない、そんな場所だと思った。

だから俺は”外？に出た。アレからどれだけの歳月が過ぎていったのだろう。

俺は好き勝手に生きてきたと思う。齢も三桁にいくかいかないか。もう満足かもしれない。ただ心残りがあるとすれば…。

そんな風に考えながら俺が「これがガルウイング！」「あらぶる蝶の舞」など言いながらブーンしていると。突然俺の身体が動かなくなる。

足が…足が動かない…この世界に生まれてきて、自分の好き勝手に走ってきた…

ときには楽しい事、ときには悲しい事もあった。ただ自分が走るだけで…ただ走るだけで皆笑ってくれていた…

それだけで…俺はうれしかったんだよ。うん…うれしかった…

でも…いつの日か、こんな日が来ることはわかっていた…みんなありがとう…

等と、とある所を元気にブーンする奴と自分を重ね合わせて、感謝を天に向かい祈っていると。懐かしい声が聞こえてきた。

「てめえ…探したぞアホ。人の部下達気絶させて抜けるとはいいい度胸してるじゃねえか」

かるうじて首から上は動かせたので、振り返ってみると、そこにはドフラミンゴお母さん。おつかいをしに行こうと旅立ったあの日。

アレから何日たったのだろうか？

どうも探してくれていたらしい。書置きの手紙をそっぴいば置いてくるのを忘れていた。

これはやばい怒られてしまう。

糸？ かなにかはわからないが能力で身動きが自由に出来ないおれは、とっさに思いついた言い訳をする。

「だって…だって寂しかったんだもん！！ひとりでいるすばんなんてやだもん！だよもん！」

「…」

俺はツンデレごっこをするつもりが、何故かツンデレごっこにならずに素直に何かをほざいてしまっていた。目から流れる汗はなんだろうか。ブーンし過ぎてかいた汗が目にしみる。

「まあまあ仕方ねえじゃねえか。こうしてこいつも無事発見できた事だし。あとは帰ろうぜ！キシキシキシ」

「つつてもよ？こいつまた抜け出すかもしれねえぞ？そんな時はどうする？また今回みたいに隠しとおせるかどうかもわかんねえんだぞ？」

いつのまにか俺の側にぴょんと座り込んできて、ドフラミンゴに話しかけるのは我等が人形使いのモリアさん。なにやら笑いながら俺の横に笑顔で座っていらっしやる。

「そんなときはそんなきだろ！キシシシシ」

「はあ…考えてるこっちが馬鹿らしくなってきた。帰るぞミコト」
「了承」

俺はちょっと怖かったり、探しに来てくれた二人に内心喜びがひろがりんぐな状態だったのだ。ついとあるジャムが作るのが得意な水瀬家の大黒柱の方の台詞を言ってしまった。

三人仲良くおててを繋いで、この綺麗な雪景色を眺めながらでっかいモリアさんの船の中に俺のピチュウも入れて乗る。
そして今現在に至るわけだ。

「毎日楽しい事しようぜ。三人でさ」
「ああ…悪くねえ」

こう言いながら、ドフラミンゴ母さんと雪が降る空を眺める。こんなにも落ち着いていた気持ちにさせてくれるのは、この幻想的な空のせいだと思いたい。

結局誰も信じては居ないが、別に信じなくてもいいんだ。楽しければそれでいい。

この二人が俺の側に居ない時は、俺はどっかに飛んでいってしまうかもしれないが。

そう思いながらこの、俺の人生を語った手紙を、傷つけてしまったかもしれないあいつに、俺は届けるためにしたためる。まだ記憶が残っている内に。

これから、どういう風に俺は三人と過ごしていくのだろうか。もしかしたらあの娘も仲間に入って遊ぶかもしれない。

そんな未来もあつたらいい。

原作に入る頃には俺の記憶は全て消えてしまうのだろうか？

それに恐怖する事はあるけれども。ふざけまくって楽しんでやろう。

この綺麗な、同じ空の下で。俺たちは繋がっているのだから。

長い間のご無沙汰、お許しください。

ご家族やあの頃の海軍の皆様によりしくお伝えください。

サイダー様へ、ミコトより。

糸冬

0 話・クリ ス中止のお知らせ（前書き）

登校中断しても、コレをお気に入りに入れているモノ好きな人達のための、ちょｗｗｗｗつと早いクリ スプレゼント。

にはそれぞれ読者の皆様が好きな文字を入れてね。

一章で終わりで後は各自妄想E N Dでもおk。こっそり再開。
良い子の皆には内緒だZ E （ ^ ^ ）

0 話・クリ ス中止のお知らせ

大地に降りた俺、月を隠し、ついでに自分のあこも隠す。どうも、ドラマCDのジャケットで半裸の、永遠の8歳幼女ことミコトちゃんです。

もう一人半裸の奴は誰だつて？クロコボーイだよ。

…ほんと、誰得だよ。マジ怒りの日だよ。黄金の獣殿もお怒りだぜ。これには、ばかすみさんも苦笑い。

…いやー、世間ではメークリウスさんが苦しんでるらしいですよ？そういう行事があるらしい。

世の中のカップルを覆面全身タイツの独身貴族が襲う事件が多発してしまふ世界情勢。

世知辛いなあ…まあもちろん嘘だけだね。

いや、クリスマスくらい知ってますよ？馬鹿にしちゃあいかん。

確かに痴呆かなにかはわからないが、とても忘れっぽくなってしまった俺なんだが。

ちゃんと今日この日が何をする日かは覚えている。

アレでしょ？スクリーンショット自板で、デスクトップの中に居る嫁と一緒にケーキを食べてる所をSS撮って、

いろんな人に嫁自慢する日なんでしょう？いやあ、自分もこの世界に来る前はよくしたもんですよ。

タッチパネルの液晶モニターにクリームたらして、モニター舐めるくらい金をかけている勇者には、ネタと金で負けましたが。

懐かしいなあ、自 病の症状スレとか生きてるのかな？飽きてツイターに移行し、もう行かなくなつてどれくらい経つただろうか。

等と、瞳を閉じて糞スレを思う。平 堅のような前世を懐かしむ思考に耽つてしまう俺。

前世…？うーむ、そんなものもあつたな。多分。

「何やってんだミコト？」

「えへへ…くりーむつくつてるの！」

よくわからない記憶に想いを馳せて、クリームをぐるぐる！ぐるぐる！している、モリアさんに話しかけられました。

みなさんご存知ゴスロリ少女でツノがある鬼っ娘もとい悪魔っ娘、

モリアさん。俺より身長高い。ぐすん…。

もちろん話しかけられている俺の顔には 射されたかの如く、お鼻やらなんやらにクリームが飛んでいるのはご愛嬌。

「キシキシキシ、ケーキでも作ろつって言うのかよ」

「な、なんのことを言ってるのかわかりませぬなあ…」
「いや、拳動不審すぎて逆にバレバレだよ、ミコト」

むう…：日ごろお世話になってるモリアさんとドフラミンゴさんの二人を、びつくりどつきりさせる為にわざわざ自分の船に来て作業をしていたというのに。

まあ、別にいっかー。そうなのCAR…。

ドフラミンゴさんはお仕事で居ませぬ。そうだ。

「じゃあ…モリアもケーキ作るのでつだってー」

「やっぱりケーキを作ってたんだな。おk任せろ。あたしが料理できるという事を見せてやる！」

と、なにやら腕をまくってやる気満々なゴスロリ少女。

そういえばこいつ料理できたっけ…？しまった…俺の記憶じゃ…

「なあ、スポンジケーキってスポンジ焼けば良いのか？」

「おいやめる馬鹿、スポンジ焼いて熱々な五 衛門風呂でも入る気か！早くもケーキ作りは終了のようですね」

うん、こいつ料理は駄目だった。だからドフラミンゴさんに一任してたんだ。

ドフラミンゴさんが居ないときはどうしたかって？もちろん全部俺だよ俺。すっかり忘れてたわ。

こいつ一人に作らせるとバイ ハザードがリアルで起こるんだよ。

誰かがついて見ていないと駄目。
めんどくさいけど、生きていたいでしょう？生命の危機はイロー
の放つレーザービームだけでいい。

「コレいいにおいだな！コレいっぱい入れようぜ！キシキシキシシ」
「ちょwwwwwwおじさんwwwwwwバナエッセンスを大量
に入れたら、緑で無表情な俺とキャラが被る少女とピンクのぬいぐ
るみがこ　こ　に来てしまうYO」

「あたしは女だ！…緑の少女とピンクのぬいぐるみってなんだよ！
！」

ウオ　コット中佐はジャステイスだ。あんな上司と世界征服したい。
ミルフィー　がもしこの世界に居たら、とても楽しい日常になるだ
ろうなあ…

というかG　はこいつに教えてなかったか。俺もまだまだこいつに
教える事があるな。

「俺の太古のメモリアルだ。また今度教えてやるよ」

「あー…あのよくわからない話か。前世やらなんやらとか、お前ボ
ケ進んでるのによく覚えてるのな」

「確かに…俺の記憶ぐちゃぐちゃすぎるのに、いらん事だけよく覚
えてると思う。しかも自分に都合の悪い事は忘れてるっていうwww
wwでっていうwwwww」

「…」

じと目でモリアさんに見られてしまった。

「さて、そろそろ生地混ぜるか」

「おい！あたしなにもやってないぞ！」

「おまえは俺を見ているだけでいい、それが俺に対する愛だ」

「愛か！それならいい。キシキシキシキシ」

愛してるえー！いや愛なんてないけどね多分。

生地をねるねるねー ねする俺をにこにこ見つめ続けるモリアさん。自分で言っというてなんだが、何か怖い。

一人で混ぜるのはだるいな。…混ぜるくらいなら任せられるか？

「混ぜるくらいは出来るだろ。多分。任せるわ」

「あたしに任せとけ！」

素直に俺の言うとおり混ぜてくれているモリアさん。やれば出来るじゃない！ 会活動できるじゃ（ry

後は何を入れようかなー。木の实とか入れたいね。だが悪魔の実なんて間違えても入れてはいけない。

俺が一般人じゃなくなってしまうからだ。…うーむ。

「芋がないと失礼だ」

「は？」

何か不思議なものを見てしまったような目で俺を見るモリアさん。芋は無いのか？この世界。まあ芋ケーキじゃなくてもいいつか。下手にアレンジをするのはいけない事だ。何のためにレシピというものがあるのか。それは、へたくそでちゅねーwwwwwwな人でも普通に料理を作る事が出来るようにするためである。アレンジなんて本職がする事なんです。シャ丸さんみたいに素人はしちゃメツ。

そして、そんなこんなで、妙なテンションでモリアさんとケーキを作ったわけですが。ふたりともクリームだらけで何かエーいです。でもおっはしません。そして出来てしまったモノを見てなんともいえない気分になった。

「すごく…大きいです…」
「…なあミコト、これ何人分のケーキだ？」
「お前らの部下も呼べるくらいです…」

少々調子に乗りすぎて生地を作りすぎたようだ。焼いたらこんなに大きくなるなんて思わなかったよ。

形作っていくにつれてどんどん大きさが当初の予定より大分大きくなってしまった。まるで結婚式のケーキ。

膨張率が大事だ！とか結婚初夜に言い訳する、みつともない男を想像してしまった。

「当初の予定は三人で小さく縮こまって、くるしみますばーちいをする予定だったが、予定は変更だな……」

「クリスマスな…これは三人じゃ食べきれないよ…お前アホだろ…」

「…ふん、失礼な！俺はある女神の鷲羽さん並に天才だぞ」

「じゃあ早く魍 鬼作ってくれ」

「喋る生ものはちょっと難しいっすね…」

うむ、まったくもってその通り。

喋る生ものを作るには材料と設備が足りないのだ、ここがとある科学と魔法と学園モノの世界ならできたのだが。

・・・魍 鬼は可愛いよな。あの子嫁にしたい。宇宙船にもなるし、とある魔法少女の白いマスケットとは大違いだ！

関係ないが、ちゃんと突っ込みも入れてくれるモリアさんに、俺の処 をあげても良いかもしれないと少し思った。

「まあそれは一旦置いて…後は、モリアの船に飾りつけたりツリー置いたりするだけだなー」

「サンタのコスプレもしようぜ！キシシシ」

「いいなそれ！俺血塗られたサンタクロ の役やる！」

「意味わかんないけど面白そうだな！」

うむ、ツリーをどうすつか迷うな。船の柱そのまま使ってもいいんだが…

まあそんなに凝らなくてもいいよね。こういうのは気持ちが一番大事だというし。

そしてサンター×サンターのコスプレでもして遊ぶのも一興だろう。こうしてモリアとかと船内を飾りつけていった。

そして飾り付けを終え、ドフランミゴ母さんがお仕事から帰ってきます。

「おいイ？なんだこれ？」

「私メリー、今貴方の後ろで永劫回帰してるの」

「…」

そしてすかさずドフラミンゴさんの背後に音も無く現れて、メリーさんごっこをする俺。

久々にグラサンがずれてがたっとなっているドフラミンゴさん。嬉しすぎて言葉も無いようです。

「キシキシシシ。こいつ、あたしとおまえのために頑張ったんだよ」
「…マジかよ。人間売ってくる」

「おういえあ！今日はパーティなのです。ケーキちょっと多めに作りすぎちゃったから部下の子達もおいでー」

「……姉（御）さん！！ごちになります！！」「……」

数人母さんの直属？の女の子の部下達が居たのでその子達も呼ぶことにした。

何故か俺はおねえさん呼ばわりされてます。男なのにね？おかしいね？でも訂正するのもめんどくさいからほっておく。

モリアのこの部下は俺を見ると怯えてしまうので、その子達は遠くからパーティです。ちょっと悲しかったりしないんだからねっ…ぐすん。

そして皆でワイワイチャ～ンの如く、楽しくパーティで飲み食いしてるわけです、はい。

「お前、料理だけはまともだよな？変なアレンジほとんどしないし」
「失礼な、俺は全身まともだ。料理は下手にアレンジをすると、とても恐ろしいゾな事が起こるのを…俺は知ってるからな」
「確か…触手生えたり、ビーム出たりするんだっけ？」
「うむり」

そう、下手にアレンジなんてしてみる？ケーキから触手が生えてきて18禁になってしまうからな。

俺はそうなるのを避けたんだよ。しーげつとみーこわいでしよう。

そして着替えたりして、モリアとサンター×サンターをお披露目したり、モリアがちよつとバイオレンスな人形劇したり。

ドフラミンゴが「人形劇か、任せろ」とか言いながらそのあたりにいるモリアの部下の身体を自由を奪って、リアルサンター×サンターをした時はモリアが慌てて止めていた。

俺も「ええぞ！ええぞ！」言いながら、ちよつと酔ってるのかな？と、少し船が壊れないか心配するくらいドフラミンゴさんはっちゃんけていた。

いつもは真面目なドフラミンゴ母さんも、酔うとはめをはずしてしまうのは仕方ないね。（許容の精神）

皆ファッキンセットのおもちやで遊ぶ子供達のようなテンションで、楽しんでます。微笑ましいですね。

そんなこんなで、俺はふと酔い覚ましに甲板に出た。

「俺は時惑いでも受けてるのだろうか…」

ふと、自分の置かれた状況、あの楽しさの中に既知感を覚えるような14歳病が発症してしまう。

もしかしたら明日、俺がつかい月ノ輪グマという時計の神の生贄に捧げられてしまうかもしれない…という予知ごっこをした。

…ちよつと疲れてるのかもしれない。ケーキ作ったり、飾りつけしたり、自分が楽しかったから良いのだけでも。

自身の記憶に自信が持てなくなったのはいつからだろうか？前世？よりは長生きしているので仕方ないっちゃ仕方ないのだが。

「何辛気臭い面してやがる」

「おかーさん。俺、月ノ輪グマに食われるらしい…」

「相変わらず意味わかんねえ…」

甲板で未来の自分に悲しみが鬼なっていたところにドフラミンゴ母さんがおいでなすった。

あれれ？さっきまで船内で暴れていたはず。何故ここに来たのだろう？

横に来て俺の頭をぽんぽんとパーで叩く。

「俺がアホになったらどうするんだー！」

「それ以上馬鹿になる心配は無いから安心しろ」

なにやらにこにこ俺の頭をポンポン叩き続けて笑ってるドフラミンゴさん。

機嫌良いですね。俺はちょっとむかつとしました。でも怖いのでなにもできません。

「・・・お前らには感謝してる。今の俺があるのはお前らのおかげだ。ありがとな」

「なに急に真面目な事言つてやがるんだ？食あたりでも起こしたか？てめえに真面目は似合わねえよ」

「ひでえ言い草だなおいwwwマジワロスwwwわろす…関係ないけど、お前人身売買してないんだってな」

「あんなのはもう時代遅れ、時代はスマイルだよ。フフフフ…」

なんか何十年ぶりくらいかわからないほど久々に、真面目に人にガンシしたというのに、こいつは俺が食あたりを起こしたという。時代はスマイル？こいつ鈍器なホーテの店員から、マックなドナル

の店員にでもなったのか…スマイル0円何回頼もうかね。フヒヒヒ…

「……いや、こいつの笑顔は怖い。裏で何してるかわかったもんじやねえってばよ!!」

俺はなんだかげんによりした気分になった。そもそも俺はマナルで一体何を拾い食いしたのだろうか、真剣に悩んでしまう。

「なにやってんだよお前ら。キシキシシ」

「おいやめろ馬鹿、俺を海に落とす気か」

「モリア、お前そうとう酔ってるな？まあいいけどよ。フフフフフ」

-
-
-

なにやらドフラミンゴさんとお空の月を眺めながら、俺の大事なお腹の行く末を案じていると、ドフラミンゴさんと俺の間にモリアさんかぴょんと来たのです。

こいつ会う度、俺に向かつてタツクルする癖がある。俺に毎回タツクルしながら来るのやめてもらえませんかねえ……？俺はお前のベツドじゃないんですよ……

「キシキシキシ。三人仲良くダイブだー！」

「おい、こらモリア！」

「モリあ
”あ”
”あ”
”あ”
”あ”
”あ”
”あ”
”あ”
”ああ”
”あ”
”あ”
”あ”
”あ”

あ
”あ”
”あ”
”あ”
”あ”
”あ”
”あ”
”あ”
ああ！
」

俺が本格的 鳴の如く、叫び声をあげたのは悪くない。絶叫はパワ
ーだぜ。

何をとちくるったのかわからないが、モリアが俺とドフラミンゴの手をにぎって海にダイブしたんです。わけがわからない。どっぴーんと海に落ちる俺たち。後で船までこいつら運ぶのは俺なんですよねえ…俺は思わず苦笑い。

「キシキシキシ。ミコトはずっと笑ってろ、そのほうが面白い」

「コレが、世界の選択なのか…ウミ・ノナカ・アタタカイナリィ…」
「ク、ハハハハハハッハハハ！」

海で馬鹿笑いしながら苦笑いの俺にしがみついてるお二人さん。いや、糞寒いですよ？

風邪引いたらどないすんねん！！こいつらに酒飲ませたら駄目だな…来年のクリ　スは中止のお知らせです。

月明かりに照らされながら、雪が降る海に漂う俺ら。これが月光のロン　ってか？もう訳がわからないね。

でも何故か馬鹿笑いしている二人を見ると、自然と微笑んでしまっている俺が居た。

0 話・クリ ス中止のお知らせ（後書き）

自分は根っからの草民だからよ、こういう事もするんだね。
超不定期更新で実は原作へ続く？ かもね。（便乗 貴）

人物紹介

ミコト 血塗られたサンのコスプレをした男の娘 思考はフリー
ダムに乗ったキ で出来ている

モリア 原作と違い性別反転しているゴスロリ少女 ミコトの影響
をモロに受けている

ドフラミンゴ 実は人身売買してない人 裏でもっと色々悪い事
してるらしい

0・314159265358979323846話(前書き)

わんぴーす・・・？なにそれ？

ひとつ人の世に産み落とされし。

ふたつふた　りじゃないけど。

女装するのがジャステイス。

みつつそろってミコトちゃん！よつつ夜桜見たくなるお年頃。

人に抱かれるたびに胸がきゅんきゅんして痛むの。

まあ抱かれたりしないけどな！ほとんど。

いやあ、クリスマスは中々楽しかった。

ドフラミンゴさんやモリアさんも楽しんでくれたと思います。

というかね、あのクリスマスパーティー以降なんか肩凝るんですね。
なんか重しでも乗せられたのだろうか？

気になって俺は医療室に行く途中であつたりする。

「パンツー!!」

「ビクンッ!」

「フォスフォスフォス……ミコトちゃん。シンドリーちゃんが怯えるからやめたまえ」

「ぼくは妄想狂のレッテルを張られたガクで、大陸経済界の黒幕。世間では死んだとの噂のアイドルミコトちゃん。その名を知らぬものは居ない銀幕スターのシンドリーちゃんとキャッキャうふふしてるりあみつるを撲滅しにきました」

「相変わらずおれのはなしを聞いてくれない！！そこにしびれる憧れるウー！！」

「シンドリーちゃん！パンツ脱いでるかね？少女の無垢な下半身が見たい！」

「わかる！！すげわかるがおれのはなし聞いてくれ！シンドリーちゃん怯えてる！」

「ブツブツ……世界から……豚カツのレストランなんて消えてなくなればいい……ブツブツ……」

俺は必ずここに来るとき、パンツと叫んで入室する。

ビクンビクンするシンドリーとかいう女の子が面白いからだ。りあみつると話す事なんてあったっけ？

「シンドリーちゃんは相変わらず面白いなあ……」

「おれの話聞いてくれなさすぎる！というか完全無視！？おれパンツ脱ぐぞ！」

何を勘違いしたのかパンツを脱ぎだすドクトル・ホグバック。あいかわらずこいつは人の話を聞かないからなあ。

「ん？ああ、君。君はぼくを侮辱する気か？右手に三十八口径左手にパンツを持つてすぐに履けと命令する。むさい男がパンツを脱いで何が楽しい？馬鹿じゃないのか君は……」

「ブツブツ……世界から……パンツを人前で脱ぎだす。むさい男なんて消えてなくなればいい……ブツブツ……」

「ミコトちゃん……シンドリーちゃん……酷いぜ！ぐすん……」

俺が冷静に返すと、なにやらいじけているホグバツク。
はて？俺は何をしに来たんだったか。

相変わらずここに来ると、可愛い少女ゾンビ？がいっぱい居る。
テンションがあがって仕方が無い。ついパンツ教授になってしまう。

そして、俺は少女達に演説をしはじめる。
布教活動の一環である。

「今ここに集っているゾンビ少女達は何もかもが不揃いだ。例えば彼女は産まれながらの異能者。処刑されたはずの連続下着泥棒。退役海軍軍人。キセルを常にすっている物理学者。高級娼婦。一体コレは何の集まりだ？」

「……？」「……」

「全人類からクジか何かで選ばれ、集められて居るだけか？……違う。我々を結集したのは願いだ！ただひとつの欲求のためここに集

った。ぼくらは巡りあつた！条件はここまで整っている！」

「「「「あつ！」「」「」

思い出したように下半身に手を当ててパンツを脱ぎだすゾンビ少女達。

よく訓練されたゾンビ少女達である。

「そう、少女の無垢な下半身が見たい！！」

「「「少女の無垢な下半身が見たい！」「」「」

「ならば我々は何をすべきだ？諸君一つ聞いておこつ。ちゃんとパンツは脱いでいるかね？」

「「「「はいっ！」「」「」

うむうむ。大変素晴らしい。

クリスマスパーティーからだろうか？

ゾンビの少女達が怯えているだけから、自分のノリに合わせて遊んでくれるようになった。

大変嬉しい。

「シンドリーちゃん！おれの無垢な下半身を見せてくれ！！」

「ブツブツ……世界から……下半身露出狂男なんて消えてなくなればいい…ブツブツ…」

「再び言うようだが、むさい男がパンツを脱いで何が楽しい？馬鹿

じゃないのか君は……」

「……はいつ！ドクトル・ホグバックは馬鹿です！！」

「おれの扱い酷くね！？泣くぞ？泣いちゃうぞ？」

何故か下半身を露にし、シンドリーちゃんにせまるホグバック。
冷静にシンドリーちゃん達と突っ込むと、いじけてしまった。
むさい下半身露出男がいじけても可愛くないんだが。

「ああ、大事な事忘れてた。これが次のこの子達の調整メモと改造案だ」

「おお！！さすがミコトちゃん！仕事がはやい！毎度生き胆を抜かれるような改造案を楽しみにしてるんだぜ！！フォスフォスフォス……」

うむ。これを理解できるホグバックは下半身露出狂だが流石天才だと褒めてやりたい。

「ああそれと、最近肩が凝るんだが。診てもらえるかね？ホグバック」

「……いやそれは……ペローナが乗って……いやなんでもねえ。診よう」
「？」

ホグバックはよく脈絡の無い事を言い出すからな。
天才とアレは紙一重というが、本当にそうだと思う。

「……単なる疲労だともう。シップ貼っとけば直るぜ」
「さやか。世話になった。じゃあの」

「ブツブツ……ミコトちゃん今度一緒に豚カツのレストラン撲滅運動しよう…ブツブツ」

「……また来てね!」「」「」
「またくるおー。ばいばい」

シップをもらい、医療室を後にする俺。

さて、つぎは何処に行こう。
てくてく歩くぼくちん。
するとなにやら騒がしい奴等が居た。

「結婚して！！アブロサム！！！」

「落ち着いて素数を数えるんだ！！ローラ！！！」

なにやら追いかけてこしているりあみつる共が居た。
スリラーなおうちはコレだから困る。

「セイヤ！！！」

「おうふｗｗｗｗｗｗｗｗ」

蹄でアブロサム？かなんかをしとめて意気揚々と担いで走り去って
いく馬？っぽいもの。

「やれやれだぜ」

俺は肩をすくめて幸せそうなカップル達を後にする。
りあみつるが多くて独身貴族な俺は肩身が狭いぜ。
肩身がせまいというか肩が重いんだけどな。

歩いているとお庭に着いた。

そうだ、もらったシップ貼ったところ。

シップを貼ろうとしたら、何やら後ろから声が聞こえてきた。

「いい加減気付け馬鹿っ」

「おや？リトルガール。またこんなところでうろついて、君はいつも神出鬼没だね」

「神出鬼没じゃない！ずっとあんたの肩の上に乗ってたわ！！」

ふむ、紹介しておこう。

彼女はペローナ。中に核兵器が仕込まれていると噂のゴスロリ兵器少女だ。

「パンツ脱ぐ？」

「ぬがねーよ！！！！」

可愛いんだが、あのパーティ以降勝手に人の近くをうろろろする危ない人である。

「そんな……この強権的パンツ絶対主義者め！！！」
「意味わかんねーよ！！！」

俺はものすごく悲しい気持ちになった。

可愛く首を傾げてパンツを脱ぐかどうか丁寧に聞いたのに、彼女はパンツを脱がないという。

このスリラーなおうちには二つの派閥がある。

パンツ絶対主義者がそうじゃない者かの派閥だ。

ちなみにパンツ脱ぐ？とモリアさんやドフラミンゴさんに聞くと、笑って俺のパンツを脱がそうとする。

このスリラーの7割は俺と同じ派閥である。これが永遠のツォワル…そしてさきほどのカップルやこのリトルガール達ゾンビ？將軍とかはパンツ絶対主義者である。

356

「というか何で俺の肩に乗っているんですかねえ……俺は君の宿木でもないんですが……」

「私のオモチャになれ！！ご主人様からも許可は貰ってる！」

「いやあの、俺は俺のものなんで…俺の許可とりなさいよ…なんでモリアさんから貰うの……」

モリアさんというリトルガールといい、何故勝手に俺の事柄について決めちゃうのだろう？

これが噂に言うヤンヤン少女という奴なのだろうか？
……怖い。

「どうしてもなって欲しければパンツ脱いで生活してください」
「だからなんでパンツなんだよ！！……どうしてもって言うなら……
…その…ブツブツ」

リトルガールやその部下が俺の派閥に入れば、9割が同志になる。
これは素晴らしい事である。

そしてリトルガールの部下達が「ええぞ！ええぞ！」と言い、俺を
応援する。

彼らは隠れパンツ脱がせ隊である。
リトルガールがパンツ絶対主義者のため、隠れて活動をせざるを得
ない可哀想な奴等。

いつもこんな感じで勧誘するのだが、いつもブツブツ言い出すリト
ルガール。

「……いや、私まで洗脳されてどうする！パンツ脱いで生活なんて
やっ！」
「そんな……どうあってもパンツを脱ぐのを許さないと言うのだな
！？」

俺はちよつと怒ります。

勝手に自分のオモチャにしようとしたリトルガール、勝手に許可をしたモリアさん。

なんだかおらいライラしてきたぞ！！

「ぼくの考えを理解できない凡愚め！！もう怒ったぞ！！！」
「えっちょ……」

俺はリトルガールの呪縛から抜け出し、このスリラーなお庭から抜けようとする。

「諸君！！絶望するんじゃないぞ！！ぼくは必ず帰ってくる！そして全人類のパンツを脱がすであろう！」

[illegible]

「ダメだこいつら……早く何とかしないと」

「ぼくは諦めない！諦めないぞおおおおおおおおお
お！！！」

リトルガールに蹴散らされていくパンツ脱がせ隊。

俺はこいつらの犠牲を無駄にしない！必ず全人類のパンツを脱がすであろう。

ただし、美少女に限る。

「では、ぼくはそろそろ失礼させてもらうよ。パンツ禁断症状が出始めたようなのでね」

純粹に神の一部となるべく、俺はスリラーなおうちを旅立つ。

全人類のパンツは必ず俺が脱がす！

超クールだよミコトちゃん！と心の中のウリユーちゃんも仰っている。

これからパンツ絶対主義者を撲滅するための。

俺の旅が始まるのだ。

パンツ！

0・314159265358979323846話（後書き）

人物紹介

ミコトちゃん パンツ絶対主義者に敵対する天才科学者

ドクトル 下半身露出狂天才外科医

シンドリーちゃん 豚カツに恨みを持っている元銀幕スター

ゾンビ少女達 パーティ以降ミコトちゃんに対して親近感を抱く

ペローナ パンツ絶対主義者のリトルガール ミコトに懐いた

パンツ脱がせ隊 ミコトが組織した隠密部隊 主に美少女のパンツを狙う

さいきん健忘症かもしれないと、真剣に悩む打ってる人（リアル話）
りあるが忙しすぎた。ポケモンたのしい

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8424x/>

同じ空の下で

2011年11月20日10時49分発行